

東京都立産業技術大学院大学

ADVANCED INSTITUTE OF INDUSTRIAL TECHNOLOGY

AIIT FD レポート 第34号

2024年2月

<https://aiit.ac.jp/>

目 次

第 34回 FD フォーラム	1
2022 年度後期「学生による授業評価」結果の概要報告	40
2022 年度第 3 クォータ 教員各自のアクションプラン	52
1 共通科目	52
2 事業設計工学コース	56
3 情報アーキテクチャコース	61
4 創造技術コース	71
2022 年度第 4 クォータ 教員各自のアクションプラン	78
1 共通科目	78
2 事業設計工学コース	81
3 情報アーキテクチャコース	87
4 創造技術コース	97
2022 年度後期 コースごとのアクションプラン	104
1 事業設計工学コース PBL	104
2 情報アーキテクチャコース PBL	105
3 創造技術コース PBL	106

第 34 回 F D フォーラム

■第34回(2023年度第1回)FDフォーラム■

令和5年11月7日

東京都立産業技術大学院大学にて開催

参加者

[招聘講師]

芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター 特任教授 相原 総一郎講師
周南公立大学 教授 橋本 喜代太講師

[東京都立産業技術大学院大学]

橋本 洋志	学長	吉田 敏	研究科長
板倉 宏昭	教授	内山 純	教授
追川 修一	教授	奥原 雅之	教授
越水 重臣	教授	小山 裕司	教授
嶋津 恵子	教授	高嶋 晋治	教授
中鉢 欣秀	教授	飛田 博章	教授(FD委員)
林 久志	教授	前田 充浩	教授
松尾 徳朗	教授(FD委員長)	三好 きよみ	教授
三好 祐輔	教授	村越 英樹	教授
伊藤 潤	准教授	細田 貴明	准教授
田部井 賢一	准教授(FD委員)	五十嵐 俊治	助教
王 中奇	助教	河西 大介	助教
黄 緒平	助教	柴田 淳司	助教
佐藤 里恵	助教	張 晁逢	助教
松井 実	助教	横山 友也	助教

■開催内容:

- ー13:00 -13:05 学長挨拶 橋本洋志学長
- ー13:05 -14:25 相原 総一郎講師による講演
「MGUDS-Sによるグローバル・コンピテンシーの測定:芝浦工業大学の取り組みから」
- ー14:35 -15:55 橋本 喜代太講師による講演
「大学院の海外展開の実情と今後の発展に向けて」
- ー15:55 -16:00 吉田研究科長講評

令和5年11月7日（火）

○開 会 午後 1時00分

松尾教授 はい、お疲れ様です。今日は、第34回FDフォーラムということで、東京都立産業技術大学院大学、始まって15年になりますけども、34回ということで、また後ほど講師の方のご紹介させていただきますけども、今日は非常に素晴らしい講師の方2名来ていただいております。

まず、このフォーラムに先立ちまして、本学の橋本洋志学長より、ご挨拶いただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

橋本学長 皆さん、こんにちは。改めてFDの意義でございます。ファカルティ・ディベロップメント、これは定義としましては、大学教員の教育能力を高めるための方法を、大学全体として取り組む活動を指します。本学は、改めて申し上げますと専門職大学院です。この意味というのは、文部科学省の定義及び東京都と産業界の要請に従って、産業技術分野において、国内外で活躍できる高度専門職業人、すなわち高度プロフェッショナルを育成することを第一の使命としております。これが言っている意味は、今技術革新ですとか価値の多様化ということで、20代までの教育では、なかなか社会で活躍が難しいということ、これは国内のみならず国外でも認識で今ほぼ統一されてきております。その高度プロフェッショナルの育成というのは、言えば簡単なんですが、技術革新が激しい現在、大学人にとって何年も同じ教授法が通用するということではなく、日々教授法を全員で見直し、改善を図ることが必要です。その糧となるようFDというのがございます。

さらに本日におきましては、お二人の講師をお招きしております。お一人は相原総一郎先生で、芝浦工業大学教育イノベーション推進センターの特任教授でございます。先生のご講演では本学が重要視していますグローバル・コンピテンシーの測定についてご講演を頂戴します。お二人目は橋本喜代太先生で、山口県の周南公立大学の教授でございます。ご講演はグローバル人材育成で重要となる大学院の海外展開についてご講演を頂戴いたします。今グローバルというのは、今までの大学、特に学部や、そのまま上がるマスターディグリーの価値ではないなというのは実感してまして、東南アジアのみならず、インドも含めたアジアにおいてはプロフェッショナル人材が足りない、とても足りない。ですので、そこで人材の流動化というのは国内のみならず海外においても、もう今、盛んに始まってきております。その際に、どういうふうに評価したらいいのか、どうやって育成したらいいのか、どうやってその共通項目をつくっていったらいいのかというのは、喫緊の課題というふうに感じておりまして、そのタイムリーな話題というのを今日お二人の先生から、ご講演を頂戴するということで大変楽しみにしていると。いずれのご講演も本学にとって、改めて申し上げますと貴重な糧となりますので、私も期待を持って拝聴したいと思います。

お二人の先生方にはお忙しい中、お時間を割いていただき、ご講演いただけること改めて感謝申

し上げます。それでは、フォーラムを開始するため松尾先生にマイクをお返します。

松尾教授 はい、ありがとうございました。それでは、今日はお二方のうち、まず芝浦工業大学の相原総一郎先生ですね。一般に教員をやっておりますと、なかなか見えないところの分野としてIRというのがあるんですね。IRというのは、企業ですと当たり前にその企業のマーケティング、あるいは企業の置かれた状況の健全化、健全性、ロードマッピング、そういったところの戦略立案というところなんです、それにおいてはいろんなデータが必要になってきます。アメリカにおいては、非常に早くからそういった分野というのがありまして、我が国も現在どんどんそういったIRというものが浸透しているところでありますけれども、まだまだではあります、相原総一郎先生におかれましては、我が国を代表するIRの専門家ということで、非常に多くの論文を発表されております。それも、我が国のことなんです、ここで得た知識、我が国で得た知識を海外に展開されているというところで、よりご高名でいらっしゃいます。本日は、グローバル・コンピテンシー、Miville-Guzmanのモデルがありますけれども、それを芝浦工業大学の方でどう活用して、あるいはどう教育活動に展開させているのかということで、その事例を含めてご紹介いただくということで、相原総一郎先生、どうか今日はよろしくお願いいたします。時間が、13時05分過ぎておりますが、1時間ほどご講演を頂戴いたしまして、それから15分ほど質疑応答ということで、1時間15分ほど、お付き合いいただければと思います。どうかよろしくお願いいたします。

では、相原先生、よろしくお願いいたします。

相原講師 ただいまご紹介いただきまして、ありがとうございます。芝浦工業大学でIRを担当しております教育イノベーション推進センター特任教授の相原総一郎といたします。

今日の講演内容でございますが、まず最初に芝浦工業大学の紹介を簡単にさせていただきたいと思います。スーパーグローバル大学創成支援事業、この支援事業に本学が2014年、10年前に採択されまして、それから本学の国際化に向けたいろいろな施策が進んでまいりました。それについて、今日は派遣学生数、受入れ学生数という留学生の推移についてお話した後、どのような留学プログラムがあるのか、特にグローバルPBLと呼ばれるものについてご紹介したいと思います。この、はじめにの紹介の次に、ではここでどういう問題があったのか、あるのかというお話をした後、それで本学では日本語版のMGUDS-S、これはアメリカ等ではエムグズショートバージョンと呼ばれていますが、このMGUDS短縮版の開発についてお話させていただきます。そして、この調査票を作成いたしました。どういう調査票になっているかという構成を説明した後、本学で扱っている事例につきまして報告したいと思います。最後に、課題と展開をご報告させていただきます。こちら芝浦工業大学のマスコット、テクしばくんということで、この11月に決まりました。正式採用ということで、本学のマスコットでございます。よろしくお願いいたします。

講師の紹介ですが、先ほどご紹介いただきましたとおり、私、芝浦工業大学で教育イノベーション推進センターというところに所属しております。こちらでIRというインスティテューショナル・リ

サーチの担当をしております。学会の所属ですが、学協会といいますけれど、協会の方ですが、日本インスティテューショナル・リサーチ協会というのが、ようやくこの3年ほど前にできまして、こちらのJAIRに加入しております。学会といたしましては日本高等教育学会、大学教育学会に、ほか幾つか教育学会等参加しております。また、海外ではAssociation for Institutional Research、AIRと呼ばれておりますが、アメリカのIRの専門職団体にも参加しております。この所属学会等見て、お分かりになるかと思いますが、私、留学教育とか留学生の教育、そういった国際教育の専門家ではございません。インスティテューショナル・リサーチと呼ばれるものの専門だということでございます。

じゃ、何も関係がないのかというと、そういうことでもございません。過去には「留学生の受入れと大学の国際化」といったテーマで全国調査をして、報告書をまとめたことがあります。これをまとめたのが1990年のことでした。代表は江淵一公先生で、この時所属しておりましたのが広島大学の大学教育研究センター、現在は広島市中区から東広島市へ移動いたしまして、これがこのセンターが移動したのが1995年でしたけれども、高等教育開発センターになっています。ここで、ちょうどこの時期1990年の頃ですが、日本では留学生10万人計画というのがありました。現在50万人計画とかございますが、その10万人受入れに当たって、その施策を各大学どうしているか、また他の国、アメリカやイギリス等はどうに留学生を受け入れているか、そういった調査をいたしました。私は第3章で、全国調査の結果から留学生教育体制の現状ということで、日本の各大学で留学生受け入れに当たって、どういう体制を整えて受け入れているか、そういった調査結果をまとめたことがあります。これをまとめたのがもう34年前ですから、かなり昔の話になります。

さて、芝浦工業大学の紹介に入りたいと思います。本学、現在2つキャンパスがございます。豊洲と東大宮でございます。東大宮は埼玉県、豊洲は東京都でございます。学部は工学部、システム理工学部、デザイン工学部、建築学部、4つ学部がありますが、工学系でまとまっているところがあるところがひとつ単科大学的なところがあります。大学院に理工学研究科があり、附属の中高が2校あるという組織構成になっています。学生数はざっと9,000名、教員数はざっと300名、職員が200名と、これは専任のみの数でございます。この建物、こちらが豊洲のキャンパスのメインの建物です。今こちらの手前に本部棟が建ちまして、本部棟、研究棟、教室棟、交流棟と4つの建物、ビルで豊洲キャンパスはできています。今年の5月1日現在の規模で言いますと学生総数が大体9,467、そのうち最も大きいところが工学部で4,000名、システム理工学部が大体2,000名と、デザイン工学部が674名、建築学部が1,040名、大学院が1,661名と、大学院よりは学士課程の学部の方が大きな規模があり、特に工学部が半数を占めているといった組織構造になっています。

さて、スーパーグローバル大学創成支援事業、SGUの紹介をしておきたいと思います。こちらスーパーグローバル大学のロゴマークでございます、このスーパーグローバル大学というのは2014年の9月のことでしたけれども、日本の高等教育機関のグローバル化を推進していくために、モデルとなる全国の37大学が選ばれました。大学ランキングの上位100を目指すよというトップ型が13大学、

それぞれ分野に応じてグローバルな教育、研究をリードしていきますよという大学が24大学でございました。芝浦工業大学は、私立の理工系大学として唯一採択されたということにあります。詳細は本学ホームページ、こちらのURLでこのSGUについてどういうプログラムなのか紹介がございますので、ご関心がございましたら見ていただきたいと思います。

このSGUプログラムが2014年に始まりました。本学もいろいろな施策を打ちましたが、その大きな変化が派遣留学生、派遣学生を増やしたということがあります。合計数字を見ますと、2014年の時点では518名でしたが、2019年には1,586名と3倍以上の増加になっています。2019年から2020年にかけて半減します。少しずつまた増えてきたわけですが、この激減は何かといいますと、コロナ禍でございます。コロナ禍で多くのプログラム、海外へのプログラムはキャンセルされました。キャンセルされた一方で、リモートのオンラインを使ったプログラムを別途開発して始めてまいりました。それがここに括弧で数字が入っておりますが、2020年を見ますと154のうち154、これはオンラインでやったよということです。386のうち386はオンラインでしたと、305人のうち305人はオンラインでしたというように2020年、21年ほとんど全てがオンラインに急に置き換わりました。ここで大きな変化があったために今日お話しするMGUDSの指標の利用、実績、実用のお話につきましてはここで一旦中断することになります。

その件も含めてまたお話をさせていただきますが、もう一つこの中で特徴は大きく派遣留学生が増えたということですが、種類が大きく2つありまして、プログラムとしては語学研修、200強であったものが734、それからグローバルPBL、gPBLと本学では呼んでいますが、こちらが150人だったものが2019年には624人と、この2つの種類のプログラムの学生数が大きく増えたということが分かります。一方、受入れの学生数の推移ではございますが、こちら2014年当時は361名でしたが、2019年には1,692名と、こちら大きく増えております。ただ、増えたところを見ますと、短期、3か月未満というところですが、こちらが2014年、131人だったものが、2019年に941名と大きく増えております。したがって、受入れ学生数も増えたことは増えましたが、短期が増えたと、大きく増えました。そして、やはり2020年にくっと下がります。そこにまた、括弧で書かれてございますが、多くはここでまたオンラインの留学をすると、そういうプログラムが2020年、21年は特に多くなりました。

さて、こちらが本学留学プログラムのラインナップです。語学研修、送り出しでたくさん数が増えたこの語学研修はどういうプログラムかといいますと、入学して最初1年生から参加できると、特に英語を学ぶ、だから短期の語学研修と呼んだりします。夏や春休みに実施がありまして、期間は短いもので2週間、長いもので1か月、どちらかというと1か月が多いです。これが語学研修、もう一つ、送り出しで増えていたグローバルPBL、PBLというのはProject based Learningということで、こちらの内容につきましては別途、次のスライドでご説明します。こちらは1年生から参加もできますが、2年生から3年生以上が主な参加者になります。実施時期はやはり夏や春休みが多いと、期

間はやはり2週間から1か月、ただどちらかというと2週間程度の方が多いかと思います。何をするのかと、語学研修では主に英語を学ぶわけですが、このグローバルPBLでは海外の協定校の学生さんとグループを組みます。そして、与えられたテーマ、また自分たちで決めたテーマを基に、その問題解決に取り組むというプログラムです。

さて、グローバルPBLですが、本学の学生、大体学部の2年生以上が海外の協定校の学生さん、アジアやアメリカ、ヨーロッパ、世界各国にインドも入りますが、協定校の学生さんがいらっしゃいます。チームを組みまして、設定された課題を大体グループでお互いに解決するように取り組んでいきます。期間は約2週間と書いてございますが、多くは2週間と、お互い海外の大学の皆さんとはこの機会に初めてお会いしますから、多様性に満ちた環境で問題解決を実践的に取り組んでいくということになります。そうすると、語学力はもちろん必要になりますし、与えられた課題についてどう問題の所在と解決をしていくのか。多くは工学に関する課題が設定されますので専門性、またチームワークを組む中では多国籍のいろいろな民族や国からの出身者でチームがつくられてきますから、国際性やチームワークが必要になってくるということです。これが学生自身の成長を促して、また企業からの課題が出たりしますので、企業や大学、各組織との連携など、多くの可能性を秘めた本学国際化推進のユニークなプログラムの一つとなっています。今後の展望とありますが、本学では現在このグローバルPBLの他大学への横展開を大学の国際化促進フォーラムというものをつくりまして進めています。詳しくは国際プログラム推進課のほうにお尋ねいただけると、最新の情報が分かるかと思います。

さて、さらに知りたいという、その大学の国際化促進フォーラム事業ですが、グローバルPBLプログラム研究会というものが組織されて現在進んでいます。去年キックオフがございまして、他大学の学生、教員が集まって、それぞれグローバルPBLどう進めていくか事例紹介等ございました。そして、演習の1といたしまして、グローバルPBLの設計について本学の教員から演習のお話があり、さらにこれは7月の14日ですが、ではその実施した効果をどう測定するのか、その辺りのお話について7月の14日、午後4時から5時にかけて、芝浦工業大学が効果測定の際に使用するグローバル・コンピテンシーの指標の説明と最新データの紹介をしました。紹介したのが私1人で、あと2人も、このグローバル・コンピテンシーのほかに本学では実際に実践をして、その実践の評価をどのようにしているか、個別の事業についてその具体例を報告して、ここは3人の先生、私を含めて3人が報告いたしました。

さらに、今後の予定としてPBLの実施体制、学内体制ですね。どういう学内体制で実施を支えているのか、外部委託についても触れるという話になっています。そして、グローバルPBL設計の模擬演習と、さらに芝浦工業大学以外に実は幾つもこのプログラムには参加しておりますので、その実施事例の共有とディスカッション等をしております。今日お話しするのは、このグローバル・コンピテンシーの指標としてのMGUDSの使い方、実施例の紹介です。ほかに本学ではルーブリック等を使った

評価等ございますが、それは今日はお話はいたしません。ご了承ください。そのさらに詳しい説明等は、こちら国際部のSGU推進課の方にお問い合わせいたします。

さて、今日はここまでSGUのプログラムで本学、留学生が増えたよとお話いたしました。ここで問題の所在を明確にしておきたいと思います。留学生がこの10年間、本学は飛躍的に増えました。ただ、増えた中身は資料見ていただきましたように、語学研修とグローバルPBLというプログラムが大きく増えています。この一つの特徴は短期であること、2週間から1か月だということでございました。そこで、プログラムの評価、効果測定はどうすればいいだろうと。人数が増えたからいいのか、あるいは学生が満足していればいいのでしょうかと。語学研修プログラムだったら、語学力が伸びたことを測定する必要がありますねと。グローバルPBLというんだったら、じゃこれはPROGで評価すればいいんでしょうか。本学、実は1年生と3年生でPROGの全学実施をしております。ただ、留学に行く前と留学から帰ってきた後、すぐにまたPROGのテストをするとすると、負担も大きいなということがございました。語学力も一緒に、本学はTOEICのテストを入学時や3年時したりしております。しかし、留学行く、その事前と事後でTOEICのテストを受けるのも大変だな、どちらも時間も費用もかかります。その辺りで語学研修やグローバルPBLの評価、どうしようというのが大きな問題になりました。

これは本学に限ったことではございませんでした。2019年の10月4日のことですが、国際シンポジウムがありました。タイトルは、「海外留学の客観的效果測定」、ここでシンポジウムで事例紹介したのは4つございました。1つがPROGです。実は本学ではPROGの利用を随分早くから進めておりました。そこで、PROGで1年生と3年生でこれだけ変化がありましたという事例紹介をしております。立命館大学様は、ベネッセi-キャリア様のGPS-Academicというテストを使って測定していますという説明、報告がありました。一橋大学様からは、行動特性研究所、JAOSが開発した留学アセスメント、こちらも有料ですが、このアセスメントを使って評価していますと、効果測定をしているという話がありました。さらに、広島大学様が主に日本語版を普及させているBEVI、こちらもかなりしっかりとした調査票で、使うには時間やそれぞれの問題に対する使い方の専門的な知識も要求されますが、こういうBEVIを使った事例紹介がございました。

このとき参加して思いましたことは、やはり留学の効果測定、客観的效果測定をするには専用ツールが要るなど。実はPROGやGPS-Academicは、これは汎用の試験でございまして、この調査は留学の時期に合わせてしているものではございません。したがって、本当にPROGの変化が留学の効果なのかといわれると、危ういものがあります。また、BEVI-jはこの当時、日本で使える唯一の、国際的に広く使われている調査票でしたが、かなり問題数が多いものでした。本学PROGもしておりましたから、PROGとBEVIをするのは負担が大きいなど。このJAOS留学アセスメントも有料でございます。さあ、どうしようということになります。

日本語版MGUDSショート版の開発ですが、この国際シンポジウム、2019年10月に開催されましたが、

実はその前から本学では調査票の開発、日本語版を始めておりました。例えば、グローバル人材育成教育学会の紀要に、「技術系人材に求められるグローバル・コンピテンシーの変遷と日米比較」という論文が掲載されております。織田先生、山崎先生、井上先生がご執筆されています。織田先生は、さらに2019年に「理工系人材のグローバル・コンピテンシーの開発と評価」ということで、博士論文を提出されました。これも公開されておりますが、何を研究されていたのかといいますと、このMGUDSショート版の日本語版を作成して、日本人理工系学生353名と日本人技術系海外業務経験者35名に調査を実施しました。研究的な利用をして使えそうだとということが、実は2019年の10月の国際シンポジウムの時点では分かっておりました。ただ、まだ大学で実用してみる、試験的に利用するということはしておりません。2020年春、この時期に実施しようと計画しておりましたが、コロナ禍で多くのプログラムがキャンセル、遠隔授業が始まりまして、その対応に追われるということになり、実はストップすることになります。私は何をしていたかという、「アメリカ高等教育におけるグローバル・コンピテンシーの評価」ということで、このMGUDSショートバージョンというのはアメリカで開発された調査票です。アメリカのみならず、世界各国で利用されています。織田先生や山崎先生、井上先生の論文で実は研究されていたのは、理工系分野が専門分野として対象になっていました。しかし、普通の学士課程教育での留学の評価で使われていると、そういうことをこの報告でまとめしております。

さて、このMGUDS-Sの開発ということで、この指標の定義ですが、この指標ではUniversal-diversity orientation、UDOを測定します。このUDOというのは何かというと、自分と他者の間にある似たところと違うところを同時に認識して、そして他者に対してポジティブ、前向きな社会的態度をとることができるのがグローバル・コンピテンシーの指標になっています。この指標を開発されたのがMarie L Miville先生、MGUDSのMはMiville先生で、GはGuzman先生、Miville先生とGuzman先生が開発したUniversality-Diversity Scaleの短縮版という意味でございます。ショート版、短縮版は実は15項目しかありません。フルバージョンでも45項目ですが、15項目がさらに3つの下位の指標があるということです。

1つが交際の多様性、Diversity of Contact、Contactは接触とも直訳できますが、いろいろ違った人と交流できるという意味です。それからRelativistic Appreciation、認識を絶対化せず、相対的に物事を認識できるという能力、最後がComfort with Differencesで、これはお互いの違いを嫌がるのではなく、むしろ快適だと感じるということができないという指標になります。この3つの指標を合成してUDOを測定し、これをもってグローバル・コンピテンシーの指標としているということでございます。下位指標の定義ですが、交際の多様性というのは実は行動です。相対的な認識力というのは、これは認知力と、相違の快適感というのは感情的要素になります。ですから、行動、認知、感情の3つの領域の指標を合成して、コンピテンシーの指標にしているということがございます。

このMGUDSショートバージョンには5つの特徴があると思っています。1つは国際的通用性で、こ

れは全米調査でももちろん利用されていると、この辺りを調査したのを私がまとめた、さきに紹介した私の報告でございます。世界各地でも使用されています。例えば南アフリカでMGUDS、これは指標として使えるかという報告が論文になっていました。世界的に利用がされていると、2つ目は回答者の負担で、全部で15項目です、短縮版は。うち5項目は逆転項目を配置しておりますが、15項目だと調査項目の意図を回答する側が察知してしまうんじゃないかと、本当にこれで測れるんだろうかという心配があったりしました。3つ目が短期プログラムについて利用が多いということです。先ほど紹介しました広島大学のBEVIも短期留学のプログラムの評価に使えたりしますが、どちらかというとBEVIはもう少し長期が使えるだろうと。留学のプログラムの評価、効果測定というのは実は長期の評価もあります。共立女子大学の浅田先生の著書や論文がございますが、これは留学して50年間でどういう評価ができるかという超長期の評価の文献もございます。

4つ目が評価資料に利用できると、学部やプログラム単位で評価すれば、大学評価の根拠資料になるだろうと。プログラム単位ですと、お互いにプログラムを比較して教育改善もできるだろうということでございます。5番目が運用の負担が小さいということで、この調査を実施するに当たって資格が必要かという、そうではございません。私もIRはやっておりますが、国際教育の専門家ではありません。ただ、レポートは自分たちでつくらなければいけませんから、データの統計的な処理、推測統計学のレベルぐらいシンポジウムはお持ちであった方がよいかと思います。調査票、この利用に関しては無料です。先ほど国際シンポジウムで事例紹介を出しましたが、あれは全て有料です。調査票1回利用するのに3,000円ぐらい、1人当たりかかります。これは本学、著者のMiville先生に利用、日本語版使わせてくださいという許諾は得ておりますので、本学のイノベーション推進センターにご連絡しておいていただければ無料で使うことができます。

これが調査票の構成で、実際の調査はウェブアンケートで実施しております。これワードでつくった紙ベースですが、これも必要ということであれば、ご連絡いただければもちろん共有いたします。MGUDS-Sバージョン、ショートバージョンはこの赤で囲んだところが、そのコンピテンシーを図る指標の15項目です。この前にいろいろと、あなたが参加するプログラムは何ですかといったフェースに当たる項目が入っています。次の後ろの2ページにあるのはCEFRの自己評価で、これは本学で、語学研修等でどれだけ語学力が伸びているかというのをチェックする必要がございましたので、この項目が入っています。このCEFRの自己評価は、大学IRコンソーシアムで使っている調査票で、本学、大学IRコンソに加盟しておりますので、使うことができます。加盟していない大学でも、事務局の方に利用をお願いすれば使わせていただけると思います。また、研究利用ということであれば、本学との共同研究というような形にいただければ間違いなく使えると思います。これももちろん無料で使えます。

こちらが事後の調査票です。こちらの最初の5項目ですが、これはよくある満足度の調査です。教職員の支援、学友との協働、学習のための備品、留学・研修の期間、プログラム全体としてと、ここ

に満足度が低ければ、どこの分野が低いんだろうといったことを見ることができます。そして、MGU DSの項目、全部で15項目あります。その後に自由記述の、参加してどうでしたかという自由記述の項目をつけてあるんですが、なかなかこちらの自由記述の分量は少ないかと、もうちょっとここは増やすと、学生が自分で自由記述をたくさん書けるような条件をつくれたらいいなと思っています。その後に、またCEFRの自己評価があると。これを留学プログラム行く2週間の事前と事後に、それぞれ実施して点数に差があるだろうか、それは有意な変化だろうか、いうところが最大の問題でした。これが先ほどのご説明した調査票の構成です。事後は満足度があり、事前は関心がどれくらいあるかということが入っています。

さて、2023年夏、これは大体これは6月から9月に実施したプログラムです。10月に入ってからプログラム実はありますけれども、10月のプログラムは、さすがに秋であろうということで、10月に入って始まったプログラムは入っておりません。6月に入って、5月の終わりから6月、そして9月から10月に終わったプログラムの評価です。グローバルPBL全体の総合得点見ますと、まず事前と事後に回答した学生というのは281名おりました。実はグローバルPBLの参加者はもっと多いのですが、事前アンケートに回答して事後アンケートに回答していない、あるいは事後アンケートは回答していないけど、事前アンケートの回答が2つあるという学生がいたりしました。この事前アンケートが2つ回答があるという学生は、1度回答してもう一度、間違えたと思ってまた回答し直した学生もいますし、事後アンケートと間違えて、本来事後アンケートに回答するときに誤って事後の代わりに事前アンケートに回答してしまっている学生、そういう学生もいました。その辺り、春のプログラムの時はそういう学生は全てデリート、削除したデータでチェックしています。夏のプログラムでも原則、同じように事前と事後に回答して、2回事前、事前と回答した学生については、どちらか一方だけを採択して、この検定に使っています。ですから、きれいなデータとして、あるデータでt検定という平均値の差の検定をしました。事前のスコアが、平均が63.1、これが95%の信頼性区間で大体この辺りに誤差があるだろうと。事後は64.8点になりまして、95%の信頼性区間はこの辺りということで、事前と事後で信頼性区間は重なっておりませんから、明らかに有意であると、効果量はというと実は小さくなくて247、コンマ247ですから小さいだろうと。しかし、これでグローバルPBLの効果が小さいとは言い切れません。それについては後でお話します。

こちらは語学研修ですが、事前と事後、どちらもしっかり答えた学生さんは199名、事前の総合スコアが61.5と、事後には64.6点に上がりました。こちらは学年としては1年生が多いということがあります。そうすると、こちらの効果の方が大きいのかなと思ったりします。効果量がコンマ446ですから中程度の大きさの効果があったということになります。グローバルPBLの中からG2ということで一つのプログラムを取り出しました。これはその中の51名の集団の、あるプログラムに参加した学生の点数の検定です。実は事前スコアは60.1点しかありません。グローバルPBLの参加者の多くは2年生以上ですが、1年生の時に語学研修プログラムに参加していない学生、コロナ禍もあって点数

は低いです。ただ、事後のスコアは63.5と、実は先ほどの語学研修の64.6点に比べると事後の得点は確かに低いのですけれども、しかし、効果量を見ますと622と、大きく中から大の効果があったということが分かります。もちろん、統計的には有意です。したがって、点数が低かった、もともと、それほどコンピテンシーの点数が低かった学生さんに関しては、その大きな効果がこのプログラムにあったということが分かります。

さて、この結果をどうフィードバックするかということで芝浦工業大学では、これから考えているところですが、ダッシュボードを使おうとしています。ダッシュボードの1が回答者の情報で、主な情報が入っています。ここにインタラクティブ・モードとありますが、プログラムの分類、学部・大学院、学科・専攻、さらにプログラムの個別の名称、担当する先生、学生の入学年度等で、実はこの画面をフィルターにかけることができます。次が満足度で、5つの項目について事前回答に答えたのは542名おりました。この542名の満足度が、平均点はこんな形ででき上がっているわけですが、それぞれの学部や学科、プログラムごとに平均点がどう変わるかということが見れるようになっていきます。こちらがコンピテンシーのスコアであります。全体では62.7点が64.8点に増えました。これが事前アンケートのスコアの分布で、事後になりますと、実は山が2つになってきます。事前の、前の少なくなっているところが大きく盛り上がっていることが分かります。ただ、3つのそれぞれの下位スコアに関してみると、実は一番最後の感情的なコンフォータブルのところのスコアが全体に低いなということがありました。これは逆転項目からかもしれません。この辺りはまだ改善の余地があるかもしれません。

最後にCEFRですが、こちらが、上が英語の5つの技能の、事前が上の段、下が事後のアンケートです。例えば、聞く力を見ますとA1に18.7%いましたが、事後は5.7%。A1の割合がぐっと減って逆にB2の割合が増えていると。こういったことが全ての技能について見ることができます。これも先ほどのインタラクティブ・モードにすると学部や学科、プログラムごとにフィルターにかけて見ることができます。

課題と展開についてお話させていただきます。1つが学士課程の評価と連携ですね。アメリカでは、実は学修行動調査としてネッシー、NSSE、これをネッシーと呼ぶんですけども、この調査と連携した分析があります。アメリカではこの海外研修はHIPs、高い効果がある実践の一つだと捉えられています。HIPsには、例えば日本では当たり前かもしれませんが、学士課程での卒業研究やサービスマーケティングのようなものも含まれています。幾つもある、幾つかあるHIPsのうちの 하나가実は海外研修なんですね。どういう課程があるかという、この海外研修プログラムに学生が参加すると、学生が大学へのエンゲージメントを高める。結果、学業成績もよくなるだろう、これが事前と事後の差です。だから、芝浦工業大学ではPROGやTOEIC、それから大学がやるコンソーシアムの学修行動調査、またこれから始まる文部科学省の全国学生調査にも参加しています。その結果、調査のデータとひも付けて分析することによって、海外研修に行くことによって、学修行動がどう変わり、学業成績

がどう変わるのかという分析ができるというか、これが一つのこれからの課題になります。

2つ目が校務支援システムとの統合です。現在、アンケートの配布と回収は、このウェブアンケートを、無料のものを利用しています。そうすると、大学のアドレスで回答してねと言っているんですが、個人のメールアドレスで回答する学生もいます。そうすると、それを大学のアドレスはどうだっけということで、こちらの方で修正していく必要があります。また、どうしても自由記述の回答が少ないということがありますので、いわゆる校務システム、校務支援システム、本学ではScomb、Zと書いて2と読んでいますが、スコームツーですね。こちらのシステムに統合して利用すると、もう少しデータの整形も楽になるのではないかと考えています。2つ目が効果的なフィードバックで、大体PDFの報告を配布しておりますが、学部や学科さらにプログラム単位になってくると大変大きくなります。これを見てくださいというのも大変ですから、今日お見せいたしました、あれが作成途中ですが、学生単位で出すこともできます。これダッシュボードやポートフォリオにして、双方向的な提供ができないかというのが一つ、次の課題になると思っています。そのうちの一つの、この効果的なフィードバックで、ダッシュボードについて現在作成途中のものを見ていただきました。

参考文献ですが、MGUDSのショートバージョンはこの1番の論文に入っています。それを研究した織田先生、山崎先生、井上先生、橘先生、吉久保先生、私の論文があり、織田先生の博士論文があります。博士論文が一番まとまっています。また、吉久保先生と共著で最近IRとして、どうして、このグローバル・コンピテンシーを測定するのかという意義についてまとめております。これについては、ここにDOIがありますように普通にアクセスが無料でできますので、お時間がありましたら、よろしく願いいたします。

ということで、今日は貴学のFDフォーラム参加、お呼びいただきまして、ありがとうございました。今日お話した国際プログラムへのご質問等ございましたら、国際部のSGU推進課、こちらの方にご連絡いただきましたら、またいろいろな情報が得られるものと思っております。どうもありがとうございました。よろしいでしょうか。

松尾教授 はい、ありがとうございました。ありがとうございます。本学でも、このAIITでも、ちょうどこのグローバル評価指標、非常にホットな話題で、もうこれはどの大学でもそうだと思うんですけども、長年こういったグローバル能力をどう評価するかということ、最近特にまたそういった要請がありまして、教職員一生懸命勉強しているところであり、先生のご講演内容、非常に刺激を受けたところであります。ありがとうございます。

では、質疑応答を、15分ほどありますので、質疑に入っていきたいと思います。大学の教室で受講されている方は挙手で、オンラインの方は、このオンラインの挙手ボタンを押していただいて、ご質問いただきたいと思います。では、質問のある方、よろしく願いいたします。挙手のほど、よろしく願います。

はい、ありがとうございます。では、吉田先生、挙手いただきまして、ありがとうございます。よ

ろしく願います。

吉田教授 相原先生、大変有意義なお話、また非常に分かりやすく、ご講演いただきまして、どうもありがとうございました。本学の教授をしております吉田といいます。よろしく願います。ちょっと2点、内容と直結した質問と、それからちょっと興味の上からの質問をさせていただきたいと思います。このグローバルPBLという考え方の受入れと派遣という非常に大きく異なる2つの方向性を恐らくお持ちなんだと思うんですけど、指標化、基本的には同じ指標ではかっていくというお話だというふうに理解しています。もし誤解していたら、その辺もご指摘いただきたいのですが、この受入れと派遣、また学生側の現地に行くかオンラインかで、かなりの違いがある可能性もあるのかなと思いついてお伺いしていたんで、この辺に関してはどのようなご判断をして、どういうふうにこの指標というものを整理していくかという、この辺について教えていただければと存じます。

相原講師 よろしいでしょうか。

松尾教授 願います。

相原講師 はい。ご質問ありがとうございます。まず、受入れと派遣の違いについてですが、まずこちらのMGUDSの指標、オリジナルは英語版です。日本の学生には日本語版を使っておりますが、海外の学生さんに対しては英語版を使っております。これはオリジナルが英語版ですから、この英語版の調査票を受けていただければいいということになります。

次に、スコアの違いですが、特にタイや東南アジアから留学に来る学生さんに関しては、実は大変意識が高いです。ですから、もともとのスコアが大変高いです。おそらく、東南アジアの大学から本学に来られる学生さんは、おおむね平均以上の、本学の学生の平均以上のグローバル・コンピテンシーをもともと、お持ちであるということがあります。セーリングエフェクトといって天井効果も働いているかもしれませんが、じゃ、統計的に有意でないのかといいますと、グローバルPBLや、グローバルPBLになりますけれども、そのプログラムの評価、実はまだ数は少ないのですが、実験的に評価したところを見ると、有意な結果がやはり出てきます。ただし、最初に本学のグローバルPBLでも、お見せいたしましたように、効果量はそれほど大きくはございません。ただ、有効な値が出てくると。彼ら彼女たちは、英語はもうできますから、CEFRの自己評価票は使っておりません。

次に、オンラインと実際の対面との違いですが、これは実は、急に20年からオンラインのプログラムに切り替わりました。本学も大変、急な変化に対応するので大変で、私もこの2、3年はそのコロナ対応のための調査で、幾つも調査をすることになりました。その中でオンラインのプログラム、これは有効性があるのかということですが、おそらく対面をプログラムの中に組み込んでいけば、十分な効果を得られると思うのですが、オンラインだけのプログラムで限っていいますと、数も少なかったことはございますが、語学研修に関しては有意な点数の上昇を測定できました。しかし、グローバルPBLに関しては、これは有意な点数の変化が得られなかったということが実際のところですよ。

どうしてかといいますと、なかなか先生方も相当、苦心してオンラインだけのPBLというのをプロ

グラムとして考えられました。しかし、相当備品等を駆使して、お互いに郵送でキット等を送付してつくったりしていますが、オンラインだけだと、なかなか当初のグローバルPBLとしてのコンピテンシーの育成には、力が統計的有意というほどのことは出せなかったというのが過去2年の調査の結果です。23年、今年はもう普通のプログラムに戻っておりますので、さて変化があったかという、やはり統計的に有意な変化を見つけることができました。ということで、遠隔の場合は遠隔だけで、それでグローバルPBLのような演習をするのは、かなりきついというのが実態ではないかと今では思っております。こういうところでよろしいでしょうか。

吉田教授 向こうへ行って学生の事故とか、様々そういった点というのは出てくる可能性あると思うんですけど、この辺は、どのように派遣した学生の事故、それから受け入れた学生の事故等、または病気等、どんなふうになっているのかだけ少し、すみません、ちょっと本題と違うんですけど、もし簡単にお答えできる点があれば教えていただければと思います。

相原講師 ご質問ありがとうございます。まず事故ですが、本学の場合は海外に専任教員が駐在しています。もちろんプログラムには、海外プログラムに精通した先生や事務職の方が同行しています。そういうことで、学生が自分たちだけで行動するという時間もありますが、先生方や事務職の方々が、国際教育に関わっている先生方が見てられますので、バックアップが体制としてでき上がっています。ただ、コロナ禍は大変でした。先生も含めて学生も現地でコロナにかかって帰れなくなったり、帰ってきてからコロナが見つかって隔離されたりとか、なかなかそのパンデミックの間に現地に行くのは大変いろいろな事故がありました。ただ、平常でもいろいろな事件、事故が起こりますので、そういったことに対応するだけのスタッフが配置されていると、それぐらいでよろしいでしょうか。

吉田教授 はい、どうもありがとうございました。よく分かりました。本当に、どうもありがとうございました。

松尾教授 はい、ありがとうございます。その他、ご質問よろしく願いいたします。オンラインで参加の方、挙手ボタンを押してください。いかがですか。

では、私の方からいいですか、私が質問しても。私の方から質問させていただいてよろしいですか、じゃ。今回、このグローバルPBLに参加されている方々、学部の2年生以上ということで、多くは学部の学生さんかなと。学部の学生さんというと20歳前後ということかと思いますが、一方で最近は学び方がいろいろ多様化しておりまして、学生さんの層もいろいろある。例えば本学、東京都立産業技術大学院大学ですと、学生さんの年齢というのが30代、40代、あるいは50代、60代もおりまして、そういった方々が実際のところ、海外に行かれたりも多少なり行かれてはおりますが、まだまだのところがあります。そういった若い学生さんのところで気をつけなきゃいけないところと、あとは一方でそうではない30代以上、40代、50代の場合ですと、おそらく、どこが違うかというところと企業での経験、企業で既に海外の云々に触れているとか、あるいは社員に外国人がいるとか、そういったと

ころが違いかと思います。そういったところなのですが、現在芝浦工大で実施されている、このグローバルPBLで修士あるいは博士、あるいは社会人の学生さんとか、もしいらっしゃったら何かそういった話を、お聞きになっていることがあれば、ご紹介いただきたいと思いますと思うんですが、いかがでしょうか。

相原講師 ご質問ありがとうございます。まず、このMGUDSの指標について、お話しすれば、年齢層に関しては若い学生さんに利用されることもございますが、一般の働いている人々、今日ご紹介した南アフリカの最新の論文は、鉱山労働者に対して実施された調査の報告です。つまり、お年を召された方、もともとこの指標の開発はソーシャルワーカーのコンピテンシーの測定につくられたものですから、働いている方や年齢の重ねた、経験を重ねた方でも利用可能な調査票になっています。それから、本学のプログラムに関していえば、本学はまだ、どちらかというと25歳以下の高校出て、そのまま学部に入ってきた学生さんたちが主な留学、受入れの対象となっています。ただ、今後社会人の方の入学、特に修士課程や博士課程に入っていて、そしてその中で留学プログラムを経験していただくといったことは大いに考えられますし、社会人教育の、これからさらに質、量ともに増やしていくというのは今後、本学の大きな課題となるかと思っております。これぐらいでよろしいでしょうか。

松尾教授 ありがとうございます。あと1点、海外から、海外の協定校の学生さんたちの年齢層も、やっぱり同じような感じ、現在のところ同じような感じですか。

相原講師 ありがとうございます。現在来ているのは、協定校から来ていらっしゃる学生さんたちは、ヨーロッパの方々は特に老けて見えますけれども、年齢的には大体同じ方々が来ています。ただ、これからですから来ていただく学生さんに関しましても、特に今本学では大学院の課程を充実、規模を増やしていこうと、だんだんと増えてきております。ここに入ってこられる方々は、どちらかというと企業での経験のある方、一度社会に出て働いて、もう一度学位をとるために戻ってこられた方々も想定しておりますので、そういった方々に来ていただくためには、もっと年齢層の広い対応が必要になってくると思っています。

松尾教授 ありがとうございます。なんか、海外の国によるとは思いますが、海外の場合ですと、例えば学部はそうではないと、あんまりないかもしれませんが、修士課程あるいは博士課程になると、割と一回社会に出て働いてから、それから5年後、10年後に修士号取りに来るとか、博士号取りに来るとというのが、割と主流で、日本は若いうちに修士号、博士号取ってしまうというのが非常に多いと思っていて、そういったときに想像したのは日本の若い学生さんが、海外のちょっと自分よりも5歳、あるいは10歳ぐらい上の方と一緒に何かすることによって、同じ歳の仲間では得られないことが得られるのではないかなということが、ちょっと想像したところであります。ありがとうございます。

相原講師 ありがとうございます。私も今、先生がおっしゃられたように異文化や年齢の様々なバック

クグラウンドを持った方々との交流がきっとプラスに働くと思っております。ただ、現在そういう社会に一度出られた方がまた戻ってこられて、リカレントされた新しい教育をまた受けに来られた方々との交流が主流かという点、海外の大学に比べるとまだまだ若い学生さんが中心なものですから、今、言われたことは、これから本学の課題ではないかと思えます。

松尾教授 ありがとうございます。その他、はい、高嶋先生、挙手されています。よろしく願います。

高嶋教授 はい、創造技術コースの教員の高嶋といいます。本日はありがとうございます。

2点ほど、お聞きしたいんですけども、この統計を取られ始めてから派遣の学生、受入れの学生、それぞれの、その学生の、このプログラムに対する期待、それがこう何か変化したものがあるのか、ないのかという点と、もう一つは派遣ということは日本の学生が中心で、受入れは海外の学生ということになるかと思うんですけども、その海外の学生、日本の学生との期待の違いみたいなもの、特色みたいなものがあればお聞かせいただければと思います。以上です。

相原講師 ありがとうございます。今、ご質問いただきましたことは、どう調査結果をフィードバックするかというお話になると思います。本来なら、それに対してお答えできるはずだったのですが、実は2020年に本学の実際の、実験的施行をする予定でしたが、20年、21年、22年とコロナ禍で、そもそも対面のプログラムができず、リモート形式の遠隔授業の効果測定、これがうまく動くのかというところで、急きょ仕事をこなしておりましたので、この留学プログラムに対して、対面のプログラムに対して、今回MGUDSの指標を使った調査を実際に始めたというのは、試験的な利用はしておりましたが、全学的に利用したのは、実は今年度に入ってからです。今年度に入ってから、このプログラムがしっかり動き出したのが、この夏で、今、今日ご報告したデータが最新データで、ご質問の件に関しましては、このデータの結果をどう、こうすれば効果的に先生方や学生さんの元に、インパクトを与えるような報告ができるかということでございました。

それで、今回の課題と展開の2番目に上げさせていただいたわけで、今日の発表ではダッシュボードをつくったと。このダッシュボードを使って、それぞれの学部や学科、先生方、また学生さん単位でも結果を見ることができると、自分で見ることができると、これで対応していきたいと。あと、この中でどこに他のプログラムと比べて改善点があるかといったところが見えてくれば、そこで修正が入るかと思っています。また、海外の学生さんに関しては、実は期待もやる気も日本の学生さんよりも、かなり高いものがあります。相当、ですから日本の学生は海外の学生から触発されるところが大きいだろうと。その辺りもこれから、どうフィードバックをしていくかということですので、今後の課題ということで、宿題ということで、お許しいただけたらありがたいと思います。以上です。

高嶋教授 はい、ありがとうございます。おっしゃるように、非常に聞きたいところが、知りたいところが、そういう点かなというので、非常に大きな期待としております。やはり少し前だと日本の学生

にとって海外留学というのは、やっぱり語学が、語学のスキルを学ぶというふうな、付けるというところが大きな目的だったのが、随分変わってきているのではないかなというふうな仮説と、それとやはり先生おっしゃったように海外の学生と日本の学生のレベル感、意識だとか目的意識の違いみたいなものを、なんとなく感じるところでございますので、そういったところが、データとしてははっきりと見えるようになってくることを非常に期待しております。ありがとうございます。

松尾教授 はい、ありがとうございました。まだ、いろんな質問され始めたところで、これから手が挙がる場所かもしれませんが、相原先生におかれましては、実は2年前でしたっけ、本学の国際高等教育センター、専門職人材教育センターの方で、オーディエンスの方を、他大学の教員あるいは企業の方々いらっしゃるところで、この今回のご講演のベースとなる部分をお話しいただいて、今日は前回よりも長い時間で、さらに具体的なところに踏み込んで、本学の教育活動あるいは、こういったグローバル指標の策定等に資する知識をいただいたところでありまして、非常に有意義な時間を持てたと確信しております。

また、今後とも、いろいろとご相談させていただくことがあるかと思いますが、その際は何とぞよろしくお願いいたします。では、相原先生、今日はありがとうございました。オンラインの方も、大学で参加されている方も、相原先生に盛大な拍手をお送りしまして、第1セッションを終わりたいと思います。ありがとうございました。

それでは、第2セッションは14時35分から、今度は周南公立大学の橋本講師にご講演いただく予定です。それで、再度、業務連絡でありますけれども、このフォーラムが終了し、その後入試の、次回の入試の説明がございますので、途中で帰らないようにということで、よろしくお願いいたします。では、14時35分から再開したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○休憩 午後 2時25分

○再開 午後 2時35分

松尾教授 はい、では14時35分になりました。第2セッションですね、今日はFDフォーラムの日ですよ。

第2セッションは、周南公立大学の橋本先生ですね。テーマは、「大学院の海外展開の実情と今後の発展に向けて」と、この橋本先生は、もともとは大阪府立大学、専門が2つメインで、大きな専門をお持ちで、言語学というのは人文科学の言語学なんですが、の分野と、あと人工知能や自然言語処理、奈良先端で情報学の博士号を取得したということですね。大阪府立大学の教授をされていたんですが、その後海外の大学からヘッドハントというカリクルートされまして、海外の大学の教授として勤務され、また今年度から今度は周南公立大学の教授として、現在は国際交流センター長、それから地域DX教育研究センター教育部門長を兼務されております。

橋本先生におかれましては、文部科学省関係のプログラムいろいろありますが、そういったものを活用して、なかなか採択もそんなに容易じゃないものもありますが、そういったものを採択されて、そして海外の協定校との学生の交流、それからそもそもの協定校の獲得、件数の増加あるいは日

本だけではなくて海外の大学、非常に多くの大学、本当に非常に多くの大学なんですが、海外の大学のコンサル、それから海外の大学の国際化のプロジェクトのアドバイザー、そういった活動をされております。もちろん、研究の言語学、それから人工知能の分野ではトップリサーチャーですが、一方でそういった大学の大学経営であるとか、あるいは国際交流等含めて、非常に見識をお持ちでいらっしゃるしまして、海外には非常に多く行かれているということを伺っております。

それでは、橋本先生、今から約1時間、15時35分までですけども、ご講演のほどよろしく願いいたします。

橋本講師 ご紹介ありがとうございます。周南公立大学の橋本と申します。既に松尾先生の方から非常にご丁寧にご説明をいただきましたけれども、まずすみません。ちょっと私が誤解をしていたかもしれない、ほぼ全員ほとんどの方がオンラインで見られているだろうと思ひまして、ちょっと画面というか、スライドの文字が小さくなっているものが多いです。ちょっと、その辺ご勘弁ください。

周南公立大学の方には、この4月から来て、来年度、情報科学部が設置認可されましたので、そちらの方の設立時メンバーとして赴任をしております。また、同時に7月から国際交流センター長、それから4月から地域DX教育センターのDX推進部門の教育部門の長を務めさせていただきます。また、前任校のプリンス・オブ・ソンクラ大学の方も、一応まだ関係を持っている形です。これまで、情報科学系と言語学系、ご紹介ありましたように専門があり、聖和大、大阪女子大、大阪府立大、Asian Universityを経て現職ということで、国際交流に関しては、2012年以降、前職の大阪府立大学において、国際交流のセンターの兼担をさせていただいていました。また、前任校のプリンス・オブ・ソンクラユニバーシティのプーケットキャンパスにおいては、国際交流センターと技術環境学部の双方で国際交流のアドバイザーというものを2017年以降、務めさせていただいています。

近年は、ほとんど東南アジアが私の活動のメインなのですけれども、金沢大学さんが主担のSATREPSのカンボジアの大気汚染モニタリングプラットフォームの構築というもので、データサイエンスの担当という形で参画しております。これをご紹介したのは、ちょっとこの後この辺りの話もお話をさせていただきます。また、タイ、インドネシア、カンボジアの複数大学の大学院で国際共同研究、博士後期課程の指導、特別講義等を行っております。現在ですと、カンボジアのロイヤル王立ブノンペン大学、それからインドネシアのビヌス大学、それからタイのプリンス・オブ・ソンクラ大学等でやっております。それからまた、カンボジアでは今、世界銀行の借款による高等教育改革プロジェクトというのがあるんですけども、その国際評価委員であると同時に、この間から現地の教育省のちょっとアドバイザースタッフのようなこともさせていただいています。

はい、今日のお話なんですけれども、実は海外展開という言葉自体が、実は結構大学によって意味合いの違う形で使われているのではないかと思います、まずちょっとその面から整理をさせていただこうと思います。国際交流関係といいますと、簡単に言えば3つあります。まず、一つが留学生獲得で

すね。そして、2つ目がより広い意味での国際交流、そして海外展開、この3つの用語のつけ方というのは、実は文科省さんの用語の使い方にのっとって話をしています。

留学生獲得というときに、まず実はあるのは、正規学生か非正規学生かという区別が当然存在します。例えば、国際交流協定に基づいた交換留学、これは1年という比較的中期の長さのこともありますけども、これはご承知のとおり非正規の留学生ということになります。そうではなく、いわゆる1年生から卒業終了までいくいわゆる正規留学生という点でいうと、日本の大学院というのは1970年代以降、長らく正規留学生の獲得を重視してきました。これは、もちろん間違いとかいうんではなくて、単に事実です。そして、一部を除けばどちらかというとアジア圏の途上国中心国から取ってきたと。これは、実は歴史詳しい方はご存じのとおり、第二次大戦以降の言わば賠償金の一部という側面も実はございました。その結果、日本の特に文科省の国費の留学生でもアジア圏は割と重視をされていたので、それが取りやすかったということがあります。そして、当然現代においても国費もしくは大学等が用意する奨学金を活用するのが途上国中心国ではメインということになります。実は、この点で日本はどうかというと、特に2000年代半ばから2010年前後以降は、決して順調にいつているわけではないです。なぜかという、今言いましたように国費、文科省は今も国費がありますけども、この人数は随分減っています。

そして、大学等が用意する奨学金というのも早稲田大学さんとか、幾つか大きい大学はやっているんですけども、なかなか多くの大学ではできない。正直、旧帝大を除くと、かなりいい国立大学でも大学が用意する奨学金というのは、事実上ないというのが現状です。これに対して海外、イギリスであれ、アメリカであれ、カナダであれ、オーストラリアであれ、フランスとかもそうですね。こういったところは、大体大学がかなりの資金で海外からの学生を言わば雇う形で学生にするというのが根づいています。そういう点で、日本に來たいけれども、そういうふうな生活費も含めた面倒をなかなか見てくれないので、來れないという学生が今も東南アジアにはたくさんいます。このために結局1980年代までというのは、本当に最優秀の学生が日本に來たんですね。ですから、現在は現地最優秀の学生は欧米に行きます。実は、これ大変問題になってきていまして、例えばタイでいいますと、今大体50歳以上の先生方、ちょうど1980年代までに来ていた人たち、こういう人たちというのが今のタイの現地の大学の教員として多数活躍されています。

その結果、こういった先生方がやはり自分の出身校を含め、日本との関わりというのに思い入れがあって、その結果つい最近まで割と正規だけでなく、非正規のいわゆる国際交流においてもかなり日本というのは存在感があったんですね。ところが、今40代半ば以下の主力の先生というのは、ほとんどがタイではアメリカ、イギリスに留学した方です。こういう方々の場合には、もう日本との思い入れというのがそれほどないこともあって、随分だんだんと、あまり手厚い歓迎を受けなくなっているというのが正直現状です。ただ、その一方で日本が国力低下というか、今日本の円が非常に安くなっている、再び安価に高いレベルの教育を受けられるというふうに注目されてきてい

る側面があります。ただ、ここでもやはり英語で授業をしている大学というのは今でもそれほどたくさんあるわけではないので、結局日本語がハードルになるということで二の足を踏んでいるという学生も東南アジアでは多くいます。

こういった、いわゆるインバウンドとしての正規留学生の獲得というのが一方であります。これに対して、特に1990年代以降、国際交流という、より広い枠の話が大きく注目されてきた。これは、もちろんインバウンドだけではなくて、日本の学生が海外に行くというのも、日本は1980年代以降ようやくかなり自由に海外に出られるようになりましたので、そういった双方向という観点で国際交流というものが着目されるようになってきたわけです。ここには交換留学、短期などの非正規留学生の受入れ、それから派遣ですね。そして、教育研究、国際会議、その他のイベント等での相互協力、それから最近一部の大学でようやく始まったといってもいいんですけども、職員研修として海外に職員を派遣する。もちろんこれは、たくさんの職員を一気に派遣することはできませんけれども、実は教員というのは国際交流で海外に行く機会というのは普通にあるわけです。

ところが、そのお世話をさせていただく学内での事務であるとか事務処理、書類の書き方ですね。そういったものというのは、事務職員になかなかやっただいています。ところが、その事務職員自体は海外の大学の経験というのはまるでないのが普通なので、実はこのところで国際交流を進めようとする、職員で海外経験がないのがネックになるということが幾つかの大学では表面化してきていました。その結果、日本の学生を派遣する際に教員とともに職員を1名つけて、向こうの大学に行ってもら。そして、そこのところで先方さんの大学で、どのような感じで教育や研究が行われているか。場合によっては、そこでどのような事務処理が行われているかというのを見ていただくという形での職員研修というものも出てきています。ただ、これなかなか私の知る限りでは、日本の大学でこれをちゃんとやれている大学というのは、まだまだ限られています。

また、この国際交流を推進するのだというので、国際交流の基盤となるのは、いわゆるMOUといわれる国際交流協定です。この国際交流協定というのが非常に多く結ばれるようになってきているんですけども、生きているMOU、つまりちゃんと付き合いのあるMOUというのは、正直ほとんどの大学で極めて限定的な、大体100前後の国際交流協定を中規模以上の大学が大体結んでいるんですけども、そこのところで100あるけれども、実際に動いているのは2つかな、3つかなというようなケースも珍しくありません。その意味では、先ほどのご講演の相原先生のおられる芝浦工業大学は、SUに採択されたというのもありますけども、本当にアジア圏を中心に非常に多くの大学と生きているMOUを結ばれているという点では、非常に敬意に値するかと思います。

この正規留学生の獲得、国際交流というのを我々は通常やってきているわけです。これに対して、日本では大体2005年ぐらいからなんですけれども、海外展開というのが今度は言われるようになってきました。恐らくこの背景の一つは、アメリカのテンプル大学の日本校というのをご存じの方もおられるかと思います。このテンプル大学の日本校というのは、1990年代の頭辺り、その辺りに初

めて海外の大学が日本校をつくるという形でつくったというものです。海外の大学ですので、当然これ日本の文科省の設置認可というのは受けていません。ですから、学位もアメリカの学位として通用するという形で組まれた。これが特にテンプル大学の場合には、英語の教員を要請するという形の大学院をつくって、その後に学部をつくったんですが、これが随分ニュースになった。その後も2000年代になってMITが日本校をつくるだとか、いろいろなより名の通った大学さんも日本校をつくるようになってきた。この辺りが契機と恐らくなって、海外展開、要するに日本の大学が海外に展開する、海外に行くということという形が言われるようになりました。これ実は大きく分けると4種類あります。

一つがダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリー、もしくはツイニングといった、いわゆる共同学位プログラムを設置するというものです。これは、ダブル・ディグリー、ツイニングというのは、いずれも基本的には最初の何年かは自国にいて、そして残りの何年間を相手国側にいて、そういう形で両方の教育を2国間で受けて、そして修了した場合にはちゃんと2つの大学の卒業証書、修了証書、学位がもらえるという、そういうものですね。

一方、ジョイント・ディグリーというのは、完全に一つのプログラムを2国間で作り上げて、それを習得してもらうと。ですから、ジョイント・ディグリーの場合には、修了証書は1枚ということになります。実際には、ジョイント・ディグリーというのは、それぞれの国での教育課程というのを合同でつくることになりますので、ジョイント・ディグリーというのは、設置認可を自国側、日本でいえば日本の文科省の設置申請ですね、設置認可と、相手国側の設置認可の2つを1つのプログラムで受けるという大変ハードルの高いことになります。この結果、例えばタイでいいますと東京工業大さん、東京工業大学が随分前からジョイント・ディグリーをタイのタマサート大学と1つ設けているというのがあるんですけども、なかなかジョイント・ディグリーは、今言ったように2つの設置認可を受けるということがあって、ハードルが高くて正直言ってほとんど展開はされていないのが実情です。

一方、ツイニングとダブル・ディグリーは、ちょっと区別が非常に曖昧なところがあるんですけども、基本的にはツイニング、ダブル・ディグリー、どちらも設置認可としては自国の設置認可さえ通せば基本的にオーケーだと。あとは、協定上MOUの下にあるMOAというようなものを結んで、それぞれの単位の読み替えであるとか、そういったダブル・ディグリーやツイニングで、いつ留学をさせるというような具体のところを定めるだけでいけるので、こちらのほうはいけると。ただ、ツイニングという形でがつつりやっているというのは、長岡技科大さんとか、その辺りがやっているんですけども、最近はおとんどの場合ダブル・ディグリーという言い方でやっているケースが多いんじゃないかと思います。この話、ちょっと後で戻ります。

そして、もう一つは海外オフィスを設置する。これ、実は2010年前後から文科省さんが海外展開ということを言い出したときに、まずは留学生の獲得の言わば事務所も兼ねて海外オフィスをつく

るんだということで、一気に日本の多くの大学が海外オフィスを設置するようになりました。一方、海外キャンパスとなると、これは土地買収から含めて大変ハードルが高いので、これは帝国大学さんがしばらく前から海外キャンパス、アメリカに設置したとかがあるんですけども、なかなか海外キャンパスを設置するという場合に、それをどのように使うのかということもなかなか悩ましい問題があって、結構進んでいないというのが実情です。

ちなみに海外キャンパスをどう使うかというのは、平たく言ってしまうと海外キャンパスを自立させて、そこで現地の学生をリクルートして学習をさせるのをメインとするのか、それとも日本の学生の言わば海外研修先として海の家、山の家じゃないですけども、そういった形で海外キャンパスを利用するということをメインにするのか、帝国大学さんの場合には後者がもともと最初だったと覚えています。どちらで使うかということで、なかなか悩ましい。前者でやるとすると、多くの大学がなかなか日本の大学自体を維持するのに非常に必死になってやっている中、そこまでして海外キャンパスを維持して学生数を増やせるのかという問題がありますし、後者いわゆる日本の学生の海外研修先ということで考えると、例えば1年間はそこで学習させるとかということで、やれなくはないんですけども、現実やってみるとなかなかそれもうまくいかないのが、結局1年365日ずっと使われる状態になかなかなくてくれないというような悩ましいところです。

それから、最後これは後で紹介する文科省でも出てきますけれども、オンラインをフル活用した日本での教育に海外からアクセスできるようにする。場合によっては、それに、それをちゃんと全部必要単位を履修すれば、卒業までこぎつけられるようにするという、そういう形ですね。このオンラインをフル活用したというのは、もうまさに最近ようやく実現するようになってきていることですけども、海外のキャンパスとかオフィスとかを設けなくていいですし、なかなか魅力的だなという一方、先ほどの相原先生の質疑応答の中でもありましたけども、オンラインだけでどこまでちゃんとした教育ができるのかと言われると、なかなか難しいものがあるというのはコロナ期の我々の授業でもご承知のとおりかと思います。なので、オンラインをフル活用するというのは、ある種楽な部分もあるんだけど、それで本当に日本で教育を受けているのと同じ水準の教育を学生が習得できるのかという、そのところがこれからの課題ということになります。

以下、中教審の資料等をちょっとご紹介をして、海外の展開というのはどのように文科省は考えているのかというのをちょっと確認をさせていただきたいと思います。

大学の海外展開というのは、もともとは我が国の質の高い高等教育へのアクセスを向上させたいということと、それからもう一つは、我が国の高等教育機関の教育研究力の向上、国際通用性の強化という文科省さんの視点から見れば、外国の学生に日本の教育、アクセスしやすくすることと、それを通じて日本の大学がより国際化を図って教育研究を向上させ、海外のブランディングも果たすという、この2面を文科省さんとしては狙っておったわけです。そして、実際に海外展開という場合には、文科省さんが2018年の資料では4つのパターンを挙げておられて、パターンAはいわゆる

るダブル・ディグリーとかですね、これはですから相手の協定校と一緒にあって、学生が行き来をしながら2つの学位を取ったりすると。

それから、2つ目が一般に海外展開という意味でぱっと思う、海外校を設置するということですね。それから、Cが先ほども言ったオンラインというものをフル活用して、できるだけ日本に来なくても学習を完了できるような教育課程をつくると。それから、最後パターンDとしては、もう全く独立して当該国の設置認可を受けた、逆にいえば日本の設置認可をすっ飛ばした外国の大学というものを設置するということですね。ですから、これは言わば経営として海外に会社をつくったというのと同じ発想だということになります。ただ、パターンDというのは、海外の事例を見ましても、それほど多いわけではないです。

ほとんどの場合には、そうやって外国の大学というのをつくるときに当該国の設置認可を受けないといけないですよ。そうすると、イギリスとか、アメリカとか、オーストラリアの大学からすると、当該国の設置認可の要件自体があまり自分たちが慣れているものに合わない。彼らは自分たちのほうが優れていると思っていますから、どうして劣っているものに合わせないといけないんだということで、結局そこはバイパスしたがりますし、それから実際にやってみると、なかなかこの現地法人で外国の大学を設置するとなると、かなり現地の共同パートナーがいないと正直不可能です。ですので、当該国の設置認可を受けるという意味では、例えばタイでいうと泰日工業大学というのがございます。この泰日工業大学というのが泰日というふうにありますように、タイ側と日本側の商工会議所等が中心となって、言わば産業界がタッグを組んでつくった大学です。逆にいいますと、泰日工業大というのは日本の大学、一切関わってないんですね。産業界がつくった大学というのでやっています。これが15年ほど前にできたんですかね、できた大学ですけども、今もタイのほうでは一番というわけではないですけども、いわゆる高専を大学化したようなイメージの大学として高く評価をされています。

こういうふうなA、B、C、Dというパターンを、文科省さんとしては海外展開ということを考えているということになります。この中で、当然ながらハードルは幾つかあって、パターンDはちょっと非常に高い。また、パターンBが一番想定としては想像しやすいんですけども、これもなかなかハードルは高い。これに対して、パターンA、パターンCというのは、パターンAは今もうたくさんある。それから、パターンCに関しては今後が望まれているという、そういう状況ですね。このパターンCに関しては、設置基準において自ら開設する事業、多様なメディアを高度に利用し、外国において学生に履修させることができるとされているので、実際これはもうできると。ただ、現実論2018年段階でいいますと、設置基準でどのような場合に可能なのかというのは明示されていない。しかも文科省さんも明示されていないので、拡大解釈をするというよりはどちらかというと絞るほう側に大体指導を行ったという現実がありまして、それがコロナ期にどうしても我々、皆さんオンデマンドとかで授業をするようになった。

そのときに何回の授業を、どんなふうにやったらいいんだって、結構文科省さんから通知がありましたよね。あの通知を聞いていて、いや、そんな今2020年だぞというふうに、ちょっと海外にいる身からすると遅れているなと思ったこともあるんですけども、どうしても設置基準という言葉は大学設置の法律と憲法に当たるようなものからすると、なかなか法令上明示されていないから容易に拡大解釈をするというのは、やりにくいという文科省の気持ちは分からないでもないかなと。ただ、何とかそういう形でやりたいと、その際に転入学でメディアで授業する。これが実はダブル・ディグリーとかと同じようなアイデアの一方向版ですね。国外に最初に2年ほどいて、転入学で入ってくると。もしくは、もう完全に国外の大学にずっといる。1年ぐらい留学するかもしれないけどというような形でやる。その辺りが一応想定をされています。ただ、この多様なメディアを活用するという観点においては、文科省さんの様々な資料を見ている、やはり海外にずっと4年間いて言わば通信教育を受けたという形で卒業させるというのを海外の学生に認めてしまうんだとすれば、日本の国内の大学で通信制といわゆる通学制、課程分かれていきますよね。設置認可においても、そこは分かれるわけです。だから、海外にいる人に通信制を受けさせるに当たって、当然普通、通信制でなくて通学制のプログラムを受けさせるので、それは本当にいいのか、それともそもそも設置基準から見ても認可した、その認可の形で授業が行われても言えるのかというようなこと辺りが中教審、その他では議論をされているというのが現状です。

そして、OECDの資料を持ってきて、2019年の資料ですけれども、実際にどのような国境を越えた教育、Cross-Border Educationが行われているのかというのを調べた資料がありまして、ここにありますようにプログラムの移動形態という点ではフランチャイズ、フランチャイズというのは日本の教育のやり方というのを相手方に伝える。典型的なのは高専プログラムですね、高専の教育スタイルというものをタイ、ベトナム、それからインドネシア、こういう辺りに、今高専さんのほうが積極的に移出をしようとしている。これなんかは、フランチャイズというものの一つの典型ですね。

それから、ツイニング、ダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリー、それからArticulationということで、単位互換協定を結んで入学する、入学とかをしなくても一定数の単位が取れたり、もしくは読み替えが行われるなどのことをすることによって、将来的に留学をするのを楽にするというやつですね。それから、ヴァリデーションというのは、いわゆる認証評価のパターンですね。認証評価というのを今、我々も日本でも受けるようになっていきますけれども、そういったものを国際的なものとして移出する。これは、日本の場合にはJABEEさんが、JABEEの認証プログラムというのを今インドネシアのほうに移出して、インドネシア版JABEEというのを展開されています。それから、Eラーニングというものが当然ある。

一方、こういったものというのは言わば教育内容とか、やっていることの内容が移動するだけで大学そのものの場所は全く変わらないわけです。これに対して、機関自体が移動するという意味では、ブランチキャンパスという何ちゃら大学ロサンゼルス校みたいな形にするのか、それとも全く

独立の一つの大学をつくってしまうのか。それから、オーストラリアが今こういうものを非常に熱心にやっているの、オーストラリアとかカナダの大学なんかは、もともと現地にあった大学を買収する。買収もしくは合併するということで自分の大学の一部にしてしまうということもやっています。それから、そういったキャンパスとまではいかないけれども、スタディーセンターとか、ティーチングサイトというものを設けることによって、例えば通信的なオンラインでやっている、メインで授業でやっているものを補完するとか、そういったことをやっているものもあると。

それから、最後に提携ネットワークということで、これは海外にある大学と提携をして教育そのものをやり取りするというやり方ですね。この場合にオンラインで結ぶことによって、ただやっている場合もあれば一部インターンシップ等で移動するという、そういった場合もあります。このアフィリエイト・ネットワークを機関の移動形態と言っちゃっていいのかどうか、ちょっと疑問なところもありますけれども、大きく分けると教育の中身を移動させるのか、それとも場所ごと海外に設置するののかというので大きく分かれます。先ほどから言っていますとおり、機関が移動するというのは、やはりいろんな点でハードルが高いです。その結果、日本の大学の場合には、これを考えはするけれども、実際にはプログラムの移動系という形で考えるケースが圧倒的に多いんじゃないかと思います。

ところが、これは8月28日、今年の読売新聞さんのニュースですけれども、海外キャンパス設置というのを文科省が支援強化するのだと、これは後でもちょっと言いますけれども、対象国公立大学、海外の連携大学の敷地などにキャンパスを設置し、派遣した教員らが日本の大学教育の授業を行うことなどを想定する。これは、実は先ほどもちょっと言及しました、東京工業大さんがタマサート大学とやっているものが、まさにこの形態です。タマサート大学のキャンパスの中に建物があって、そここのところに定期的に日本の教員何名かが行って、向こうで3か月ほど授業をして帰ってくると。そういう形をやっています。このやり方というのは、先方の国からすると大変ありがたい。要は、オンラインではなく、本当に対面の授業を先進国から来てやってくれる。また、日本の大学からしても、日本の教員が実際に現地で授業をやるので、大変質の保証も取りやすい。その一方で、行かされる教員のほうにしてみると行きたい方はいいいんですが、何でこんなところに来ないといけないんだと思われる方も少なくないと、そういうふうなものです。ただ、それを何とかちゃんともっと形にしようということで、来年度以降支援をするのだということを文科省は決めた。

実は、この文科省が決めたというのは、これ今年の9月に日本学術振興会の大学の世界展開力強化事業プログラムというものの委員会が出された資料なんですけども、来年度から、この大学の世界展開力強化事業というのがかなり大きな予算を打って実施をされる予定になっています。まだたしか国会は通っていませんけども、様々な事業がこれでなされているんですが、そのうちの、その皮切りというか基となったのは芝浦工業大学さんも、その助成を受けていたスーパーグローバル大学創生支援事業という、スーパーグローバル、SGUですね。このSGUというので、やはり

選択された、採択された大学さんはどこも非常に頑張られておられました。その中でも、相原先生は自大学の紹介はあんまり謙遜されてなさらなかったかと思うんですけども、芝浦工業大学さんもなかなか本当にちゃんといろんなことをされておられて、先ほど言った職員というものは、教育を支えるサポートスタッフとして極めて大事なのだという認識の下、サポートスタッフ、事務職員の英語力の向上、それから英語で仕事ができる職員の積極的な採用という、そういったSDの部分での国際化というの大きなプログラムの一つとして行われていました。

そして、当然ながら学生というよりは学部生が中心ですけども、かなり多くの大学との連携をされて非常にいろいろなことを受入れ、企画ともにされておられました。実は、私の前任校であるプリンス・オブ・ソクラ大学も、このSGU絡みで芝浦工業大さんとはもう7年ぐらい付き合いがあります。前任校には、毎年芝浦工業大学さんから15から25名の学生さんがちょうどこの時期に向こうに行く。そして、大体6月か7月辺りに芝浦工業大学さんのほうで様々な大学から学生を受け入れるという形で、やはり1週間から10日辺りのプログラムをやるという形で事業を展開されてきておられます。実際に、このSGUの成果指標というのは、これは古いやつですけども、結構いろいろあって国際化関連とか、流動性とか、留学支援体制どれだけでできていますか、語学力どれぐらい上がりましたか。それから、教育システムというのは、どれぐらい国際通用性ができていますか。

そして、何よりも6番の大学の国際解放度ということで、どこの国に行ってもちょっと恐らく学事暦は異なりますから、その辺りをどれぐらい柔軟にできるようになっているか。それから、ガバナンスという点でも人事システム、これは教員のほうが中心に見えますけど、4番、ここのこれですね。人事システムの④、国際通用性を見据えた採用と研修というのは、これは教員だけではなくて職員のほうも入っていると理解しております。こういったもので、いろいろある。今、これ紹介したのは、この辺りというのが今後海外展開であれ、国際交流であれ、SGUと関係なく、こういったことがちゃんと入っていないと、せっかくやった国際交流とか、国際的な活動も文科省さんになかなか評価してもらえないよということでもあります。大体この辺をちゃんとやっていると、その部分は文科省さんから、あんた頑張ってるねというふうに言ってもらえるという感じですね。

2020、2033年までには、文科省さんはこういうのを、日本人学生の派遣が50万人、外国人留学生の受入れ定着は40万人と、そして教育の国際化と、実はこれは正直言って1990年代から言っていることは一緒です。数字はちょっとずつ変わっているんですけども、毎回ずっと言っていて、なかなか大体言っている目標には達さないで終わるということがこれまで続いてきたわけですかね。それから、この中でもやはり今後を考えた場合、この大学での英語のみで卒業、修了できる学部、研究科の数というのは増えたようにも見えるけど、あんまり増えたように見えるというのは、ここの前で、この前から比べると1990年代の頭はほぼゼロでしたから、そこから比べれば増えたように見えるけれども、それほど増えたとも言い難いというふうにも言えます。特に研究科の場合は、博士後期はいいんですよ、博士後期というのはほとんど授業がないですから、英語だけで修了できると

いうのはさほど難しくない。実際ここ見てお分かりのとおり、現状では学部よりも圧倒的に研究科のほうがすごく多い。しかもこの研究科の中には、博士前期課程と博士後期課程、これは分けてカウントでしていますんで、実際にはかなりの部分が博士後期課程に限定されているという感じです。

一方、ジョイント・ディグリーとダブル・ディグリーもご覧になってお分かりのとおり、ダブル・ディグリープログラムというのは、設置認可の問題が起きないので、言わば先方とちゃんと打ち合わせができると実現は結構できます。今現在、私自身も金沢大学さんとプリンス・オブ・ソンクラ大学でダブル・ディグリープログラムというのをもう既に開始しているんですけども、その課程数、プログラム数を増やすということで、ちょっと一部の学科さんとの間を取りまとめさせていただいています。一方、ジョイント・ディグリープログラムというのは、なかなかそれは難しいよと言ったとおり、なかなか数もそれほど多いわけではないですね。一応こういうふうな目標があるよというのは、どこかの念頭に置いておくと文科省さんがやっている話に応募するときに、ちょっといろいろこういうキーワードに入れられるかなというところですね。

そして、ここから先はもうこれからの話ですので、あくまでご紹介をするだけにとどめさせていただきますけども、実は来年度以降、この国際力強化、この大学の世界展開力強化事業という、この世界展開力強化事業というものが大きく4つのプログラムというもので、大規模な助成金プログラムが開始します。それがあって、この会議が日本学術振興会で9月に行われておるわけですけども、まず一つが大学教育のグローバル展開力の強化として、大学地域社会の国際化、それから大学の世界展開力の強化事業というので、特にEU、ASEAN諸国との大学間交流形成支援、それから大学生の留学生交流の充実ということで、留学生交流の支援。これは、さくらサイエンスとかでもやっていますけれども、そういったものですね。これ、どちらかというところと協定派遣、協定受入れという、いわゆる非正規の部分と学位取得という正規留学生というものに分かれます。これ、ご覧になってお分かりのとおり今の日本の場合の予算でいうと、正規学生の募集というのはかなり低いんですね。405名、全国ですから、非常に小さいと言わざるを得ない。

一方、協定派遣、協定受入れという意味では、協定受入れが5,500人というのは、ちょっと今前よりは減ってきている状態ですね。さくらサイエンスだと、それだけで1万人近い学生入れましたから、協定派遣のほうが逆に増えている感じですね。それから、優秀な学生の戦略的な受入れというのをどうするかというので、ここのところで国費留学生の制度で、もうちょっとでかくしようという形でやっています。すいません、ちょっと僕が誤解しましたね。この学位取得型の、この405人というのは、日本人学生を向こうにやるやり方ですね。なので、受け入れる側はもうちょっと多い、1万1,000人。1万1,000人でも多いとは言い難いかな、それぐらいです。

とりわけ、この2番のほうというのは留学生交流ですので、それほど新しいというよりは今までのものをより強化するという形ですけども、こちらこの2つ、大学、地域社会への国際化というのと、世界展開力の強化事業としての大学間交流形成支援という、この2つは今からの話で見てお分か

りのとおり、予算的にもそこそこ大きな額ですので、産技大のほうもそうですけども、今後我々が来年度に向けて、もし可能であれば助成申請などをしていくところになるのではないかなと思います。その大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業というもので、一番キーワードになっているのはここですね。地域社会と一体となったグローバル人材の育成、定着の促進という、この地域社会ということが非常に大きなキーワードになっている。

それから、同じく日本人学生と留学生がともに地域の課題解決に資する国際協調の仕組みということで、地域との連携というものが強く意識されているのが、この1つ目、まだ通っていないですけども、一応60億円というのを予算としてやりたいと文科省さんが狙っているものになります。これは、特に地方の大学などはチャンスなんですけど、なかなか地方の大学、どこまでそれが応募できるかということですね。

それから、世界展開力というほうに関しては、こちらはEU、ASEANの辺りと質保証を伴った連携、学生交流を戦略的に進めるという形で、いろんなプログラムのやり方がありますねということですね。この辺りは、ひょっとすると先ほどの芝浦工業大さんのご紹介にもあったようなダッシュボードを使った評価のメカニズムをつくっていくとか、そういったことも十分申請の対象になるんじゃないかなと思っています。この辺りが来年度以降、どんどんと本格化していくという点では大事ということですね。もう既に、こちらの側は去年から一応なされているんですけども、より一層進行されているということですね。これがもうちょっと具体的な話として書かれている。この資料は、後で産技大さんのほうには、周知されると思いますんで、そちらで見ていただければと思います。

ただ、大体こちらのほうを見てお分かりのとおり大体22億円とか10億円とか、新規の10億円とかというんで、それほど莫大にあるわけではないと。大体どちらも5,000万と4,000万ですから、大体これぐらいの予算規模だよということです。これに対して、ソーシャルインパクト創出支援事業のほうというのは、その約4倍近い予算ということで、こちらのほうは今後だと狙い目かなと思います。あと、オンラインの国際教育プラットフォーム事業とかというのもありだよなと、これもやはり世界展開力強化事業の一部として考えられているものです。

ちょっと随分と長く、ここまでのお話をしてしまいましたので、以下ちょっと時間をさっさといこうと思うんですが、実は今まで言ってきた話の問題で何が問題かというときに、例えば先ほど海外オフィスの設置というのがありました。これは、本当に2010年代から積極化して私がタイと深く関わるようになってタイに移動した。その辺りが一番これがうるさく言われていたときなので、うるさく言われたら、文科省からもいわゆる推奨があったからなんですけれども、ほとんどの場合、実はこれは国際交流協定校に看板を設置してもらう程度で終わっちゃっているんですよね。ですから、PSU、私の前任校でも複数の大学で実はこれ行っていました。行っていましたけれども、もう本当に看板がかけてあるだけで誰も何もしていないと。実はPSUの中の人間として、ほかの先生方から何々大学の何か看板かかっているけど、あれ何、あれ何のためにやってんのというのを実は一再ならず

聞かれたというのがあります。ですから、海外オフィスというのを設置して、それが実効的に動いたところは非常に限られていて、ほとんどの大学は看板つけて写真撮って終わったみたいな感じに正直になっていたのが現状です。これじゃ駄目だよねと、何のためにやったのと。

それから、JASSO、さくらなどによる超短期、いわゆる1週間から10日ほどの超短期の学生の受入れ、派遣は、特にさくらは全額支援ですので、中進国、途上国では割と喜ばれています。いったら、ただで行けるので。ただ、その一方で、これは毎年申請ですんで、基本的に相手国側としては、このさくらなどが来年もあるよねという形で、彼らのレギュラーな学事暦に組み入れるということができませんので、レギュラーな学事暦に組み入れられないということは、当然ながら成果、いわゆるカリキュラムの中に組み入れるという発想もないということになります。つまりさくらの場合ですと、9名の学生と1名の引率、10名ですね、今。10名を全額支援で受け入れると、全額支援ですので、大体10名受け入れるのに間接経費も含めて400万ぐらいはかかっています。400万から500万ぐらいかかっているんですけども、じゃその400万から500万を、これさくらって結構通っているところ多いんですが、相当なお金を使って、みんな喜びはするけれども、どれだけ効果があったんだろうかと言われると、正直微妙としか言わざるを得ないですね。タイの学生とかからすれば、さくらに当たったと言われると、日本に海外旅行に行けるというようなイメージでやっぱり思っちゃう学生も多いんですが。

その一方、タイは特にそうなんです、タイは今ASEAN諸国内でも教育リーダー国として近隣からの留学生受入れというのもするようになってきます。つまり送るのが当たり前だった途上国の時代から近隣国から受入れを図るという国になってきている。ところが、やはりタイとしても自国の高等教育が決して先進国並みに強いとまでは思っていないので、その辺で自国の大学のブランディングの一つとしてダブル・ディグリーというものを先進国とやりたいというので、これは今タイではダブル・ディグリーというのをやりたいんだといったら、もうどこの大学もウェルカムでいろいろ考えてくれると思います。その一方、日本の大学のほとんどについて、いわゆる海外キャンパス、これは今から文科省さんは支援をしようとしていますけれども、これ基本的に日本の設置基準に準拠して対象国も教育制度の認可は多分スルーするという、こういうふうなものの設置というのは、本当に相手国にとってうれしいことなんでしょうかと。

実はアメリカやイギリス、オーストラリア等が積極的にこれを行っています。これは、東南アジアでもやっていますし、トルコとかいろんなところでやっていますね。やっているんですけど、これ実は相手国の教育省とか、いわゆる教育の所管をしている省庁にすると非常に微妙な部分です。先ほども言ったように、アメリカ、イギリス、オーストラリア等の大学というのは、海外に設置する場合にわざわざ当該国の設置認可を通そうとはしません。しませんので、スルーしちゃうわけです。いわゆるインターナショナルスクールと同じですね。ですから、非常に何かいいはずのものが来たみたいなんだけれども、自分たちの所轄から完全に切り離れてしまっている。中で好き勝手やっている。

で、言うことを聞いてくれないというようなことがあって、これは非常に微妙です。これはタイでも、こういう大学もそうだし、インターナショナルスクールもそうなんですが、旅行のサイドと話したことがあるんですけども、インターナショナルスクールとか海外校の側からすると、我々は現地のいろんな変な制約からは完全にフリーなんだと、非常にプライドを持って、ちょっと悪い言い方をすれば当該国の状況をちょっと見下したような形で、我々は自由にやっているんだというふうにおっしゃる。

ところが、特にコロナ禍なんかで割と表面化したんですけれども、コロナが流行っているというので、学校をちょっと休校しなさい、閉校しなさいといったときに、当然自国の学校は、「はい」って言って閉校します。ところが、インターナショナルスクールとか海外校というのは、もうそれもなかなか従わないわけです。そうすると、これって教育の問題だけじゃなくて公衆衛生の問題という、また別の問題とも絡んできますよね。そのところで、何か先進国のプライドを振りかざされてもなというのがある。だから、そういったところで先例は結構、英米等であるんですけれども、それを見ていると正直相手国がどれだけうれしがっているかって言われると、非常に微妙なものを感じる。だから、また学生側も本国と同じ教育と言われてもなかなか眉に唾つける感覚は否めない。そして、何よりも日本の大学としては文科省の意向の下に頑張ろうとすると思うんですが、学生数数千名以下の大学にとっては、やはり海外キャンパスというのは非常にハードルが高いです。実際に既存の教育面との有機的な連携まではいかない。ただ、キャンパスは置いたけれども、労力にかかるけれども、結局成果もないんで、数年たったらやめちゃったになりかねないかと思います。

一方、相手側の話を考えれば、中進国、途上国は明確に自国とか自校の教育をよくしたいわけです。そのためには、以前は自国学生を先進国に留学させるしかなかったもので、させたい。けども、タイを中心に発展途上国のちょっと上から中進国ですね、そういったところでは自国、自校の教育をよくするための国際連携というのがより求められてきている。そういう中で、海外キャンパスというのを展開するというのを日本の都合だけで見ていると、多分かなり強いしっぺ返しを食らうのではないかと危惧しています。その意味では、より相手さんとの連携を図るというのがやっぱり大事なだろうな。

日本の大学というのは、日本にいるとなかなか分かりにくいんですけども、実は日本の大学規模というのは、ごく一部を除くと正直言って小っちゃいんです。小っちゃ過ぎるというでもいいですね。例えば、タイでは176の大学がありますけども、トップの10校以上は3万から5万人規模が当たり前です。それから、上の大体40校以上が1万人以上です。下のほうに行くと小さい大学あるんですけども、実はアジア圏では国の発展のために、まず首都発展させるというのと同じ発想で、教育の発展のために、まず既存にあるいい大学を大規模化して、より学生をそこに集めるという政策を取ってきたんですね。その結果、いい大学ほど実は規模がでかい。これ実は、欧米見るとやはり同じなんですね。欧米でもやはり「タイムズ・ハイアー・エデュケーション」のランキングとかに出てくるような

大学というのは、大体規模がでかいです。そういった規模の小さい大学としては、日本の大学間連携というので海外と対するのが現実的なんです、これはなかなかそう簡単にいかないよねというのは、皆さんご存じのとおりかと思います。

その意味では、やはり中小規模の大学においては、特に大学院もそうですけれども、本当に連携できる大学をしっかりと絞って、そこで全体的な関係を構築していくというほうがやはり現実的だろうと。ですから、大学院の場合ですと大学院の教育プログラムと同時に大学院を大学院たらしめているのは、たとえ専門職大学院であっても、やっぱり教員を中心とする研究力なわけです。だから、そのところで大学院のプログラムだけではなくて、その大学院のプログラムの背景にある研究というものも一まとめにした、全体的な関係を本当に連携できる大学絞って構築していくのが現実的じゃないかと思います。また、SGU採択校を中心に日本内外の大学との学学コンソーシアムから産学連携も進められています。そういうところへ入るのも一つですね。

それから、地方、これは私、周南公立大学に来て非常に強く感じていますけども、国際交流、産学連携、地域振興というのをセットに捉えてほしいというのが近年の地方自治体の期待として起こってきていますが、なかなか地方にある大学は、この3つをセットにして捉えるだけの余力が今ないというのが現状ですね。結局のところ海外展開が何のためにかをしっかりとビジョンとして持てるかというのが大事なんだと思います。もちろんそれは大学によっていろいろで、日本の自校での教育の改善につなげたいのか、自校への留学生獲得につなげたいのか。それとも、海外キャンパスとの2本立てで将来的に方向性を持たせたいのか。もしくは、研究力強化につなげたいのか、産学連携やりたいのか。いずれにせよ、どういうふうなものを最終目標、ゴールとして今何をするのかというのを考えていくというのがやはり大事ではないかと思います。ここはちょっと関連することですね。

その例として、ちょっと時間来てますので非常に簡単にだけ。私が以前に前任校でした大阪府立大学は、実はカンボジアのロイヤルユニバーシティ・オブ・ブノンペンと2010年から交流を始めました。非常にお恥ずかしながら、予算なかなか苦しかったのです。当時、特にあの橋下市政とかで、いろいろ予算限られていたので。そこで、当時の学長らと相談したのは、金をかけられないんだから知恵使おうよという、そういう方針をさせていただいた。何をやったかという、まず我々やったのはRUPPへのヒアリングなんですね。何してほしいですかと、なら彼らが最初に言ったのは、カンボジアで情報系の国際会議やったことがないと。もちろん海外の人が勝手にやってきてやったというはあるんですけども、カンボジアの人がちゃんとオーガナイザーの中に入ってやったというのにはなかったというので、2011年にJCAICTという小さな国際会議ですけども、これ実施をさせていただきました。これ実は向こうの、日本でいうNHKの夜の7時のニュースみたいなやつですね。そこで何と7分間にわたってこのJCAICTを実施したというのが報道されたぐらいです。そういうカンボジアで初の国際会議という、そういうのをやりたいというのでやりました。これ実は結構大変で、もうほとんど全てのステップにわたって非常に詳細にやり方説明しないと、向こうは何のことやら分か

らないという状況でした。けども、それをやっていくことで信頼をつくっていった。

そして、その次には世界に通じる教育システムの構築のために必要なことを教えてほしいというので、2014年には2日間、大学カリキュラムはこうやってつくるんだとか、大学院はこうやってやるんだというチュートリアル・ワークショップで、私2日間向こうで講義をやりました。とかということをやって、もちろん学生交流もやるという形で分かったのは、これは結構公的な場ではなく、むしろインフォーマルなので、本当に本音だと思うんですけど、大阪府立大学は非常に特別なパートナーだと、何でかという自分たちがやりたいことや正しいことを押し付けるんじゃないくて、何やりたいですか、それだったらこういうお手伝いができますよという形で、自分がやりたいことをサポートしようといつも考えてくれていると。そういうふうな形で信頼が得られたというのが、この10年以上付き合っただけでこられたことだろうと思います。ただ、これを今後どれだけ発展できるかは今後次第だと思います。

このほか、国際共同研究の指導とかも当然やりたい。ただ、ここのところでもなかなか共同研究といっても、どうしても中進国、途上国相手だと研究ターゲット場所の現地係員としか考えていないケース結構多いんですね。そうではなくて、彼らの教育研究の役に立つようなこともちゃんとやってということをやると、向こうの信頼もできるし、また結果的にはこちらが1年、2年たったときに共同研究やるのが随分楽になってくる。そのちょっと具体例のところをあとご紹介しているんですが、資料見ていただいても分かると思いますので、そこをちょっと割愛させていただいて、ちょっと長くなってしまいましたけども、今日海外展開の現状というのを文科省の資料を基に、特に今後の話という点での現状と注意点というのをちょっと指摘をさせていただきました。

そして、海外展開の入り口の一つとして、相手のやりたいことをお手伝いをする。それから、現地学生を積極的に巻き込んだ国際共同研究プロジェクトで、ちゃんとした指導をしていくというような辺りをやっていくのは、一つ特に大学院としてはありだろうなと思います。その意味では、大学が教育、研究の場であることを考えれば、それを本来の形で生かして、海外展開につなげられる。これが一番いいわけで、そのときにこちらの側の都合だけを考えるのではなくて、相手がどうしたいのか、相手が何を求めているのかということをやちゃんと考えながらサポートしていくと、結果的には信頼も醸成できて、今後の展開に結び付いていくのではないかと思います。

ちょっと長くなってしまいました。すみません、これで以上で終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございます。

松尾教授 ありがとうございます。それでは、質疑応答に入りたいと思います。会場及びオンラインの方で、質疑が、質問がある方は挙手をお願いします。いかがですか。ありがとうございます。そうしたら、吉田先生よろしくお願いします。

吉田教授 橋本先生、ご講演どうもありがとうございました。非常に多岐にわたった体験、日頃ではなかなか体験的に理解できないような内容をお伺いできて、本当にありがたく、どうもありがとうございます。

ざいます。私、こちらの教授をしております吉田といいます。よろしくお願いいたします。

質問は、本学、社会人中心の大学院というリカレント教育____となっておりますが、この3年ぐら
いのコロナ禍でちょっと変わった動きが起こっているように思っております。それは、前半相原先
生のときに少し質問させていただきましたが、オンラインを使った教育について前半で相原先生の
ほうからグローバルPBLなんかで、オンラインだけでは難しいんじゃないかというお話しなんかもい
ただいて、なるほどなと思いつながらお伺いしながら、その反面本学なんかでは通常の授業を中心に
オンラインで学ぶという学生が非常に多くなってまいりました。

そういう中で、実をいうとほかの大学院、宮城県の大学院とか京都府の大学院の、私授業担当を仰
せつかつていたりするんですが、それぞれの大学で驚いたのは、私もオンラインで東京から授業を
やったりしたのですが、学生もそういう宮城県とか京都府の大学の学生ですら東京都とか関東圏に
住んでいる人が実は私の授業を聞いているんだと、そういうことも起こっています。様々なことが
起こっている中、一番今回のお話で気になるのは、別の国にいる学生が日本の大学で学び、卒業して
いくこととか、日本にいる学生が別の国の大学で学び、卒業していくことになることとか、その辺の可能
性など起こってくるのかなということを少しこの頃思っていたところなのですが、その辺について
は何か思い当たることであるとか、その限界であるとか、そういったことがもしお思いのことが
ありましたら、お考えをお聞かせいただければと思います。

橋本講師 吉田先生、大変鋭いご質問をありがとうございます。

まず、先ほどの相原さんのコメントも非常にためになったのですが、オンラインの価値と
いうのがやはり学部と大学院で決定的に違うだろうかと、まず思っています。大学学部の場合とい
うのは、やはり我々皆承知しているとおり、受けている学生全員が向学心に溢れているわけでは正
直ないわけです。また、大人というのにはちょっと微妙な年齢でもある。つまりオンラインの授業が
学部の学生に対して、必ずしも十分な効果を上げたと言い難かった一つの理由は、やはり向学心と
か、自分で自分をやる気にさせるという部分がどうしても学部生の場合は難しいというのが関係し
ていると思います。これに対して、大学院の場合は基本的に向学心がある、勉強しようという気持ち
がある人のほうがメインですので、その点では別に国の内外を問わず、オンラインでそれなりの効
果を出していくことができるというふうに踏んでいます。

現実に、私自身も今インドネシアの大学の博士後期課程の授業をオンラインで担当していますし、
それからコロナのときにはうちのタイの大学でインドネシアからの留学生、結局来れなかったので、
全部オンラインでやったというのがありました。どちらもそれなりに向学心もあり、質疑応答もや
っていました。ただ、今おっしゃられた問題があるとすればどこだって言われると、本当にこのオン
ラインというのから、一からやって大丈夫だろうかという懸念だろうと思います。と申しますのは、
前任校でのインドネシアの学生の場合、本当にもうコロナで来れなかったもので、完全にオンライン
にせざるを得なかったんですが、やはり最初の辺りの時点では、全ての教員ができるだけオンライ

ンでいろいろな形で話をして、まず人間関係をつくるというところからやっぱり始めました。

それから、また今インドネシアの大学と言いましたが、インドネシアの大学のほうに関しては、これまで10年間に十数回、私行っていますので、向こうの教員はこちらのことを直接知っていますし、それから直近では去年にも1回行っていますので、今回オンラインで受けてくれている学生の3分の1ぐらいは、私のことを対面で知っているんですね。これは、日本のコロナのときもそうなんですけども、やはりもともと対面とかで既に知っている先生の授業をオンラインで受ける、もしくは受けざるを得なくなったということと、全くそういうものがない状況でいきなりオンラインから始まる。しかも、そのところで最初の信頼関係をつなげるとか、あまりなされることなくオンデマンドとかで、ただ授業がオンラインで進んでいくというのでは、やはり相当に効果の違いがあるのではないかと考えています。

その意味では、ですから国際的なという場合には通常の授業そのものはオンラインでやるんだけど、例えば入学後のオリエンテーション的なところであるとか、何かとにかく全員で行くことは無理でしょうけども、対面でできる部分を増やす、もしくはそれがどうしても他地域にわたって困難な場合であれば、ただ授業をやるというのではなく、オリエンテーション的なところで、1日でもいいから全員が集まってオンラインで話をする。もしくはその話が終わった後、大学院人数少ないと思いますんで、できるだけ一人一人の学生の顔が見える形で1対1で話をするとか、そういった形で最初の何か知っている先生が授業をやってくれる、知っている先生が指導してくれるという最初の一步を、できるだけ対面に近い形に持っていくのが大事なのではないかというふうに私のほうでは考えています。ご質問ありがとうございます。

吉田教授 ありがとうございます。非常に難しい点も明確にさせていただきながら教えていただいて、ありがとうございます。こういう動きというのは、国際的にはあるんでしょうか。まだないんですか。実は、日本にいる学生が中国で卒業するとか、インドネシアにいる学生が日本の大学に在籍して卒業していくとか、こういったシステムの動きというのはまだないんですか。

橋本講師 日本に関していいますと、日本の設置認可か設置基準上、たしかそれができないんじゃないかと思います。ひょっとしたら放送大学さんあたりが、あれは通信制なので、海外から受けれるのかなと思うんですけども、放送大学さんのほうでも海外の日本駐在とかしている人の受講というのは聞いたことあるんですが、あまり海外の人がというのは、ちょっと私はあまり聞いていません。日本の場合、それをあまりやっていないというのは、今言った設置基準上の問題で、ちょっとそれを留学生として受け入れられないということと、それからもう一つはやはりほとんどの授業が日本語で行われてしまうので、海外でどうしてもニーズがあまり高くないということじゃないかと思います。

一方、世界全体でいいますと、そういう形でほとんどの授業をオンラインで受けるというような、いわゆる通信制ですよね。通信制の大学院等も含めて、これは1990年代の後半からどんどん始まっていまして、そのうち結構淘汰されてなくなっているのもあるんですが、かなりそれなりにオンラ

インで全部できますよ。それもしっかりと、いわゆるごまかしではなくて、ちゃんとしたことをやっていますという大学はアメリカとイギリスを中心に結構やっています。例えば、昔の私の海外の大学での同僚の一人は、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンのMBAを通信で受けていましたね。そういうものの中には、ちゃんといわゆる3週間とか、現地に行ってやるというものが組み込まれているものが多いんですけども、最近はやっぱそれが難しいということで、それなしでも何とか終われるようにするようなプログラムもできています。

ただ、現実問題として特に東南アジアの場合には、田舎に住んでいて、どうしてもおうちの仕事を手伝うとかもあって、なかなかずっと学期期間中、大学のキャンパスにいれないという学生もいますので、そういったいわゆる通常の正規の学生に対して、オンラインで授業を提供するというのは、インドネシアの幾つかの大学はコロナ前からもう既に始めていましたし、タイの大学に関してはコロナの辺りからやり始めて、それが慣れてきたので、コロナが明けた今、現時点でも結構オンライン併用でやっているのが多いですね。ですから、ついこの間、久々に前のキャンパスに行ったんですけども、以前に比べると明らかにキャンパスの学生数が減っています。入学生は全然変わっていないので、結局オンラインで授業を受けれるというので、キャンパスまで来なくなっている学生が増えているなというふうに感じました。ですから、そういった試みはもう世界全体で進んでいますけども、日本ではちょっと必ずしも進んでいない。それは、設置基準の問題と日本語ということで、どこまでニーズがあるかという、そこら辺が関わるんじゃないかと思います。ありがとうございます。

吉田教授 大変よく分かりました。どうもありがとうございます。

松尾教授 ありがとうございます。現在、挙手いただいているところで、五十嵐先生、お願いします。

五十嵐助教 五十嵐と申します。橋本先生、本日はお話聞かせていただきまして、誠にありがとうございます。私から質問させていただきたいのが、私もちょうどカンボジアのお話先ほどあったのですけれども、1か月ちょっと前くらいにカンボジアITCのほうに産学連携アドバイザーとして呼んでいただいて、本当に現地のプノンペン王立大学の情報系の方々がやっていらっしゃるところのアイデアソン、参加させていただく機会ありました。コロナ禍で情報系の方、非常に多くて、あとアグリテックに関するビジネスのアイデアがすごく多くて、アイデアもおもしろかった一方で、ビジネスとしての構築の度合いとかは、まだそんなに学部生とか院生というのもあって、そんなに強くなかったかなという印象を受けております。

本学のほかの大学との比較したときの強みとしては、多分産業技術に関する高度な研究が多いことやタイ人学生が多いこと、それから東京都との連携が取れるみたいなところが本学の強みなのかなというふうに考えておりまして、例えばプノンペン大学と共同でアイデアソンだったりとかビジネスコンテストみたいなものを開催したりするみたいなものも連携の一つのきっかけになるのかなと思ったんですけども、どうですかね。その辺りについての意見とかをお伺いできると幸いです。

橋本講師 ありがとうございます。なると思います、まず結論としては、ちょっと具体的話になってし

まいますけれども、カンボジアの大学の場合、王立プノンペン大学というのは文系を中心とはしているものの、カンボジアでは明らかにトップ5に入る大学なんですね。実はカンボジアの教育省さんは、王立プノンペン大学を研究大学として育成するというよりも教育をメインとする大学の一番校にするという政策で動いている感じです。

五十嵐助教 なるほど。

橋本講師 その辺が例えば、その横にあるカンボジア工科大学、こちら研究大学として育成しようとしているんですね。

五十嵐助教 そっちからも来ていました。

橋本講師 王立農業大学とかもそうなんですね。なので、王立農業大学とかカンボジア工科大学はどちらかというと学生数、今でも結構絞っているのに対して、王立プノンペン大学というのは今もう2万人を超えているんですよ。なので、まずそういうふうな形で、より広いところに教育をしようというプログラムだと、まずご理解ください。なので、王立プノンペン大のほうは大学院課程、今持っているんですけども、大学院課程もどちらかというと社会人学生を中心にしています。逆にカンボジア工科大学のほうはフルタイム学生しか大学に基本的にいません。その状況で今、王立プノンペン大学では恐らく五十嵐先生が行かれたとき、ひょっとしたら話聞かれなかったかもしれないですけども、アントレプレナーシップ絡みのプロジェクトが2つ動いています。

1つは、王立プノンペン大学としてアントレプレナーシップの教育をしようというもの、それからもう一つは日本の商工会議だったかな、そこと連携して、やっぱりアントレプレナーシップの教育を実施することをしようといって、それはちゃんとビルもできて、今年からやり始めています。ですから、王立プノンペン大のほうは、アントレプレナーシップに関しては非常に興味があるので、そのところに言わば刺さる形で、よりアントレプレナーシップとか本当の意味の起業も含めて、アイデアソンで例えば選んだ幾つかを現実的なアントレプレナーシップ側に、ですからまずはアイデアソンでみんなでアイデアの話する。けど、その中の幾つか上位の実現できそうなものに関しては、そこからちょっとフェーズ2として、より実際の起業に向けての指導とかを行っていくとか、そういう話に持っていくと非常に向こうは喜ぶんじゃないかと思うんですよ。

五十嵐助教 そうですよね、POC回したりとかというところできますみたいな話は、結構よさそうですね。

橋本講師 はい、何せ私のところにも9月に行っていたときにその話を言われて、アントレプレナーシップの協力をしてくれないかって僕に言われたぐらいですから。

五十嵐助教 ああ、本当ですか。

橋本講師 五十嵐先生、まさにご専門として、そちらはやっていただきたく。

五十嵐助教 もしちょっと何か連携ができる機会があったら、ぜひよろしくお願いします。

橋本講師 もちろん、もちろん。

五十嵐助教 ありがとうございます。

橋本講師 ありがとうございます。

松尾教授 ありがとうございました。まだまだ多数のご質問があろうかと思いますが、時間になりましたので、橋本先生の第2セッションはこれにて終了したいと思います。こういった大学院の海外展開、AIITも頑張っている。さらに、そういった中においては、教員も非常に高度でレベル高いダイバーシティ・コンピテンシー獲得、そして向上していかなくちゃいけないんじゃないかなと感じました。また、それがよりよい、こういった海外展開を含めたいろんなチャンスをつかむ可能性を上げていくのではないかと思います。

今日は、橋本先生、どうもありがとうございました。皆さん、盛大な拍手をよろしく願います。

橋本講師 今後ともよろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。

松尾教授 ありがとうございました。これにて、本日のプログラム全て終了というところで、最後に全体の総括を、研究科長にご講評ということでいただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

吉田研究科長 すみません、研究科長の吉田です。相原先生、橋本先生、本当にいろいろ長い時間、たくさんのお話をいただきまして、ありがとうございました。

なかなか我々は、普通の工学系の教員として考えてはいる中、詳しいお話について、情報について得ることができにくいこと、それを専門的な知見からこういう形でお話をいただきまして、教員一同非常に刺激にもなり、また非常に重要な情報をいただいたというふうに考えております。本当にどうもありがとうございました。

また、本学の教員の皆さんとしては、本学はグローバル人材ということで、そういう概念を前向きに進めながら進んでいるところでございます。ただ、その反面なかなか特化した形でのグローバル化というものは、そんなに多くは進んでいなかったということもあるかもしれません。そういう中、国内でのビジネスもこれだけインターネットが普及し、それからまた国際化が非常に多岐にわたってどんどん進んでいくという状況になっているかと思います。リカレント教育の立場から考えても多くのことが誘発されているような状況になっております。今日の相原先生、橋本先生のお話を中心に、我々もまた一層努力しながら、このグローバル化、またグローバル人材の育成というようなことについて考えていく必要があるということが非常に自覚された一日でした。

委員会のほうも、こういう題材を用意してくださってどうもありがとうございました。松尾先生にもお礼申し上げます。どうもありがとうございます。

それでは、今日本当にいいご講演をいただきました相原先生、橋本先生に深く御礼申し上げるとともに、こちらからの言葉は締めたいと思います。どうもありがとうございました。

松尾教授 ありがとうございました。では、以上をもちまして第34回FDフォーラムを終了させていただきます。皆さん、ありがとうございました。この後は、引き続き本学教員に関しまして

は、入試の説明がございますので、お残りいただければと思います。今日は、ありがとうございました。

橋本講師 どうもありがとうございました。失礼いたします。

相原講師 失礼します。

○閉 会 午後 4時00分

2022 年度後期「学生による授業評価」 結果の概要報告

授業評価アンケート質問項目(通常科目)

NO.	項目	設問	回答
1	出席回数(出席率)	出席回数(出席率)について回答ください。なお、Google MeetやZoom等を用いた対面授業がない授業回(動画配信のみの授業)があった場合は、担当教員からの指示への対応(動画の視聴、課題への取り組み等)をもって1回分として数えて下さい。	①0～3回(出席率0～20%) ②4～6回(出席率21～40%) ③7～9回(出席率41～60%) ④10～12回(出席率61～80%) ⑤13～15回(出席率81～100%)
2	学習意欲	この授業の予習や復習、配信されている動画の見直し、レポート制作等に積極的に取り組んだか回答下さい。	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
3	シラバス	シラバス及び当初教員から示された授業計画は、実際の授業内容と大きな相違点はなく、必要な情報が記載してありましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
4	学習目的	授業は、各回の目的が明確で、どのようなことを学習しているのか、いま学習していることが何の役に立つか分かりやすかったですか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
5	学生の参加促進	担当教員は、学生との対話(授業中に質疑の時間を設ける、課題作業中に助言する等)に積極的で、授業への参加を促していましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
6	教材(教科書等)	教科書、配布資料(レジュメ)、黒板(スライド)、プログラムのソースコードなど、担当教員が準備した教材は、授業内容の理解に役立ちましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
7	教員の熱意	担当教員の指導に熱意はありましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
8	教員解説力・指導力(話し方、質疑応答)	担当教員の解説や指導は分かりやすかったですか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
9	有用性	学習した知識やスキルは、あなたの実務や将来の仕事に役に立つと思いましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う

10	満足度	学習できた内容に満足しましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
11	継続学習性(興味・関心)	この授業を受講したことで、この授業に関する内容に興味と関心を持ち、更に学習したいと思いましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
12	参加について ／遠隔授業	この授業は全回遠隔で参加しましたか？	①全回、対面で参加した ②一部遠隔、一部対面で参加した ③全回、遠隔で参加した
13	適性 ／遠隔授業	この授業は遠隔授業に適していると考えますか？	①全く適していない ②あまり適していない ③どちらとも言えない ④適している ⑤大いに適している
14	学習効果 ／遠隔授業	この授業を遠隔で実施したことで学習効果は上がったと思いますか？ ※本授業が一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施した授業については回答は不要。	①非常に下がった ②下がった ③あまり変わらない ④上がった ⑤非常に上がった
15	コミュニケーション ／遠隔授業	この授業において、教員や学生間とのコミュニケーションは十分でしたか？ ※本授業が一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施した授業については回答は不要。 ※ここでの「コミュニケーション」とは、質疑応答や議論など、いずれかが含まれていることを指し、その手段はオンライン対話、manaba掲示板でのメッセージのやりとり(数日の遅延を含める)を含む。	①非常に不十分だった ②不十分だった ③どちらとも言えない ④十分だった ⑤非常に十分だった
16	モチベーション ／動画配信	授業に対するモチベーションは対面授業形式(Meet/Zoom/一部は直接参加)に加え、動画配信のみの授業回があったことによって、途中で変化しましたか？(もしくは、動画配信のみの回を設けた場合、途中で変化すると思いますか？)	①低下したと思う(もしくは、低下すると思う) ②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う) ③向上したと思う(もしくは、向上すると思う)
17	通学の負担 ／動画配信	もし通学があった場合、通学に関する負担は、対面授業形式(Meet/Zoom/一部は直接参加)に加え、動画配信のみの授業回があったことによって、軽くなりましたか？(もしくは、動画配信のみの回を設けた場合、軽くなると思いますか？)	①重くなったと思う(もしくは、重くなると思う) ②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う) ③軽くなったと思う(もしくは、軽くなると思う)
18	学習上の負担 ／動画配信	学習に取り組む上での負担は対面授業形式(Meet/Zoom/一部は直接参加)に加え、動画配信のみの授業回があったことによって、軽くなりましたか？(もしくは、動画配信のみの回を設けた場合、軽くなると思いますか？)	①重くなったと思う(もしくは、重くなると思う) ②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う) ③軽くなったと思う(もしくは、軽くなると思う)

19	理解度 ／動画配信	この授業の内容に対する理解は対面授業形式 (Meet/Zoom/一部は直接参加)に加え、動画配信のみの授 業回があったことによって、深まりましたか？(もしくは、動 画配信のみの回を設けた場合、この授業の内容に対する 理解が深まると思いますか？)	①理解が浅くなったと思う(もしくは、理解が 浅くなると思う) ②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あ まり変わらないと思う) ③理解が深まったと思う(もしくは、理解が 深まると思う)
20	授業頻度 ／動画配信	この授業に動画配信のみの回を設ける数として、適切だと 思う回数(割合)を教えてください。	①0回(この授業は、すべて対面授業形式 (遠隔授業を含む)で実施した方がよい) ②4回程度(全授業回数の25%程度) ③8回程度(全授業回数の50%程度) ④12回程度(全授業回数の75%程度) ⑤15回(この授業は、すべて動画配信形式 で実施した方がよい)
21		良かった点や、他の授業にも取り入れて欲しい点等につい て記述して下さい。	自由記述
22		悪かった点や、改善した方がよい点等について記述して下 さい。	自由記述
23		授業をより良くするための提案や、授業内容に対する意 見、担当教員に伝えたいメッセージ等を記述して下さい。	自由記述
24		新型コロナウイルス感染防止対策として遠隔会議ツール (Google Meet、Zoom等)を用いた授業形式や教室での参 加が条件付になったことになったことについての意見を記 述して下さい。	自由記述
25		13-16の遠隔授業に関する質問以外で、気付いたこと、感 じた点等について記述して下さい。	自由記述

分析グラフ

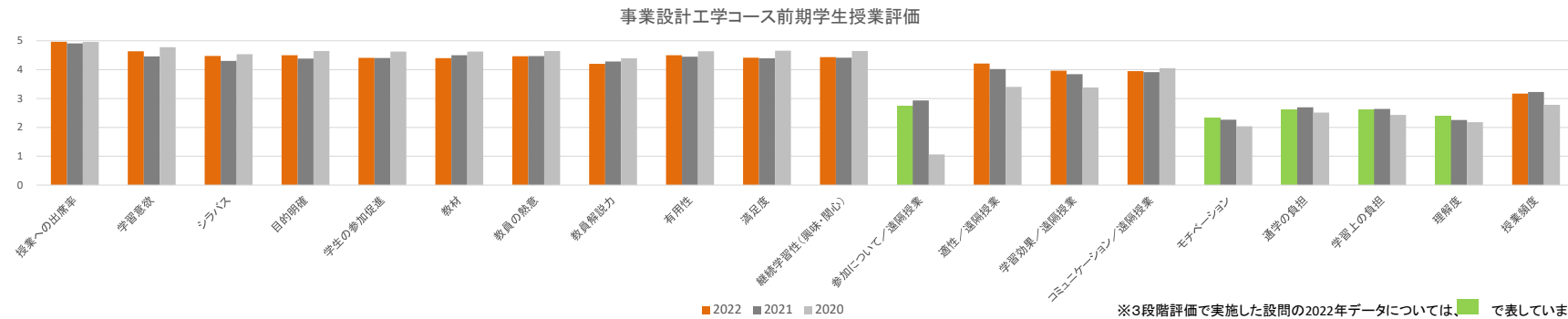
以下のグラフと表は、41ページから43ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。

※ 設問12,16,17,18,19は、3段階評価で実施

【事業設計工学コース(後期)】

後期学生授業評価平均値

設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
	授業への出席率	学習意欲	シラバス	目的明確	学生の参加促進	教材	教員の熱意	教員解説力	有用性	満足度	継続学習性(興味・関心)	参加について/遠隔授業	適性/遠隔授業	学習効果/遠隔授業	コミュニケーション/遠隔授業	モチベーション	通学の負担	学習上の負担	理解度	授業頻度
2022	4.97	4.64	4.47	4.50	4.41	4.40	4.47	4.20	4.50	4.42	4.43	2.74	4.21	3.97	3.95	2.32	2.60	2.62	2.40	3.17
2021	4.91	4.46	4.30	4.38	4.40	4.50	4.47	4.28	4.45	4.39	4.41	2.93	4.02	3.84	3.91	2.26	2.70	2.64	2.25	3.23
2020	4.96	4.78	4.54	4.65	4.63	4.63	4.65	4.39	4.64	4.66	4.65	1.06	3.40	3.38	4.05	2.04	2.52	2.43	2.18	2.78



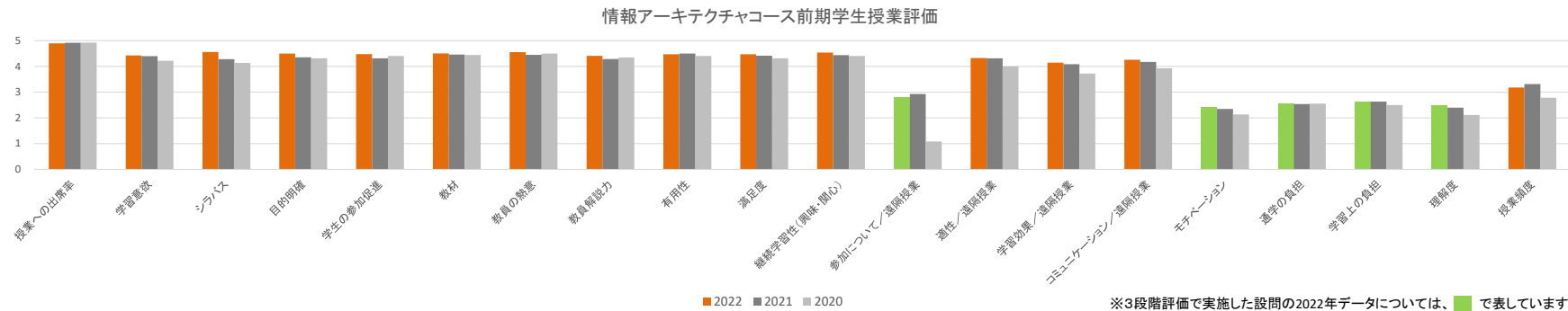
分析グラフ

以下のグラフと表は、41ページから 43ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。
※ 設問12,16,17,18,19は、3段階評価で実施

【情報アーキテクチャコース(後期)】

後期学生授業評価平均値

設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
	授業への出席率	学習意欲	シラバス	目的明確	学生の参加促進	教材	教員の熱意	教員解説力	有用性	満足度	継続学習性(興味・関心)	参加について/遠隔授業	適性/遠隔授業	学習効果/遠隔授業	コミュニケーション/遠隔授業	モチベーション	通学の負担	学習上の負担	理解度	授業頻度
2022	4.89	4.42	4.56	4.50	4.48	4.50	4.55	4.41	4.47	4.47	4.53	2.81	4.32	4.14	4.26	2.43	2.56	2.65	2.48	3.18
2021	4.92	4.40	4.28	4.35	4.31	4.46	4.44	4.28	4.50	4.41	4.43	2.92	4.31	4.08	4.17	2.34	2.54	2.63	2.40	3.31
2020	4.92	4.22	4.14	4.31	4.40	4.44	4.50	4.34	4.40	4.31	4.40	1.08	3.99	3.72	3.92	2.14	2.55	2.50	2.11	2.78



分析グラフ

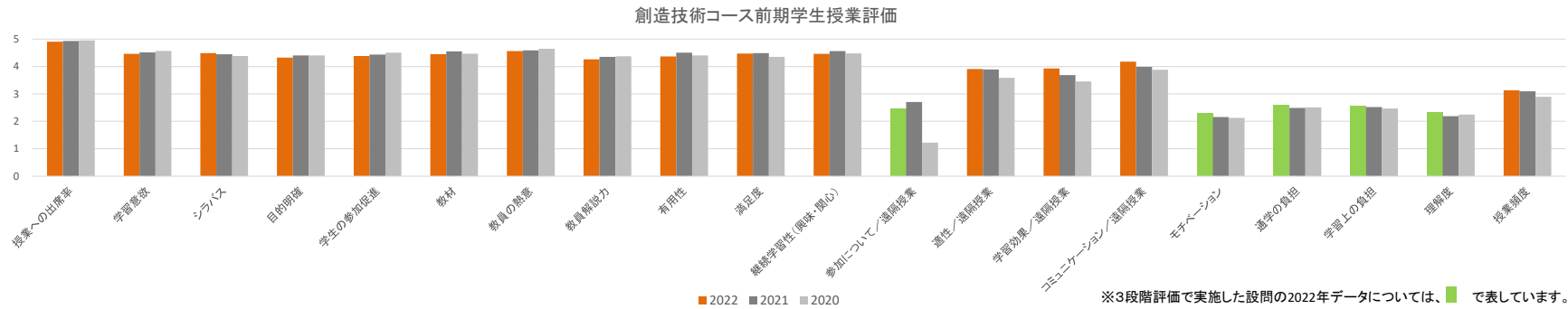
以下のグラフと表は、41ページから43ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。

※ 設問12,16,17,18,19は、3段階評価で実施

【創造技術コース(後期)】

後期学生授業評価平均値

設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
	授業への出席率	学習意欲	シラバス	目的明確	学生の参加促進	教材	教員の熱意	教員解説力	有用性	満足度	継続学習性(興味・関心)	参加について/遠隔授業	適性/遠隔授業	学習効果/遠隔授業	コミュニケーション/遠隔授業	モチベーション	通学の負担	学習上の負担	理解度	授業頻度
2022	4.91	4.46	4.49	4.33	4.38	4.45	4.56	4.26	4.37	4.48	4.46	2.44	3.91	3.93	4.18	2.30	2.59	2.54	2.33	3.13
2021	4.93	4.51	4.45	4.40	4.44	4.55	4.59	4.35	4.51	4.49	4.56	2.71	3.89	3.68	3.99	2.16	2.49	2.52	2.18	3.10
2020	4.96	4.57	4.38	4.41	4.50	4.47	4.65	4.38	4.41	4.35	4.48	1.22	3.58	3.46	3.88	2.13	2.51	2.47	2.25	2.90



授業評価アンケート質問項目(PBL型科目)

NO.	項目	設問	回答
1	出席時間数(出席率)	1週間あたりのコアタイムに参加した時間について回答ください。	①2時間以下 ②2～3時間以下 ③3～4時間以下 ④4～5時間以下 ⑤5時間以上
2	学習時間	1週間あたりのコアタイム以外での学習時間について回答ください。	①2時間以下 ②2～3時間以下 ③3～4時間以下 ④4～5時間以下 ⑤5時間以上
3	参加意欲	チーム活動が活発になるよう取り組みましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
4	プロジェクト説明書	プロジェクトの選択に当たってPBLプロジェクト説明書は役立ちましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
5	教員の熱意	担当教員の指導に熱意はありましたか？	①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う
6	参加について ／遠隔授業	このPBLは全回遠隔で参加しましたか？	①全回、対面で参加した ②一部遠隔、一部対面で参加した ③全回、遠隔で参加した
7	適性 ／遠隔授業	このPBLは遠隔授業に適していると考えますか？	①全く適していない ②あまり適していない ③どちらとも言えない ④適している ⑤大いに適している
8	学習効果 ／遠隔授業	このPBLを遠隔で実施したことで学習効果は上がったと思いますか？ ※本PBLが一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施したPBLについては回答は不要。	①非常に下がった ②下がった ③あまり変わらない ④上がった ⑤非常に上がった

9	コミュニケーション／遠隔授業	<p>このPBLにおいて、教員や学生間とのコミュニケーションは十分でしたか？</p> <p>※本PBLが一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施したPBLについては回答は不要。</p> <p>※コミュニケーションとは、質疑応答や議論など、いずれかが含まれていることを指し、その手段はオンライン対話、manaba掲示板でのメッセージのやりとり(数日の遅延を含める)を含む。</p>	<p>①非常に不十分だった ②不十分だった ③どちらとも言えない ④十分だった ⑤非常に十分だった</p>
10	有用性	このPBLで学習した知識やスキルは、あなたの実務や将来の仕事に役に立つと思いましたか？	<p>①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う</p>
11	満足度	このPBLを通じて学習できた内容に満足しましたか？	<p>①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う</p>
12	継続学習性(興味・関心)	このPBLを受講したことで、この授業に関する内容に興味と関心を持ち、更に学習したいと思いましたか？	<p>①全くそう思わない ②あまりそう思わない ③どちらとも言えない ④ややそう思う ⑤強くそう思う</p>
13		良かった点や、他の授業にも取り入れて欲しい点等について記述して下さい。	自由記述
14		悪かった点や、改善した方がよい点等について記述して下さい。	自由記述
15		PBLをより良くするための提案や、授業内容に対する意見、担当教員に伝えたいメッセージ等を記述して下さい。	自由記述
16		上記のほか、新型コロナウイルス感染防止対策として遠隔会議ツール(Google Meet、Zoom等)を用いた形式になったことについての意見を記述して下さい。	自由記述
17		上記6-9の遠隔におけるPBLに関する質問以外で、気付いたこと、感じた点等について記述して下さい。	自由記述

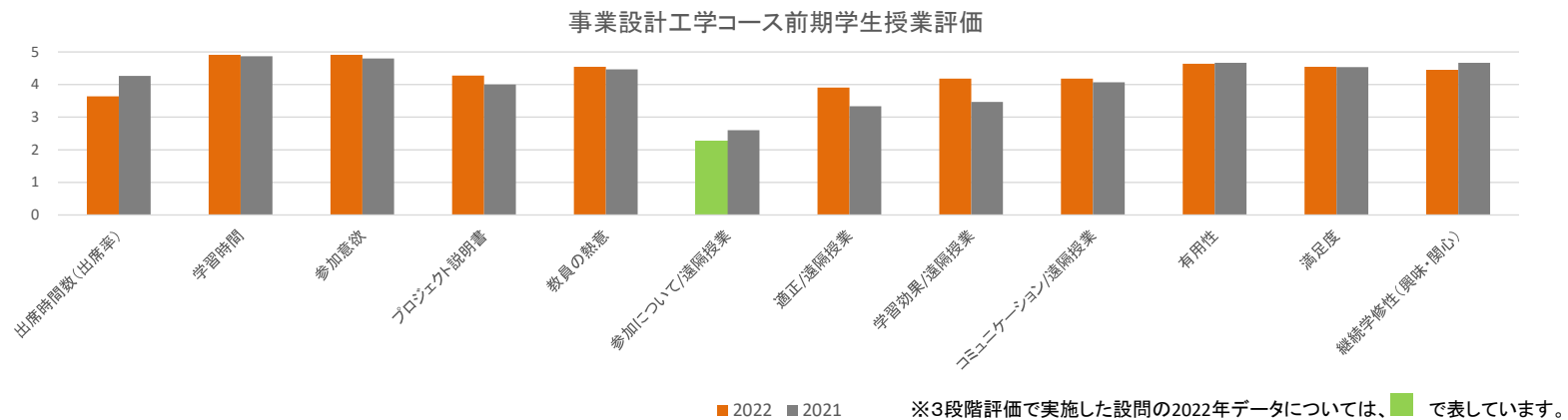
分析グラフ

以下のグラフと表は、47ページから48ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。
※ 設問6は、3段階評価で実施

【事業設計工学コース(事業設計工学特別演習2)】

学生授業評価平均値

設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	出席時間数 (出席率)	学習時間	参加意欲	プロジェクト 説明書	教員の熱意	参加について /遠隔授業	適正/遠隔授 業	学習効果/遠 隔授業	コミュニケー ション/遠隔授 業	有用性	満足度	継続学修性 (興味・関心)
2022	3.64	4.91	4.91	4.27	4.55	2.27	3.91	4.18	4.18	4.64	4.55	4.45
2021	4.27	4.87	4.80	4.00	4.47	2.60	3.33	3.47	4.07	4.67	4.53	4.67



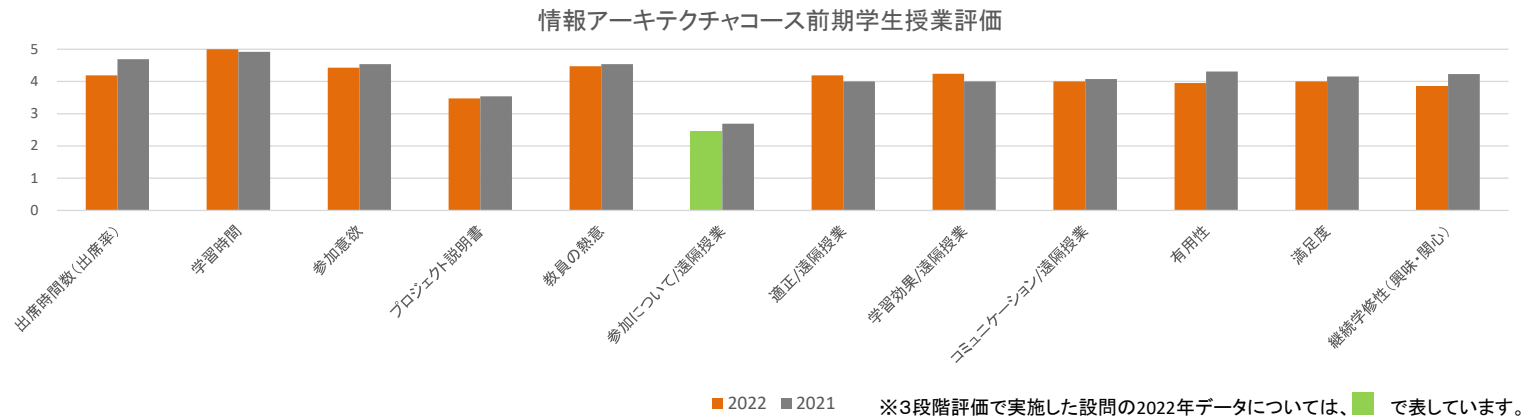
分析グラフ

以下のグラフと表は、47ページから48ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。
※ 設問6は、3段階評価で実施

【情報アーキテクチャ技術コース(情報システム学特別演習2)】

学生授業評価平均値

設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	出席時間数 (出席率)	学習時間	参加意欲	プロジェクト説明書	教員の熱意	参加について /遠隔授業	適正/遠隔授業	学習効果/遠隔授業	コミュニケーション/遠隔授業	有用性	満足度	継続学修性 (興味・関心)
2022	4.19	5.00	4.43	3.48	4.48	2.48	4.19	4.24	4.00	3.95	4.00	3.86
2021	4.69	4.92	4.54	3.54	4.54	2.69	4.00	4.00	4.08	4.31	4.15	4.23



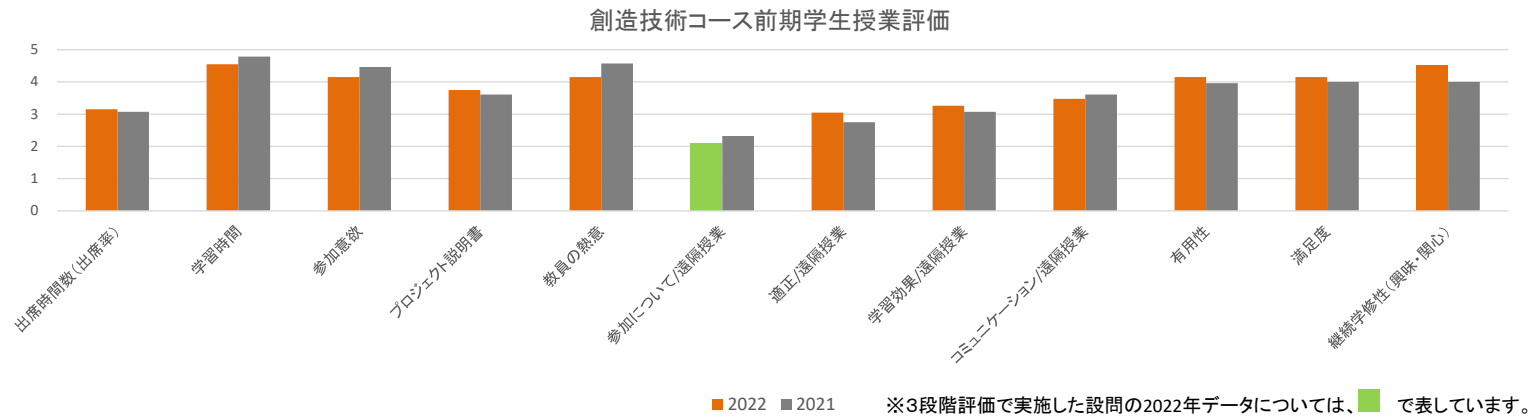
分析グラフ

以下のグラフと表は、47ページから48ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。
※ 設問6は、3段階評価で実施

【創造技術コース(イノベーションデザイン特別演習2)】

学生授業評価平均値

設問	1 出席時間数 (出席率)	2 学習時間	3 参加意欲	4 プロジェクト説明書	5 教員の熱意	6 参加について /遠隔授業	7 適正/遠隔授業	8 学習効果/遠 隔授業	9 コミュニケーション/遠隔授業	10 有用性	11 満足度	12 継続学修性 (興味・関心)
2022	3.15	4.55	4.15	3.75	4.15	2.10	3.05	3.26	3.47	4.15	4.15	4.50
2021	3.07	4.79	4.46	3.61	4.57	2.32	2.75	3.07	3.61	3.96	4.00	4.00



■ 第3クォータ アクションプラン ■

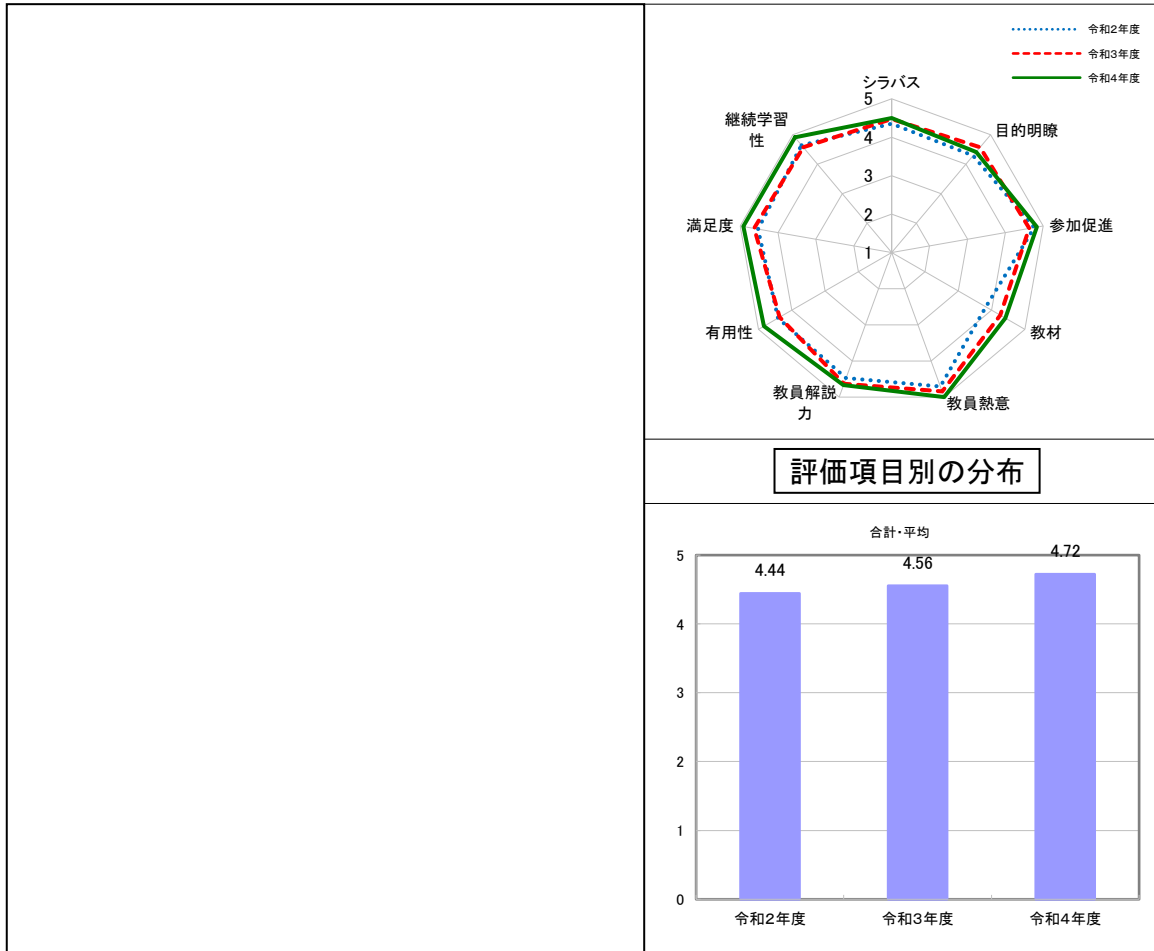
1 各コース共通科目

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：国際開発特論

氏名：前田 充浩

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

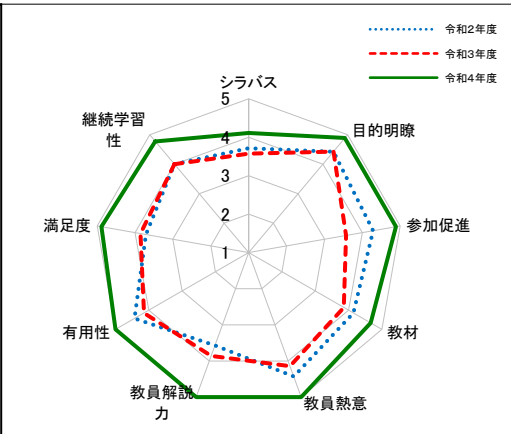
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名 : Technical Writing in English

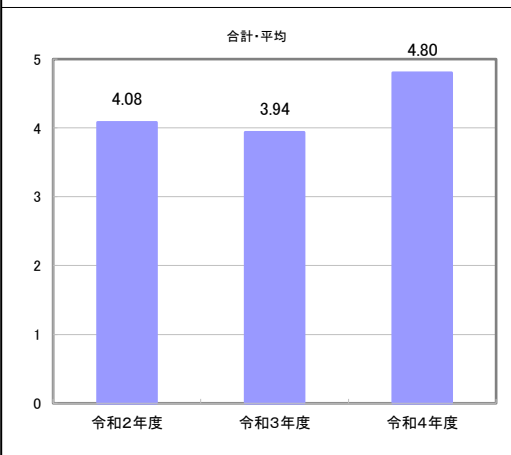
氏 名 : 嶋津 恵子

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

毎週、ライティングの実習(テクニカルライティングにのったレポート作成)を義務付け、無記名状態で公開し、すべての提出物に公表を公開でおこなった、これは自身の提出物だけでなく、他の履修生の提出物とそれに対する指導内容を参照することで、より学修効果が高まると考えたためであった。そしてこの方式の採用に関し、事前に全履修生から意見を収集し、同意を得ている。それでもなおかつ、この方式もしくはその結果に対する意見だと推察される、履修生から高い評価と劣悪なそれとの差を深く認識せざるを得ない、特に、教科書を履修生とともに輪読する方法と、提出されたレポートを論理的なものに書き直すために必要な指摘作業に関し、学修効果が高いと判断している履修生と、敵意ともいえるほどに感じているそれらが存在していたことは、対策の必要があると考える。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

今期の履修生からの意見を反映し、初回授業のオリエンテーションを次のように改善する。

- ① 教科書の どの部分を どのように 使って 学修をすすめるのかより詳細の説明を行う
- ② 提出物の無記名による公開指導に関し、提出イベントごとに、履修性の希望を確認する

これらのほかに、シラバスに記載をより誤解を与えないように配慮し、講義のタイトルに合わせ英語の時間を増やせるよう検討する。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：情報技術者倫理

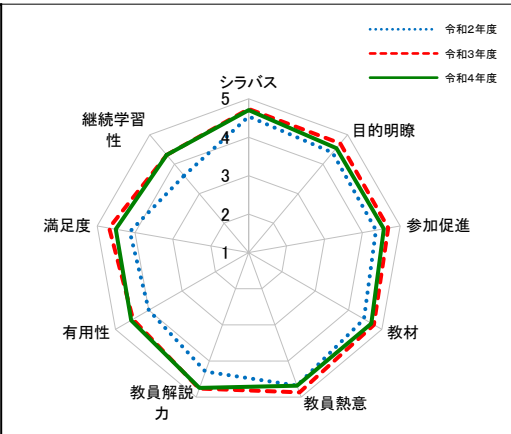
氏名：稲垣 実

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

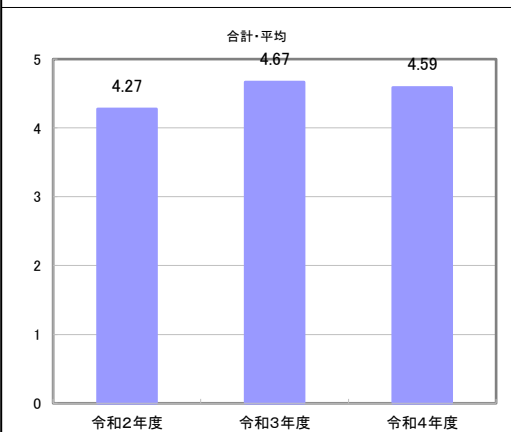
情報技術者倫理という科目の特性上、情報倫理、技術者倫理、情報技術者倫理といったさまざまな角度から情報技術者を取り巻く物事を考える多角的、かつ技術的、法律的、社会的といった多面的な検討と本質の追求が必要であり、多くの学生が単なる知識習得ではなく、講義を通じた多角的かつ多面的な検討により、多くに気づきを得られたという。これは、専門職大学院という社会人の学び場においては、学生それぞれの立場があり、それぞれの学生の立場を尊重したディスカッションは、科目の第一の目標を達成できたと思われる。

また、毎回異なるメンバーとのディスカッションは、多くの学生との接点が獲得できるだけでなく、多くの学生の価値あり意見を聞く機会となり、専門職大学院の価値を感じ取られたようである。

さらに、情報は日々進歩しているために、最新のニュースを取り入れたディスカッションや、ここ最近の法規制、IT業界で起きている問題などにもスポットを当てたことにより、すぐに活用できる見識が広がったようである。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

いささか70名を超える学生の講義では、それぞれの学生の修得状況を把握することは困難であることは学生も承知されており、受講する学生数を考慮頂きたい部分ではあるが、専攻コースを超えた学生とのディスカッションはとて多くの気づきがあるようで、継続すべき。ディスカッションは、限られた時間の中で実施するため、ディスカッション開始時にその役割を全員に割り振ることは、時間を有意義に使えたと思う。

また、すべての対面回においてレポートを課したが、レポートにより気づきが整理できたといわれる半面、負担が多いという学生もいるので、提出回数を考慮する必要があると思う。

■ 第3クォータ アクションプラン ■

2 事業設計工学コース科目

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：スタートアップ戦略特論

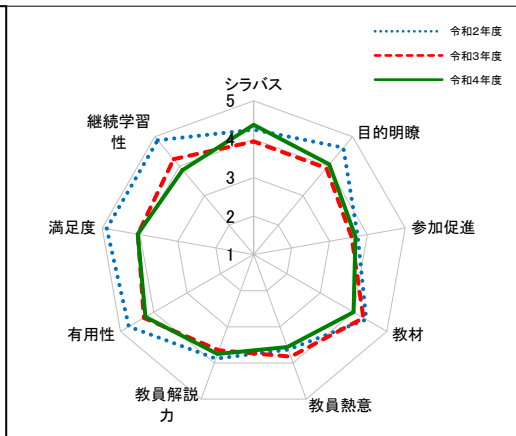
氏名：板倉 宏昭

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

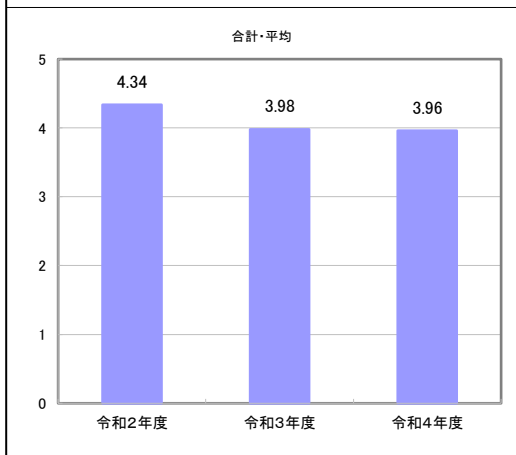
実際の起業の実務家の授業は、評価されている。例えば、「経営者から実際の経営について詳細を教示いただいたことや、ほかの学生によるプレゼンテーションによって起業に向けた発想の多様性を知ることができたことはたいへん参考になりました。」「できるだけ多くの事例に触れられれば学びや気付きが大きいと思いました。」「授業内容には満足しています。リーンローンチパッドについても理解が深まりゲスト講師にも感謝しております。」といった指摘である。

外部講師の多様性について評価されている。
「授業での学習した内容とスタートアップの第一線で活躍されている卒業生、行政、起業家の生の声がリンクしたスタイルは知識の活用と応用を学ぶ上で役立った」といった指摘である。

また、遠隔講義も評価されている。例えば、「遠隔会議ツールを用いた授業形式があったことにより、授業に参加することができたため、コロナ禍が終息した後も継続を切に希望。」といった指摘があった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

遠隔授業は、支持する声が多いが、対面とオンラインと録画をいかに組み合わせるかが検討事項である。

「授業が録画になったことで、復習のための再聴講が可能になったので、非常に有効だと思います。」

遠隔ならではのタイムマネジメントも課題である。「受講生の課題発表の会は毎回授業が30分以上伸びる。受講生の発表を時間で切るとともに、講師コメント時間も一定時間内に収めてほしい。」

「遠隔は非常に効果があると思いますので、対面と使い分けていただくのは良かったです。遠隔に慣れると対面の授業時間は7限だとうれしいです。」

遠隔授業の経験をいかして授業時間の設定やタイムマネジメントに注意するなど、今後の授業改善を進めたい。

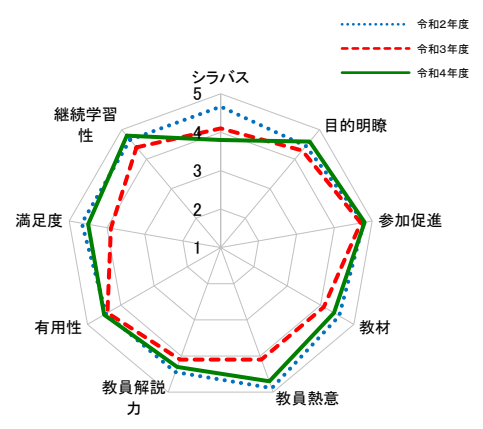
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：統計・数理計量ファイナンス特別演習

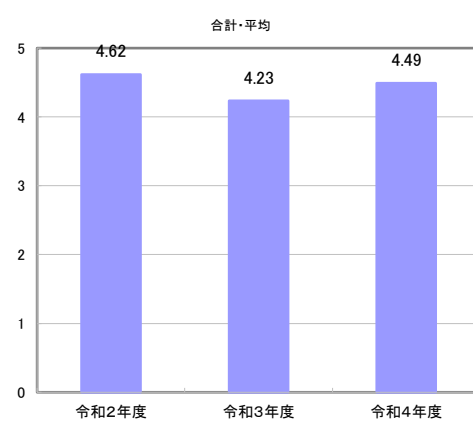
氏名：三好 祐輔

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

- ・とても丁寧に解説いただき、とても勉強になった。学生の質問にもとても親切に回答いただいていた点。初めて使うツールだったが、授業内でわかりやすく解説してくれたおかげでスムーズに進めることができた点。
- ・質問の内容などに真摯に答えてくれていた点。
- ・授業の進捗や学生の理解度に応じて、録画授業により更なる知識の補充・拡充ができるような内容をタイムリーに提供いただいていた点。
- ・難しい数式の解説などは避けて、本質的に知っておくべきことを優先していた点。
- ・収録授業とライブ授業で、しっかりとやるべきことを分けていたので、遠隔でも Stata の操作を学ぶことができた点。
- ・平易な言葉での解説をしていた点。
- ・基礎的な内容に終始した点。
- ・統計の概念的な部分を、もう少し噛み砕いて講義して欲しい。
- ・教室でも画面が見えづらいなどあるので、遠隔で内容的にはマッチしていた点。
- ・特別演習というお題目に対しては、遠隔形式は対面と変わらない教育の質が保たれていた点。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

・今年の学生の学ぶ姿勢が積極的で、教え甲斐があった。例年(広く浅く)と異なり、今年は対面の講義を踏まえて録画講義を配信する(狭く深く)方法を行った。理由は、双方向性の観点から学生の学びには良いと思い、シラバス通りの講義をあえてしなかった。学生の能動的な姿勢を尊重する為、今後シラバスの変更を行うか検討中である。

・遠隔授業を望む学生が多いことを受け、パソコンの操作画面を切り替えの方法を学び、それを活かしたいと考えている。

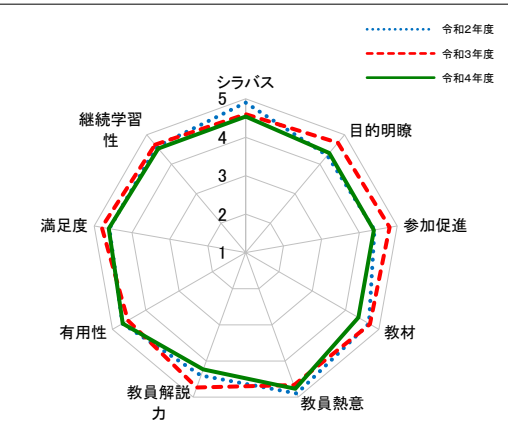
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：製品開発組織特論

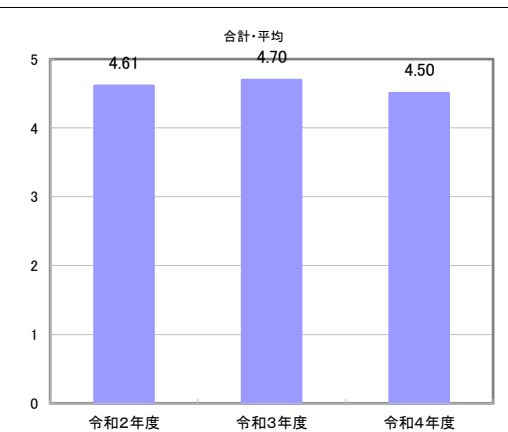
氏名：吉田 敏

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

目的明確、学生の参加促進、教材について、前年度より低い評価がなされている傾向がある。目的明確については、学生の目的に適応しているかどうか、具体的に明示する必要性が考えられる。次年度以降について、参考にしていきたい。教材については、具体例を含めながら、できるだけ新しい情報を載せながら、論理の明確性や論理性に、一層の厚みを加えるように努力していきたいと考えている。有用性、教員の熱意は向上している。特に有用性が向上したことについては、社会での実践可能性に対して有効な面があると認識してもらったと考えられ、この面について、次年度へ向けて堅持していきたいと考える。満足度が、比較的高く保たれていることについて、前向きにとらえながら、講義の骨格については維持していくことを考えていきたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

グループ議論については、概ね高評価であり、学生の自由な議論を引き出すように継続的に進化させていく所存である。ただし、議論の中で話をすることが好きな学生ばかり発言をするという指摘もあり、改善も考えていきたい。内容については、学生自身に考える時間を多くとっているが、その点が高評価の人と、フィードバックなどを中心に求める人が混在している。できるだけ最適な方法について、次年度以降も熟慮を繰り返しながら、改善していく所存である。

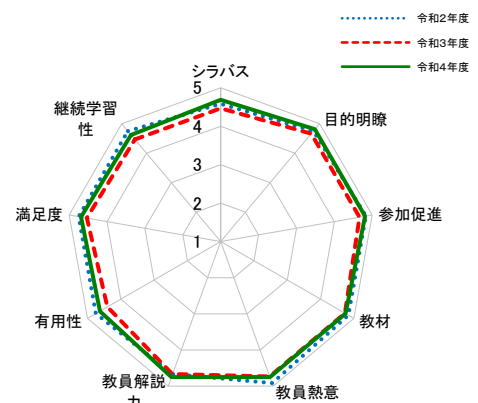
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：ネットワーク事業設計特論

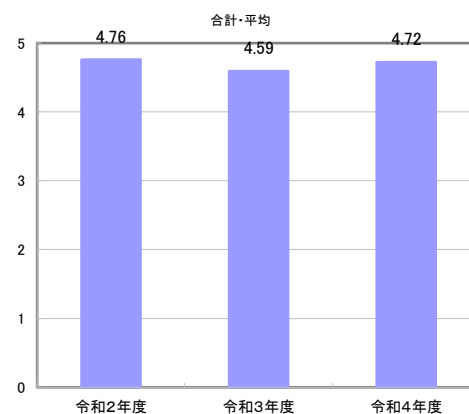
氏名：細田 貴明

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

- ・全体として一定の評価を得ることができた。
- ・録画形式回と講義形式回の回数について、バランスが良いとの評価を受けた。
- ・受講生が講義後のコメントを残し、それにフィードバックを行う点について、振り返りができ良い取り組みであるという評価を受けた。
- ・他受講生の課題の解答をフィードバックしてほしいというコメントがあった。
- ・講師から課題へのフィードバックをしてほしいとのコメントがあった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

- ・全体として、一定の評価を受けたことから講義方針として継続することに問題がないと判断する。
- ・録画形式と講義形式のバランスについては、半々を意識しているので今後も継続したい。情報が不足すると感じる学生については、参考講義として動画を追加掲載しているのでそちらを学んだ頂くことを推奨する。
- ・受講生の課題の解答のフィードバックについては、次回以降受講生の手承を得られた場合にはフィードバックしたい。
- ・講師から課題へのフィードバックについては、演習中になるべくコメントするように心掛けていたが、全員に常にコメントできたわけではないので、フィードバックの方法について今後検討したい。

■ 第3クォータ アクションプラン ■

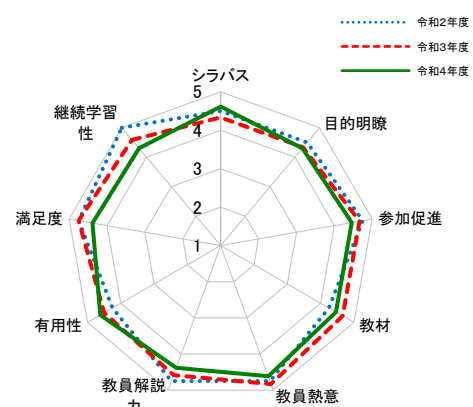
3 情報アーキテクチャコース科目

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

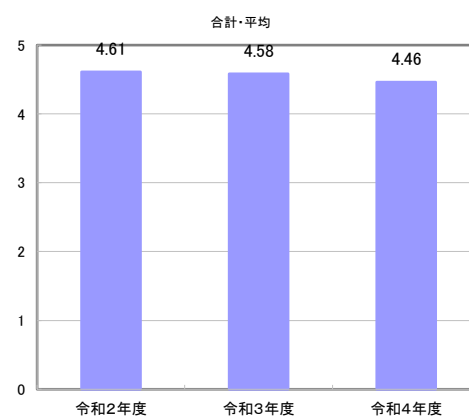
講義名 : OSS特論
氏 名 : 小山 裕司

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

今年度も科目等履修生が多く、昨年同様の20名強の履修者数であった。評価平均は4.46、回収率は61.9%(履修者21名中13名)と若干下がった。個々の項目では、目的明確、教員解説、満足の評価が4.3台と低めであり、有用度、満足、継続で2名の学生が評価3以下を付けている。逆に、シラバス、教員熱意、有用性の評価は4.6以上であり、目的明確が評価4と評価5が同数であったが、残りはすべて評価5の学生が最も多かった。また、遠隔授業の取り組みも評価されていたように感じた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

学生からの評価及びコメントは概ね妥当だという評価だと理解している。学生からのコメントを参考に長所は継続し、指摘いただいた短所は改善を試みたい。授業内容は年次で新しく更新する。また遠隔授業、共同作業等の仕組みの改善を継続する。

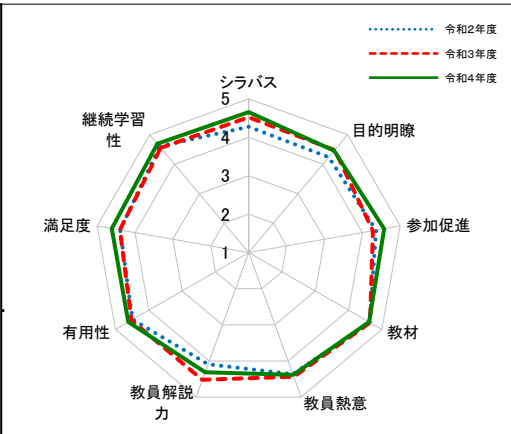
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：データインテリジェンス特論

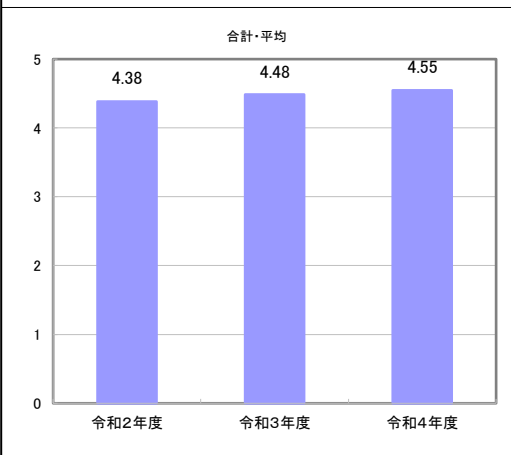
氏名：追川 修一

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

評価の平均は4.55と前年度の4.48よりも改善した。講義資料として、理論を説明するスライドに加えて、どのように理論を実践するのかを説明するためのプログラムが充実している点、プログラムはライブラリを利用し実用性を高めている点、質問に対して授業中だけでなくオフラインでも速やかに応答した点について、良かった点としての指摘として複数あげられた。評価平均4.55よりも良い設問としては、Q7. 教材が4.64、Q12. 継続学修性 4.56があり、これらの点が評価されたものと考えられる。設問Q6. 学生の参加促進は4.28と低めである。関連する学生からの評価としては、資料の掲載が早い方が予習の時間を十分にとることができ授業での質問がしやすくなる、演習問題がもっとある良い、といったものがあつた。また、個人では改善が困難であるが、録画の解像度が低いいためプログラムが見にくいことが評価の低下につながった可能性がある。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

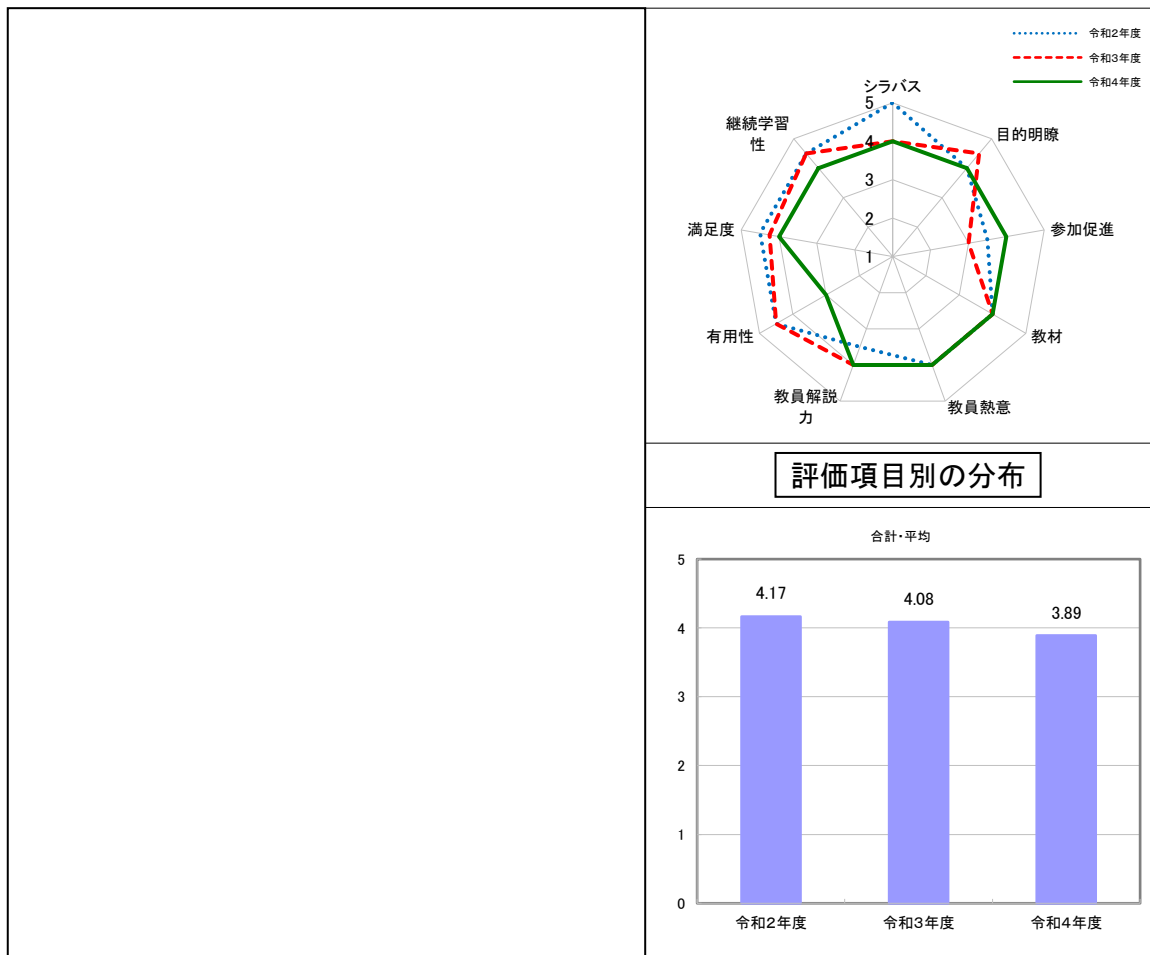
資料をできるだけ早く掲載し、予習の時間を十分にとることができるように改善する。演習問題については、調査のうえ、参考となる資料や図書の提示も含めて、検討する。質問に対して授業中だけでなくオフラインでも速やかに応答した点は、複数良かった点としての指摘があり、質問しやすい雰囲気にとこと合わせて、学生の授業に対する意欲を高めることにつながると感じたため、継続して心掛ける。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：クラウドインフラ構築特論

氏名：山崎 泰宏

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)



2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：情報ビジネス特別講義1

氏名：六川 浩明

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

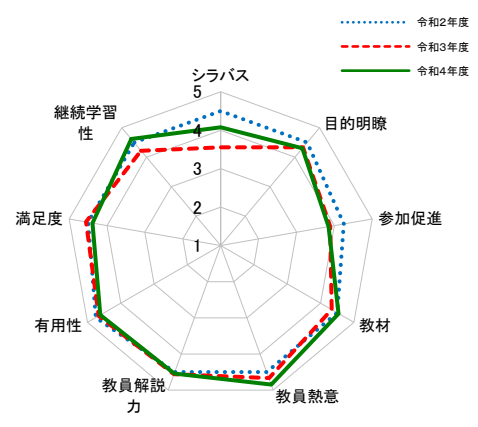
(1) 良い評価を頂いた点について。

(ア) 海外及び日本における直近の報道内容や新しい法律制度等を、授業のテーマとして取り上げた点、(イ) 法律論はともすれば観念論や抽象論に陥ってしまうところ、常に、具体的事例を説明しながら授業を進めた点は、良い評価を頂いた。

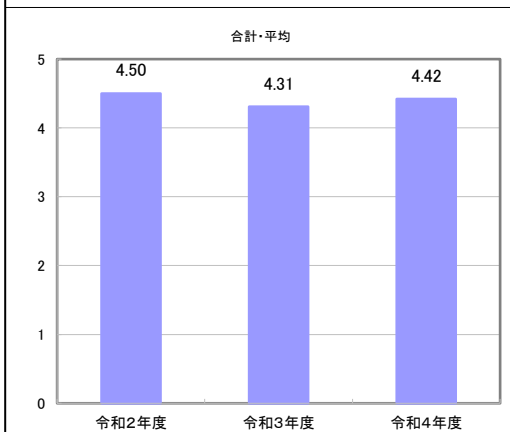
(2) 悪い評価を頂いた点について。

(ア) manabaを操作しておらず、manabaの掲示板を見ていなかったため、受講生からの質問に回答していなかった点、(イ) 録画された授業動画は、資料を映しながらの説明ではなく、講師の姿と声が録画されているのみであるため、資料のどこを説明しているのかを声で判断するしかなかったという点、(ウ) 録画は資料とポインターを映し、資料のどこを説明しているのかをわかるようにしてほしい、というご指摘を頂きました。

とくに(イ)と(ウ)については、授業実施後において、受講生の皆さんが録画をご覧になることを全く想定しておりませんでした。大変重要な点をご指摘いただき、次年度の授業に向けて改善しなければならない点であると痛感しております。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

(1) 良い評価を頂いた点について。

平成19年にAIITの非常勤講師に就任して以来、毎年、授業で使用するレジュメを書き替えております。それは、毎年、海外及び日本において、新しい技術革新や社会問題が発生していることに伴い、新しい法律制度等が構築されており、それを授業のテーマとして取り上げてきております。これは、引き続き、行っていきたいと思っております。

(2) 悪い評価を頂いた点について。

まず、manabaの操作方法に習熟し、manabaの掲示板を毎週見ることに努めたいと思っております。

そして、授業実施後において、受講生の皆さんが録画をご覧になることを全く想定しておりませんでした。そこで、授業実施後において、受講生の皆さんが録画をご覧になることを想定しながら、毎回の授業を進めていきたいと思っております。具体的には、ご指摘を頂いたように、資料のどこを説明しているのかを判別できるように、ポインターを使用しながら、資料の頁数を明確に発音しながら、資料のどこを説明しているのかをわかるように、授業を進行していきたいと思っております。

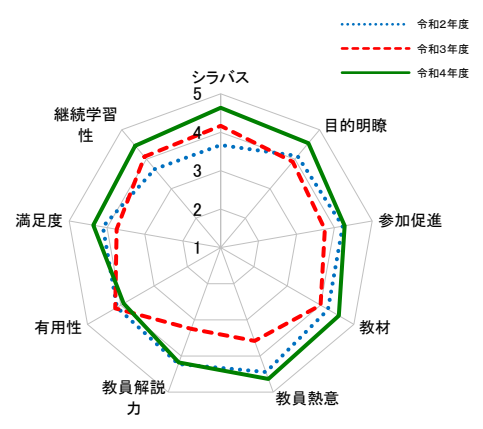
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：セキュアプログラミング特論

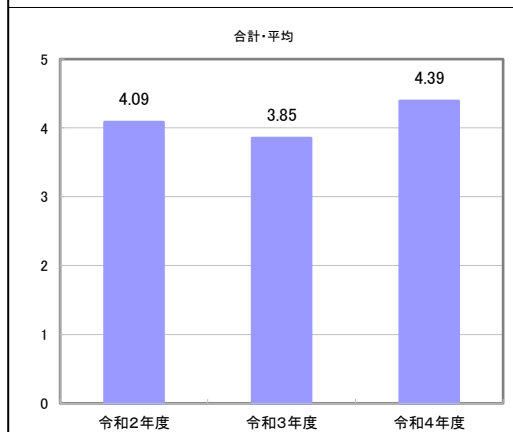
氏名：黄 緒平

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

本年度は平均得点が4.39となり、受講生からは好評を頂いた。主にC言語におけるセキュアプログラミング技法について、理論面と実践面についてバランスよく行われて学習意欲が高まった事がポイントになる。また、グループワークで学習理解が深まったと好意的なお声を頂いた。但し、3回に渡り実施されたグループワークのテーマ選定については賛否両論だった。グループ内でも一部のメンバーが独自に特定なテーマに取り組む等グループがちゃんと機能していないという指摘とグループワークの内容に自由度があって、授業で習った内容を活かせるような形がよかったと、テーマの自由選定について、評価は二極化になっているため、工夫して改善していきたい。参考図書が高価で入手困難とのコメントもあった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

本授業は理論知識に留まらず、理論知識に合わせてソースコードの事前配布で実習を行いながら解説する方式を採用している。また、システムの欠陥の説明については、年度毎少しずつ最新な話題を取り入れている。脆弱性の再現のためのソースコードも攻撃の手法の進化と共に、年々更新している。理論知識への理解を深めるため、今後も継続的に講義と演習の両方を取り入れて実施したいと思う。改善すべき点については、グループメンバーの構成及びグループワークのテーマ選定について改善の余地があるように思う。これまではアンケートを用い、プログラミングの経験等のデータでグループ分けをしており、テーマ選定については教員が指定せずに、例年のテーマを参考として提示し、かなり自由度が高く、逆にメンバー間の一体感が生まれにくかったかもしれない。今後は難易度を考慮し、メンバー決め及びテーマの選定について、実施体制をバランスよく決めたいと思う。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

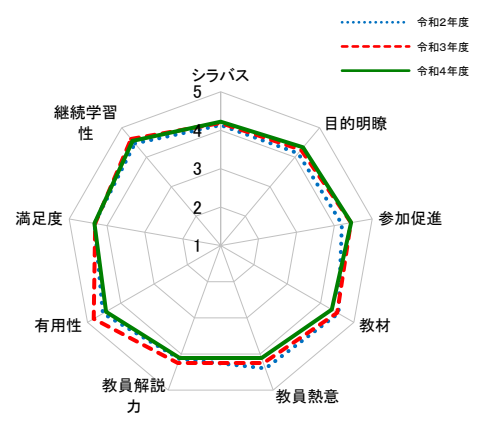
講義名：クラウドサーバ構築特論

氏名：飛田 博章

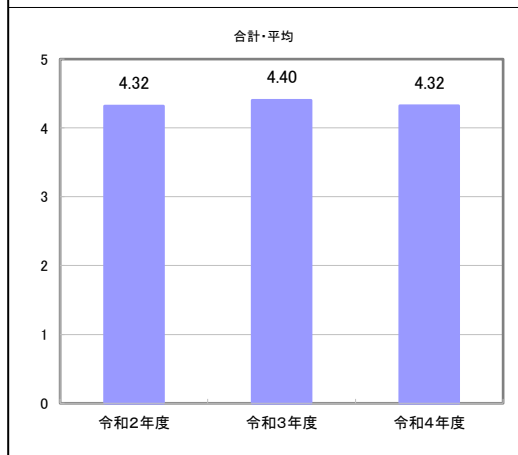
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

スコアに関して、平均は昨年度と比較すると若干下がってはいるが、全体的には全ての項目で4以上の評価を得た。項目毎のスコアでは、シラバス、目的明確、満足度の各項目で昨年度よりも若干上がっているが、教材、教員の熱意、教員の解説力は若干下がっている。

アンケートに関しては、グループワークに関して好意的なコメントが多かった。また、内容に関するコメントとして、難易度に関するものもあった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

難易度に関しては、履修者の中に初心者も含まれていることから、今年度の教材をベースに履修者の理解度に配慮しながら対応していく予定でいる。また、資料の見やすさや解説の分かりやすさに関して、今年度の資料を精査しながら、よりよい授業を提供できるように改善する予定でいる。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

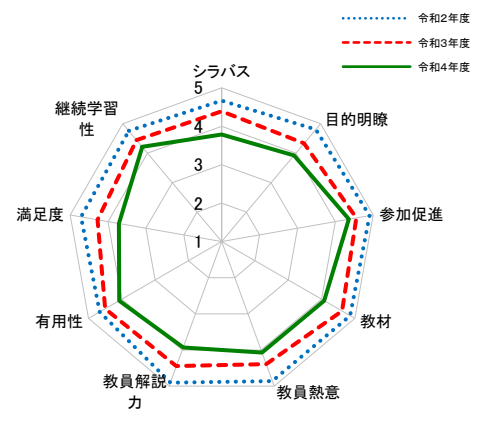
講義名：アジャイル開発手法特論

氏名：今給黎 隆

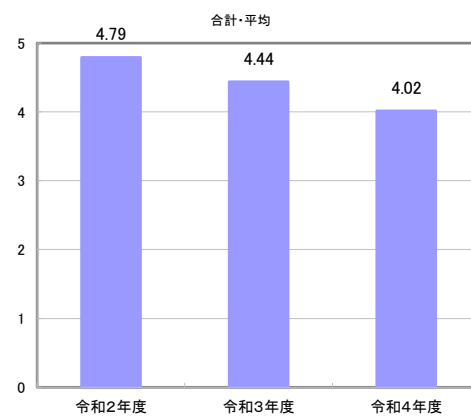
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

・「他受講生と絡むセッションは、十分な時間が確保されず、消化不良となったことは残念。」というご指摘をいただきました。今回は、私の都合で動画での授業の回が決まっており、適切な順番で授業ができなかったことを申し訳なく思います。

・「当講座が扱う内容からして、実際の開発現場を模し、シミュレーションしていくような実践形式を多用しないと、表面的な理解だけに終始することになるため、是非そのような企画を重視いただければと思います。」というご意見をいただきました。ごもっともなご指摘なのですが、悩ましく思っています。今回の授業の分野はWebサービスが親和性が高いのですが、そのような授業のスタイルにすると、「うちの業界では同じことが成り立たない」という意見が出てくることも必至です。結局は「開発現場」を定義するのが難しいため、あまり現場を再現しすぎるのも良いことではないのかと悩んでいます。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

「結局対面参加まで至らなかった」という意見が見受けられました。授業で話をしても、皆さんがどの程度理解されたのかが分らなかったですし、小テストが資料を見れば授業を受けなくても点数が取れるものになっていたのでは授業をしている価値がないのではないかと思います。演習時間が短いという指摘も、受講生の状況が十分に见えていないものがあるかと思います。従いまして、来年度は対面での授業としていきたいと思ひます。

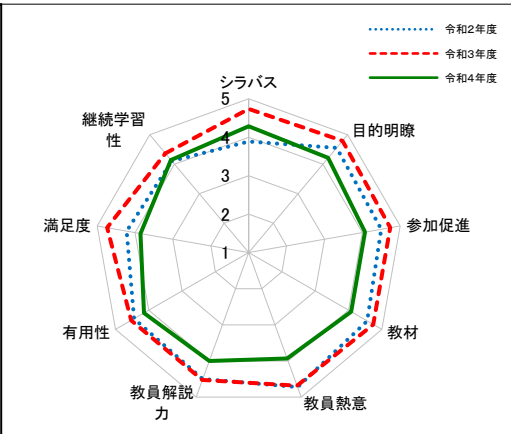
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：プロジェクト管理特論2

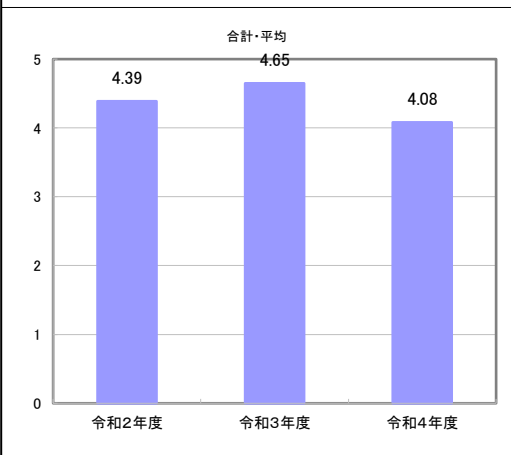
氏名：上條 英樹

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

設問の満足度と教員の熱意の2項目が3点台と低い点数であり重要であると考えます。この項目の回答には、「あまり思わない」に2点をつけている方が2名いるのでそれが大きな要因であると考えられます。講義の内容や解説が、この方々へ響かない内容であったと推測されます。実際、今回の講義のテーマは、エンタープライズアジャイルに関するフレームワークを中心に広い範囲となっており、前提知識を満たしていても実際に、この内容の業務に従事していないと聞きなれない用語や概念が多く盛り込まれたものになっています。逆に、それを新たな知識として習得してもらい演習で理解を深めてもらうことが狙いの講義ではあるのに響かなかった方への講義内容を届けるかが改善ポイントになると考えます。一方、良い評価のコメントに「資料が非常に作りこまれていたので、後から復習する際にポイントがわかりやすかったです」とあり、かなり工夫して資料も準備して狙い通り伝わった方がいることにも考慮しつつ、伝わらなかった方へどう改善していくかが重要な課題として対策していきたいと考えます。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

教員の参加促進、教員の熱意、満足度の評価の改善策として、各講義のレポートのフィードバックを、最終回にまとめて実施する形式から録画回の分も含め次回のZOOM講義の冒頭で実施し、その際に発表してもらうなどコミュニケーションの手段として活用する方法に変更します。さらに、ガイダンス時の前提知識に関する再確認も併せて実施することで満足度に対する対策にしたいと考えます。環境面の指摘にあったZOOMのブレイクアウトセッション機能のメンバーの事前登録が毎回、うまくいかずに手作業で登録していたのでその点に関しては事務局からの支援をお願いしたく宜しくお願いします。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

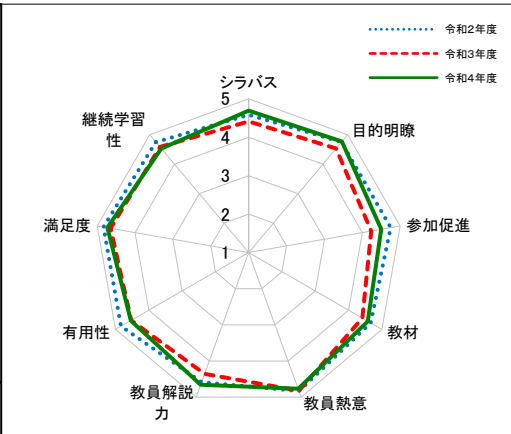
講義名：情報ビジネス特別講義2

氏名：小酒井 正和

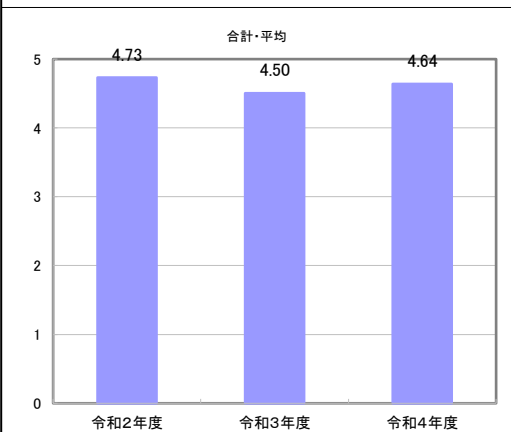
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

本年度より、明確に教科書指定したところが昨年との大きな違いとなる。これにより、シラバスに関する評価や目的明確に関わる評価が向上したと考えられる。コメントからも各回で何を学ぶかについて分かりやすいといった良好なコメントを得られた。また、受講者からの意見としても、概ね、教科内の難易度については適切なレベルを保てたと考えられる。たとえば、理解度については前年度より向上した。

全体的に、オンライン授業での受講生がほとんどを占めていた。このような講義する側としては、どうしてもオンライン授業をメインのようになってしまっているところではあるが、学修者による評価やコメントの結果を見ても、オンラインのほうが受講しやすいという傾向にあり、オンライン授業によってコミュニケーションにおいては、なんとか一定以上のレベルはクリアできていると考えられる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

今年度の評価やコメントを総合的にみて、教科書のレベルとしても受講者層にとって適切なレベルでありそうなので、来年度も継続して同じ教科書を用いた授業とする予定である。学術上、毎年新しい要素が増えてくることもあるので、それは今年度同様に、スライド資料でカバーをする予定でアル。受講者のコメントから、若干演習の作業指示が良くなかったところもあるので、ここについては課題の内容やスライド資料の改訂を進めることで修正していきたい。

■ 第3クォータ アクションプラン ■

4 創造技術コース科目

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

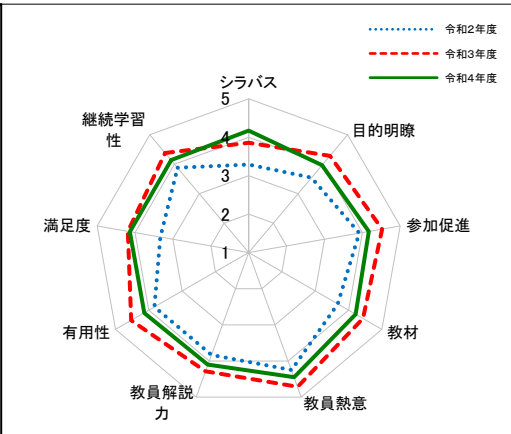
講義名：人間中心デザイン特論

氏名：伊藤 潤

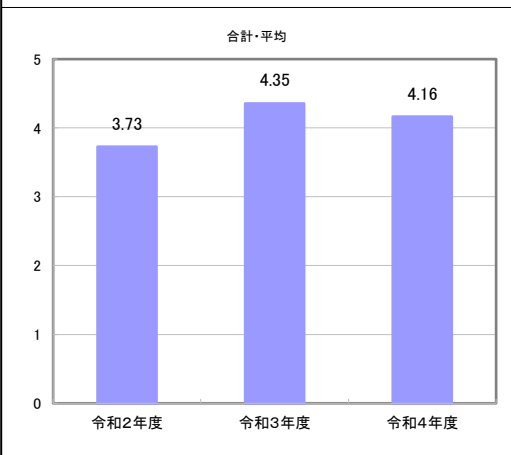
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

講義で伝えた手法を実践的に体得できるよう2つのコンペへのエントリーをミニPBLとして課している。「一般の募集コンテストへの応募でPBLを実施いただく形式は良かった。」「2回のPBLがあり、実コンペに取り組むことは今まで無かった経験であり、非常に勉強になりました。」「ミニPBLは他のコースの参加者の方と知り合ったり、協働したりする機会があり、かつ本番のPBLの練習になるのでとても良いと思う。」といった評価であり、好評である。一方で、「講義内PBL2回と課題が平行する点は講義外でのタスク量が多く一杯一杯になり、何をしているかわからなくなっている時があった。どちらか一方にするなどもう少し工夫をしてほしいと思った。」「2カ月で別のチームでプロジェクトを進行させるというのははっきり言って無茶で、いけないデスマーチを強いられた記憶だけしかない。」といった意見があるが、学生側の大学設置基準における単位と時間外学習の時間数に対する理解が不足している。初回の授業でその説明はしているが、この点は入学時あるいは学生募集時に教務から入念に学生に周知させてもらいたい。

また授業に関連するテーマに関する理解を深めるためにオンラインでアクセスできる記事を読むことを宿題で課しているが、「宿題で出る課題の記事のピックアップがどれもとても面白かったし、勉強になった。」とあり、意図通り機能していると考えられる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

本来履修照明プログラムとして大量の時間を要する内容を網羅するため、基本的に時間が足りないが、「全てがバランスよく構成されていて素晴らしかった。毎回時間切れになってしまうので、後半の講義開始時間を気にせず受けられる7限に設定してほしい。もう1Q分聞きたい。」という意見があり、確かに7限もしくは土曜5限などの学生同士でのミーティングが延長可能な時間帯に開講するのが良いかもしれない。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

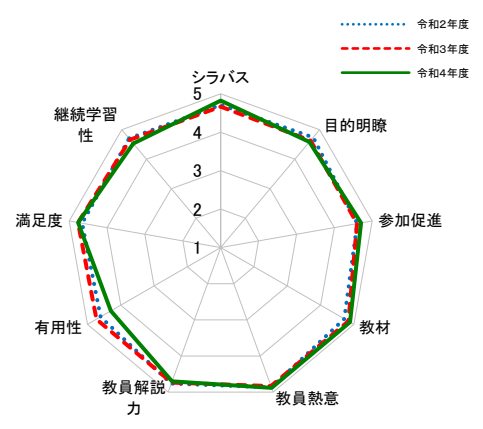
講義名：コミュニケーションデザイン特論

氏名：高嶋 晋治/河西 大介

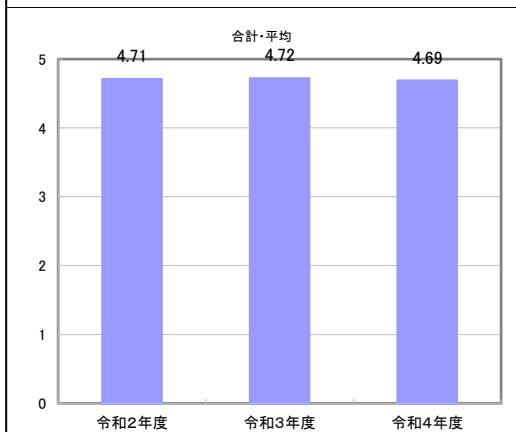
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

- ・課題総評の明確な基準がない。
 - ・対面、ハイブリッド、オンデマンドの掲示が曖昧。
 - ・対面でなくても成立する授業があった。
- 以上については改善策を2023年度に反映する。

- ・レポート字数1000字は多い。→言語化を重要視し継続。
 - ・チーム作業を増やして欲しい。→限られた時間内での手法を検討。
 - ・グループワークはリモートでもできるのでは。→個々の事情でリモートとならざるを得ない場合は教員との事前協議で認めているが、基本は対面で5感を活用したコミュニケーションを学んでもらうため継続。
 - ・演習課題は中間発表があるといい。→限られた時間内での手法を検討。
- 以上については、上記のように基本の進め方を継続の中で検討する。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

- ・課題総評の明確な基準がない。
→「答えは1つでない」というデザイン評価に則りながらも、「適正な情報量」「情報のグルーピング」「レイアウトのバランス」(強弱、大小、疎密など)「カラーマネジメント」(同系色、補色、ネガポジなど)と大まかな観点を明確にする。
- ・対面、ハイブリッド、オンデマンドの掲示が曖昧。
→シラバスに掲示はしているが、事業終了時に次回の授業形式について再度通知する。
- ・対面でなくても成立する授業があった。
対面の明確な理由がない限り、「リモートを基本」とし、就労受講生の受講し易さを考慮する。1授業を対面→ハイブリッドに変更。

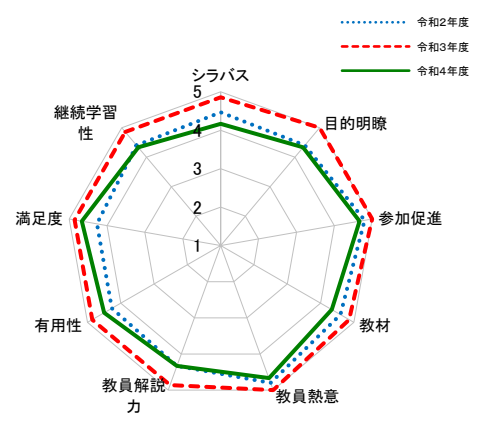
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：工業デザイン材料特論

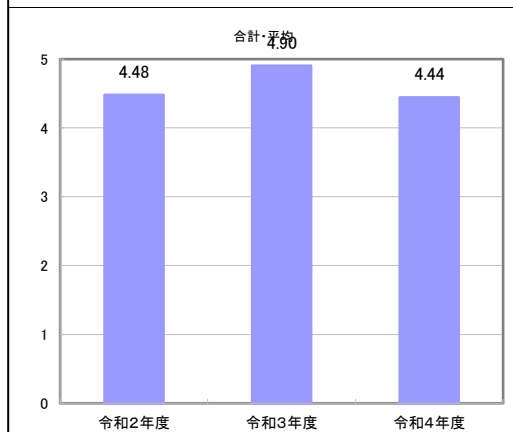
氏名：内山 純

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

平均として4.44となり昨年度の4.90に比較して0.5低下したが、目標である4以上は維持できた。評価が高かった昨年度と授業内容に大きな変更をしていないが、シラバス、目的明確、教材について0.5程度低下しており、満足度については0.2程度の低下にとどまった。
「たくさんプレゼンができたのが良かった」「他の学生の発表を聞くことで理解が深まった」など発表による学習効果についてのコメントがあった。また、専門分野の学生から「元々材料の分野は自分のテリトリーですが、意外なものの製法や、サンプル材料などが見られたのは面白かった」とのコメントがあった。コロナ対応について、「感染対策が少しやり過ぎ」「こればかりは仕方がない」などのコメントがあった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

平均評価が低下した理由として、コロナ対策で、授業開催について、対面を必須とせずハイブリッド対応としたこと、昨年度から授業システムの変更がありシステムトラブルで授業開始がスムーズでなかったことも要因と感じている。授業システムの操作性、安定性の改善に期待したい。
また、「感染対策が少しやり過ぎ」とのコメントもあったが、今後も安全を優先して大学方針に合わせ臨機応変に対応していく。
その他、発表による学習効果や、材料が専門の学生からも評価を受けていることもあり、授業形態や、授業レベルは継続、維持していきたい。

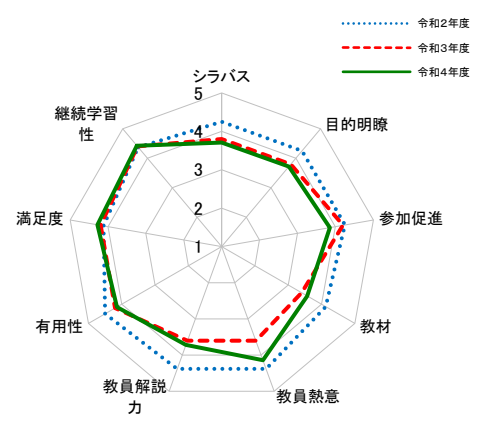
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：プロダクトデザイン特別演習

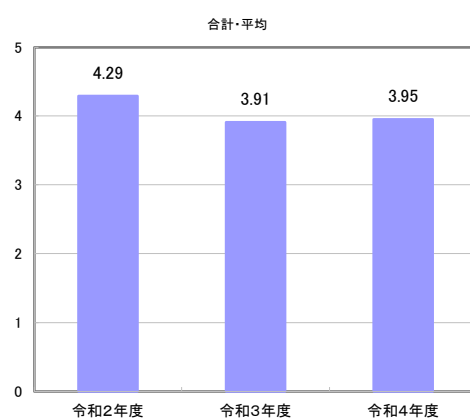
氏名：伊藤 潤/村田 桂太

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

そもそもの回答数が7と少ないため、サイレントマジョリティの評価は不明である。
回答した学生から以下のような不満が寄せられている。
「デザインには先生のツボがあるような気がしました。(特に伊藤先生)」
「何が良くて、何が悪いのかの判断基準が、どうしても先生基準になりがちなので、「良いデザインとはなんぞや」を多角的、客観的に評価できる視標があれば、先生のダメ出しを受けても、何がダメなのか納得ゆくと思いました。」
「伊藤先生のパートについて:「曖昧な感じ」「俺のフィーリング」要素が強く授業としてはわかりにくい。指導のときに「それは微妙です」という発言が多いが伊藤先生と個人的に知り合いではないので「何がどのように微妙なのか?」伝わらない。」
言わんとすることはわからないでもないが、価値を創造する以前の万人向けの「当たり前品質」のことをここでは「デザイン」とは呼んでいない。「微妙」と評するものは「微妙」としか言いようがなく、端的に言えば「良くない」ものである。どう「悪い」かを指摘することは可能だが、どう「良くない」かを指摘するのは難しい。そこは各自で考える必要があり、創造には「確実な答え」が存在する」という考えから脱却することが求められるということをもう少し講義で伝える必要があったのかもしれない、と思う。
多数にとっては「そこまで良いと思えないもの」が一部の人間のツボを押すことはあり得るが、「良いもの」は基本的には多くの評価者から一定以上の評価を得るものである。そうではないものは「悪いもの」ではないが「足りないもの」であるただし市場の評価はさらに厳しいことも記しておく。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

「個人課題でもチーム分けをするやり方は他の授業ではなかったが、やりやすくお互いに切磋琢磨できて勉強になった。講義以外に他の学生から学ぶことも多かった。雰囲気作りが必要になるが、そういう点は他の授業でも取り入れて欲しい。」という意見があったように、コンセプトを練る段階で、ある程度の集合知を用いるのは有益だと考える。
何が悪いかわからない、という意見が多いが、PBLのように各自の自己評価と他己評価をさせることで客観視ができるのかもしれない。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：ET(Embedded Technology)特別演習

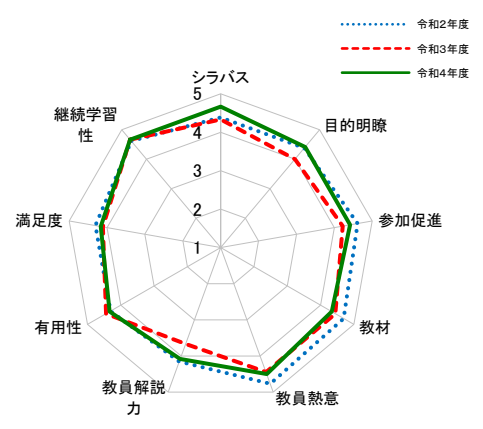
氏名：村越 英樹

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

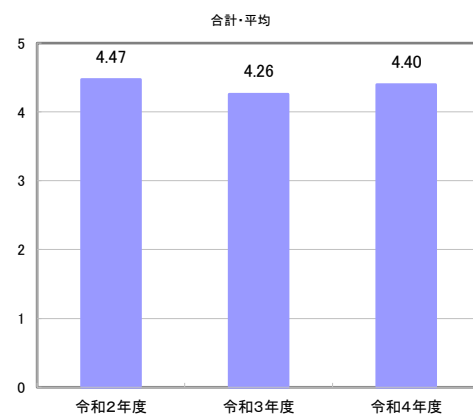
評価項目の平均値(Q.4～Q.12)は 4.40であり、前年度の 4.26 よりは上がっている。最も良い評価はQ.4(シラバス)、Q.12(継続学習性) 4.67、最も悪い評価はQ.9(教員解説力)の 4.08 である。

自由記述回答では、「物理的な現象を、プログラミングで制御できることが実体験できる貴重な授業だと思って参加したが、その通りだった。理論と実践を同時並行している授業だと思う」、「リモート授業とは言え、組込部品を貸し出して実際に操作できる点は非常に役立つと思っています」などの良い意見がある一方、「様々なバックグラウンドの学生がいるので、課題に取り組むために必要なPCの環境設定について資料があると、あまり慣れていない学生には分かりやすいと思った」、「授業の動画は、教室の様子よりも、回路やシステムの動作をみたいので、先生のカメラの方を録画に入れるともっと分かりやすいと思います」など、改善を要望するご意見も頂いている。

昨年度 37.5%と悪かった回収率が、本年度は 80.0%と改善された。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

新型コロナウイルスの影響で、オンラインでの実施となった。昨年度はCPUボード等電子部品の大学での受け渡しに課題があったが、今年度は電子部品をまとめて貸与するようにしたので、どうやらこの課題はクリアしたようだ。来年度は土曜日の開講となるため、対面授業とする予定である。電子部品の故障による交換やブレッドボード上の配線が映像では分かりづらいという課題は解消すると思うが、遠隔による利便性が損なわれる。どちらが良いか、来年度の状況を見て判断したい。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：AIデザイン特論

氏名：林 久志

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

○全体的にグループワークが好評であった：

「講義内容自体が興味深いもので、かつグループワークなどで議論の機会があり、理解を深めることができました。」

「実際にnetlogoをグループで組む回、グループワーク2の遺伝的アルゴリズムについてが考える回特に面白かったです。」

「グループワークによる理解が深まった。生徒間における授業の理解は概ね同じであることが実感でき、その中で議論や意見交換することでさらに理解が深まることを実感することができた。グループワークは2回設定されており、ボリュームも回数も適切であると感じました。」

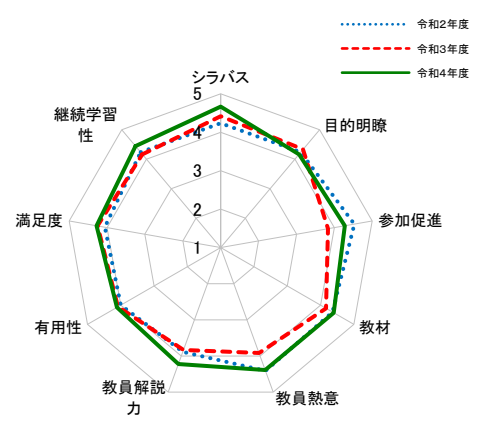
「討議や発表は理解の促進につながると感じた。」

○活用事例の紹介を求める意見がある。

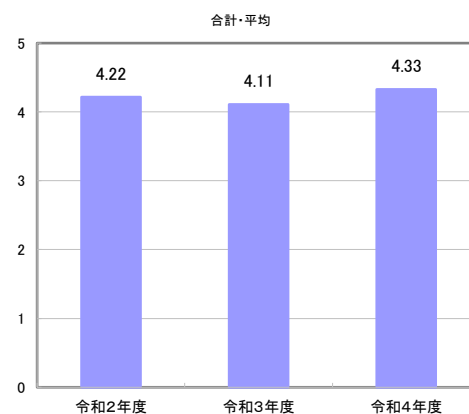
「林先生のこれまでの経験・実際の活用事例などのお話があったらさらに良いです。」

「社会実装された事例を紹介する回が、1回ぐらいあっても良かったと思います。」

「GAの活用例など紹介していただけると有益であろうと思う。」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

グループワークによるマルチエージェントシミュレーションやGAのモデリング演習は好評なので、継続していく。

マルチエージェントシミュレーションやGAの実際の活用事例の紹介を検討する。

■ 第4クォータ アクションプラン ■

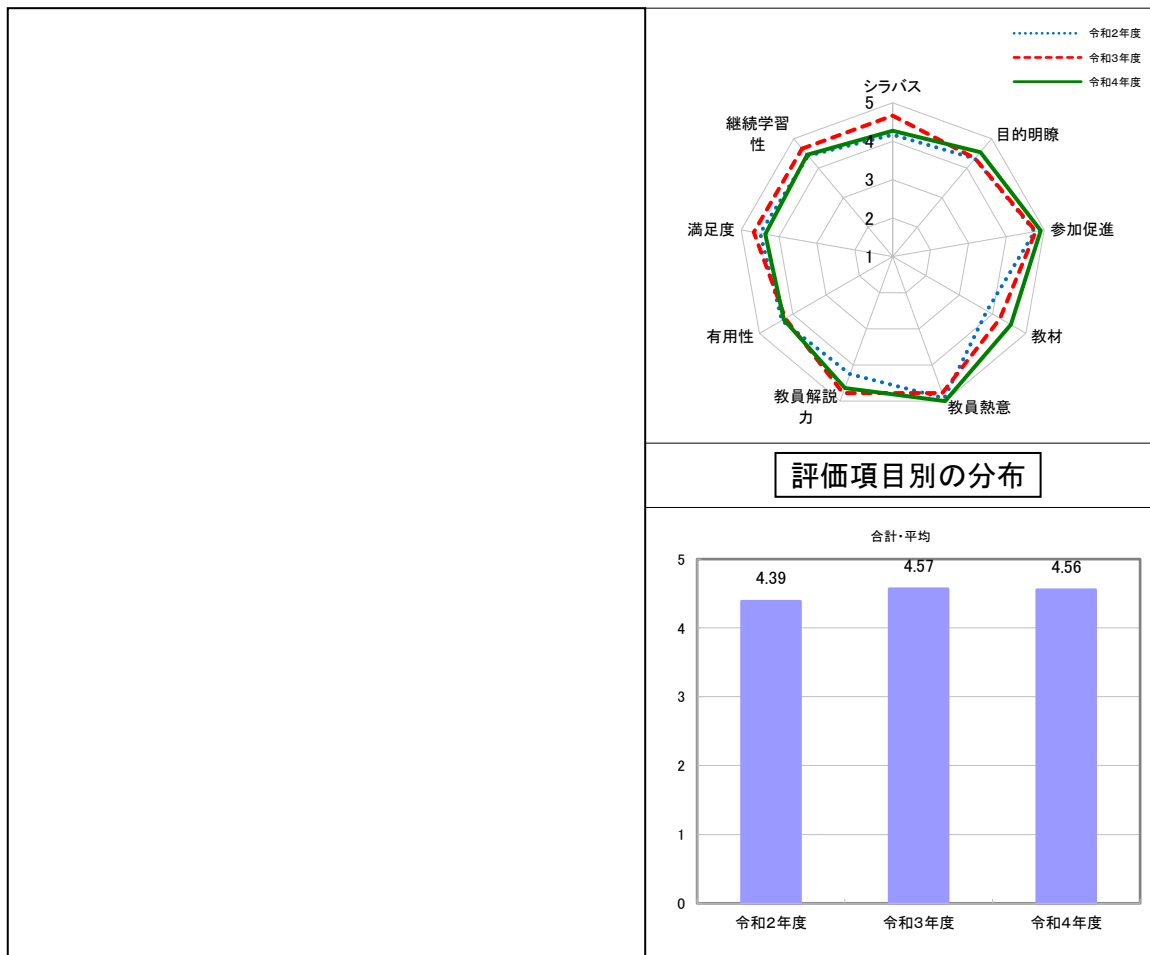
1 各コース共通科目

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：国際経営特論

氏名：前田 充浩

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

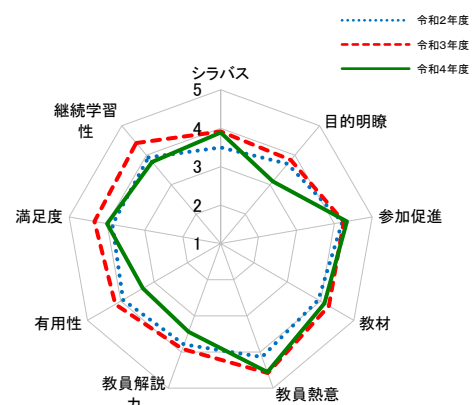
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名 : DESIGN [RE] THINKING

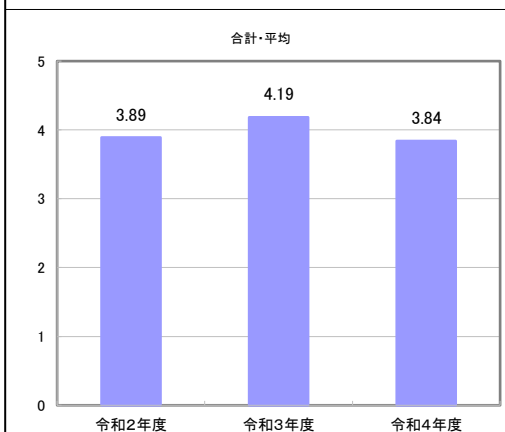
氏 名 : 松井 実

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

学生間で提出物をGoogle Slides経由で共有する方式は前年度同様評価されていた。同時に、講義の時間が長く、提出物について議論する時間がなかなか取れなかった点に関しては、学生間で双方向にコメントしあいたいという意見が多かった。答えのない課題設定も難しいが頭を使うので非常によいという意見もあれば、あまりに難しく何の役に立つのかわからないという意見もみられた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

来年度のシラバスは今年度とほぼ同様の内容としているが、来年度は(初回授業に参加した学生の同意のもとで)座学要素を減らし、デザイン思考を批判的に見直しつつ、その考え方を前年度のPBLの成果発表会の内容に実践的に適用することを計画している。

■ 第4クォータ アクションプラン ■

2 事業設計工学コース科目

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

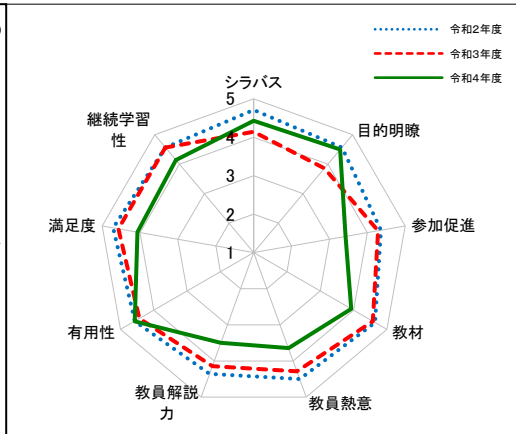
講義名：マネジメントシステム応用特論

氏名：板倉 宏昭

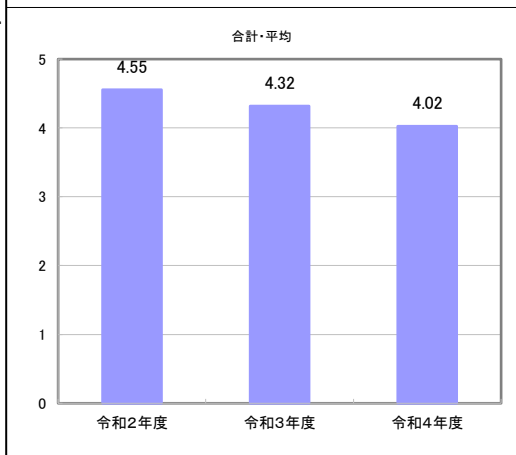
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

第1に、基本書にそった教科書を用いることが有効であり、内容的にも評価されている。例えば、「教科書に準拠した授業によって、経営学に関する体系的な理解が進みました。」や「改めて学ぶべき必須科目であると再認識しています。しかも、経営学原論に留まらず、地域創世から論文の書き方まで幅広い分野をカバーされたこと、大変興味深く学ばせていただきました。また課題提出時に、毎回毎回ご丁寧なコメントフィードバックを頂戴し、深く感謝しております。また基本テキストに沿った進捗で復習などしやすく、ありがたかったです。」

第2に、グループワークは、理解を深めるにも有効である。
「多岐にわたったテーマであったので、チーム内でのグループ議論がとても勉強になりました。」「学生同士のコミュニケーションを取ってチームで課題を提出する構造になっていることがとても良かった。」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

「マネジメントシステム基礎特論と合わせて受講したことにより、経営学の全体像を把握することができました。」という指摘にあるように、教員が執筆した経営学の基本書にそって、授業を進めることが有効である。問題集やケースも含んだ基本書が予習や復習がしやすく体系的理解に役立つと考えている。

今後は、情報技術の最新動向やケースの内容を最新のものにしていくことが必要だと感じており、補足資料や基本書の改訂をしていきたい。

グループ課題、個人課題、テストと、他授業に比して課題が多い。それが体系的理解に有効という意見と少し多いという指摘があるので、課題量を減らすかどうかを検討したい。

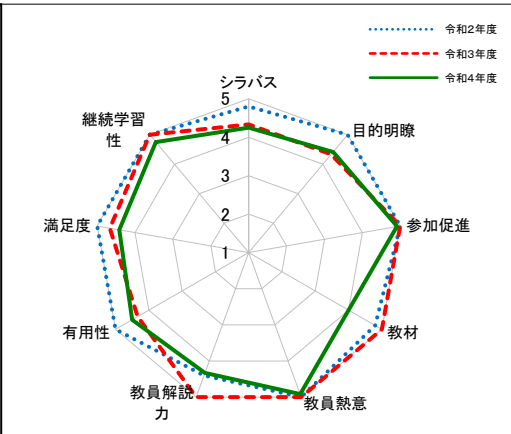
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：地域経済分析特別演習

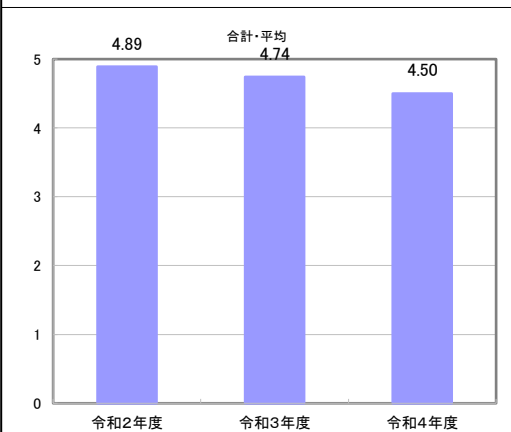
氏名：三好 祐輔

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

- ・実践的な内容だったので将来役に立ちそう。
- ・積極的に生徒とコミュニケーションを双方に取られようと先生が授業をファシリテーションした点、生徒が深く知りたいという掘り下げに真摯に先生が対応した点。
- ・学生に対して高い視座と熱意を示したこと、単位を取るためという視点ではなく、自ら問題意識を持って研究に取り組む姿勢の大切さを殆ど全ての講義で言及し、より高い視座をもって学習に取り組むことの重要性を訴える一方、学生の学習意欲を引き上げることに心を砕いた姿勢。
- ・実際の操作などを学生に行わせて理解度を図っていたところ。
- ・遠隔会議ツールを用いた授業形式も定着してきたので、遠隔での授業は継続して欲しい。
- ・遠隔になったことで、実際に講義に出ていても場所にいるだけでやった感があるが、離れて講義を行うことで冷静に何が分かっているかわかっていないかを講義中に考えられたこと。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

- ・アプリケーションを利用しているので、アプリケーションを使用するユーザーID と先生の講義用の ID を分けて画面を使い分けるか、画面のキャプチャー(画面を映し出すプログラム)で配信をすると、先生は説明がしやすいという指摘を受け止めたいと思います。
- ・これからも質問に対してしっかり時間をかけて説明してゆこうと思います。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：技術経営戦略特論

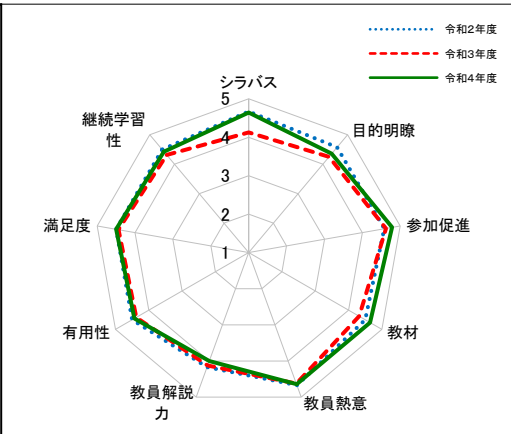
氏名：吉田 敏

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

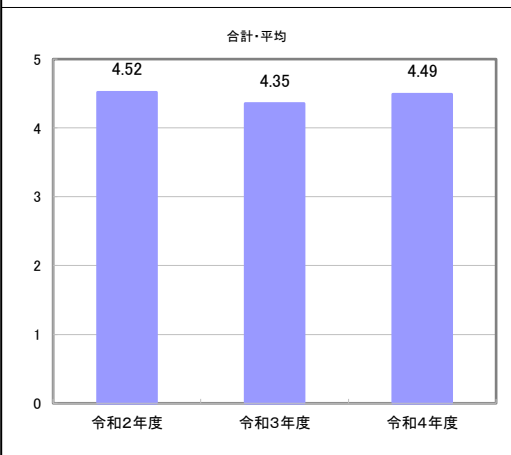
教員の解説力の評価が下がっている。この点について、真摯に受け止め、研究領域を中心とした講義のバックグラウンドにあたる知見の充実を目指すことが必要であると認識した。次回講義までに、研究の推進と論文等による考え方の集約を進めていきたい。

教材については評価が上がったが、本年度の見直しが良い方向に向かわせたと考えることが出来そうである。事例を含め、研究活動から得られた情報を解りやすくまとめていくこと、研究によって構築した考え方を解りやすく解説することを、積極的に進めていきたい。

シラバスについても評価が上がったが、できるだけ具体的な内容が明確に伝わるようにシラバスをまとめることによって、良い方向となっている可能性が考えられる。ただし、講義の1年以上前にまとめる必要があるシラバスという位置づけからは、どうしても講義時に変更していく必要性が生じる可能性は否定できない。特に、本講義領域では、1年間の間に様々な変化が起こることから、そのような変更は前向きにとらえることも重要であり、引き続きよく検討していきたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

改善すべき評価としては、レポートのフィードバックを求める内容が複数見受けられた。講義の中では、個人的に質問やフィードバックのために連絡をもらいたい旨は伝えていたつもりであるが、伝え方や気軽さに配慮が不十分であったと考えられる。フィードバックについては、できるだけ、1対1の対話での指摘やアドバイスの伝達が重要と考えていたが、検討が必要であると思われる。現在の考え方の必要な面は保ちながら、次回の講義移行、十分な検討を行うものとする。

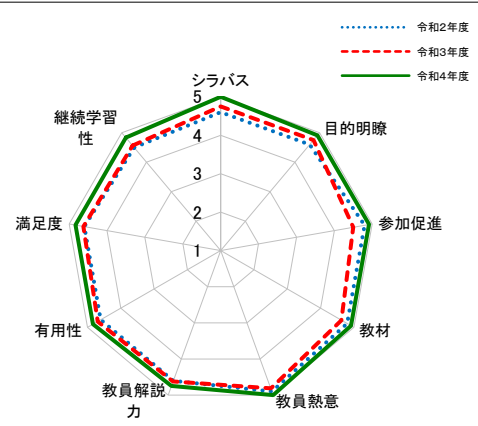
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：イノベーターサービス技術特論

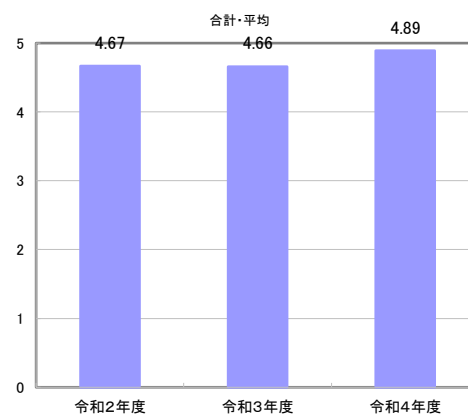
氏名：細田 貴明

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

- ・全体として一定の評価を得ることができた。
- ・フィードバックの重要性についての指摘を受けた。
- ・ディスカッションの事前準備の重要性について指摘を受けた。
- ・グループ演習における教員のコメントと演習に対するフィードバックの重要性に関する指摘があった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

- ・全体として、一定の評価を受けたことから講義方針として継続することに問題がないと判断する。
- ・受講生のコメントに関するフィードバックについては、皆の考えたこと感じたことに対して返答することは学習効果の向上に重要なことであると考えていることから継続していきたい。
- ・ディスカッションの事前準備として、課題を全員に一度提出してもらうやり方は、受講生にとって短時間で対応してもらうこととなる負担はありものの、一定の知識レベルで学習効果の高い演習を行う上では必要なことと判断している。受講生の評価も高いことから継続していきたい。
- ・講師からの様々なフィードバックについては、可能な限り実施するように心掛けているが、すべての活動に関するコメントやレポートへの返答を行えたわけでない。ないので、フィードバックの方法について今後検討したい。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：事業継続戦略特論

氏名：松尾 徳朗

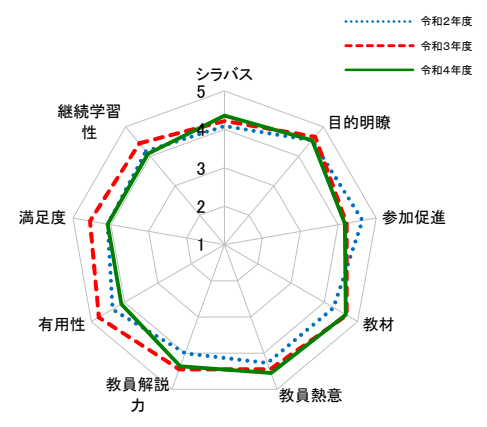
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

…ポジティブな意見…

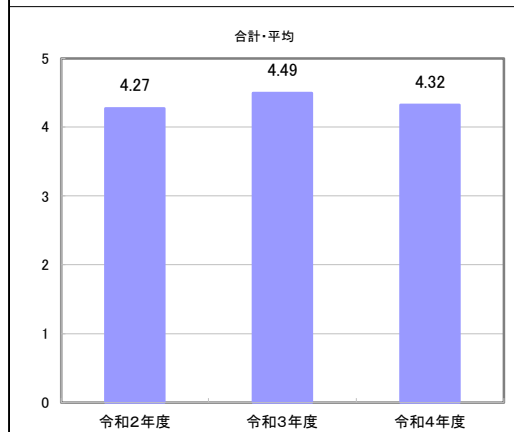
- 事業継続の具体的なシミュレーションを考えることができたのでとても実践的であった。
- 一部録画ビデオ視聴を取り入れた新しい方法でよいと思います。
- グループ討議の発表結果に対し、お互いにコメントや質問を出し合う点。
- 全体の講義内容のボリュームは大きかったが、効率よく学習できるよう工夫がされていたと感じる。

…ネガティブな意見…

- 講義全体の授業マッピングがあると、実際の授業と動画配信講義の関係がより理解できてよいと思った。
- ディスカッションや manaba で話を聞いていなかったり、否定的な意見を強めに発信したりする方がいると、やり取りが億劫になる。
- 単位が少なくともよいので、ペースをもう少しゆっくりにしていきたいです。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

各グループの発表内容について、教員からのコメントが少ない意見があったため、受講生同士で質疑応答のみならず、適宜適切な助言ができるように工夫を継続する。また、授業で使用するテンプレートについて、学生がそのまま使用できるフォーマットのものを提供できるようにワークシートの改良に取り組む。

■ 第4クォータ アクションプラン ■

3 情報アーキテクチャコース科目

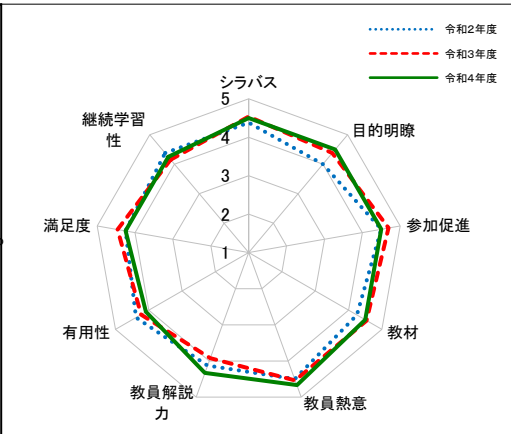
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：セキュアシステム管理運用特論

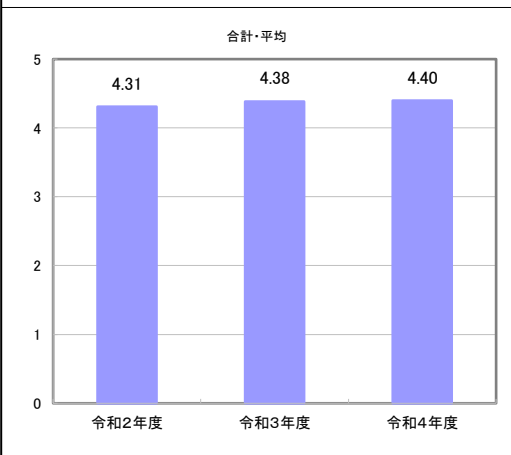
氏名：真鍋 敬士

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

前年度のアンケートを受けて、本年度は講義全体や演習の構成に関する解説を丁寧に行うようにした。僅かな改善ではあるが、アンケートのQ5, Q8, Q9に影響しているものと解釈できる。また、グループワークにおける履修生のバックグラウンドの違いへの配慮や評価の透明性については、貢献点の導入といったいくつかの試行ではまだまだ不十分であったことがQ6や記述回答からうかがえる。前年度までは完全遠隔講義であったため、講義中に受講者の視点を確認することができた。本年度は教室のPCで完結する前提で講義を行ってしまい、遠隔からの視点を確認することがほとんどなかった。記述回答では教室の設備の使い方に関する指摘が複数あり、講義中のチャットや講義後に提出される出席票でも同様の指摘を都度受けていた。期中に複数の機会を与えられていたにもかかわらず、改善に結びつけられなかった点については重く受け止めたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

前年度掲げたアクションプランを一通り実施できたことで講義の内容や編成の整理にもつながっており、今後も継続的に取り組む。特にグループワークに関する課題はまだ手応えを得るレベルには至っておらず、引き続き改善が必要である。そのためには出席票を工夫する等して、各人とのインタラクションをもう少し増やせるような試みを検討したい。

本年度は期が始まる前に教室設備の使い方の説明を受けることができた。今後も同様の機会を活用することで設備に慣れるまでの時間を短縮する。また、遠隔からの受講者の割合が多い場合は教室からの操作は主に遠隔用のPCで行い、遠隔受講の視点をカバーできるようにしたい。

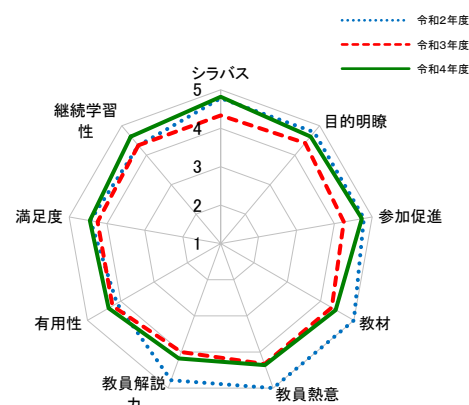
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名 : IoT開発特論

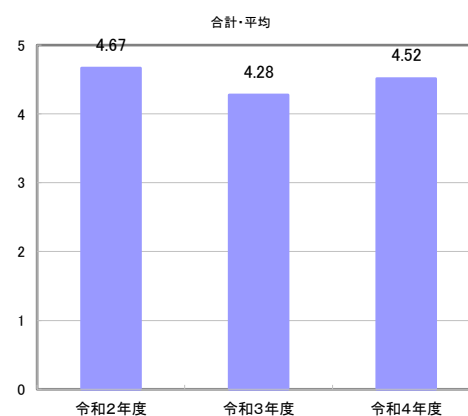
氏 名 : 飛田 博章

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

全ての項目で昨年度よりも評価が高かった。項目別に見ていくと、シラバス(4.82)と参加促進(4.73)に関する項目で高い評価を得ることができた。一方で、教員の熱意(4.18)に関する項目が若干低かった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

内容が初心者にとって難しいとのコメントがあり、次年度以降は補修などを行いながら理解度を高められる工夫をしていきたい。一方で、中級以上の学生の参加もあり、今後もある程度の難易度は維持していきたいと考えている。

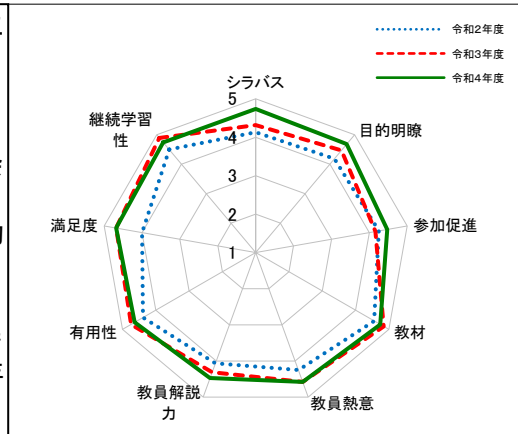
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：ビッグデータ解析特論

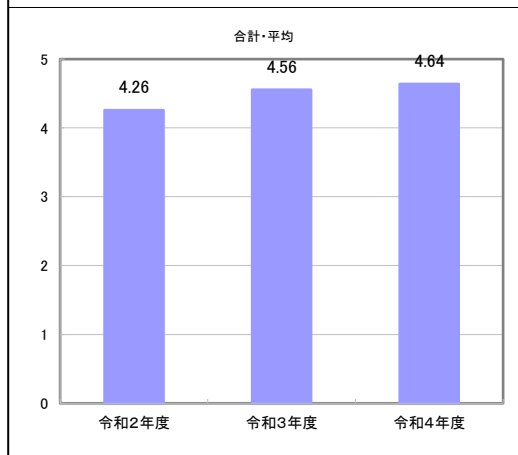
氏名：追川 修一

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

質問に対し迅速に回答することで疑問の解消に努めたこと、資料を早めに公開することで予習の時間を取れるようにしたこと、豊富な演習用のプログラムを提供し、実際に実行し、動作を確認できるようにしていること、また実際のデータを収集し分析対象とする課題に取り組む機会があることが有用であるとの意見があった。評価の平均値4.64よりも高くついた設問はQ4.シラバス 4.74, Q5.目的明確 4.68, Q7.教材 4.74, Q11.満足度 4.68, Q12 継続学習性 4.74であり、有効であると評価されたことが反映されているものと考えられる。設問の中では、Q6.学生の参加促進とQ9.教員解説力が最も低く4.47であったが、昨年度はQ6.学生の参加促進が4.16, Q9.教員解説力が4.43であり、どちらも徐々に改善している。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

平均 4.64 は前年度の 4.56 を上回る結果となった。これまで評価されている、講義と演習を組み合わせた構成、実用性があるサンプルプログラム、自由課題としたレポート課題については、継続して実施する。実際のデータを収集し分析対象とする課題は良い方向に評価されているが、難しいとの評価もある。困っている点について相談する機会の提供について検討する

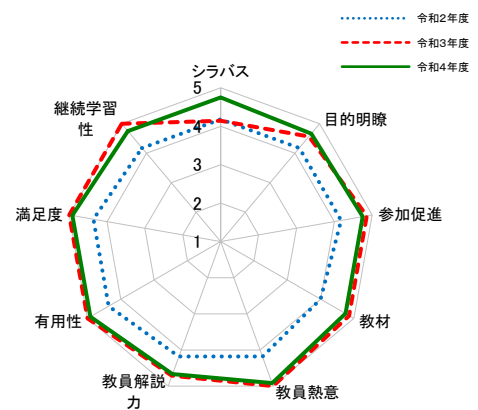
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：情報システム特論2

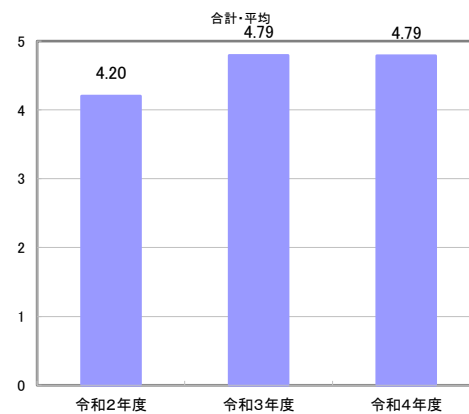
氏名：亀井 省吾

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

項目1-2について、出席率4.92、自己学習量4.67と相対的に高水準であったことから学生の負担の高さが窺われる。一方、項目3-11では、それに関わらず、評価平均が4.67-4.95と大凡及第点評価を頂いたと理解している。当年度学生の多くが学習経験レベル高く、コメントからも負担の高さを意欲に転換しチーム活動を実施する傾向が読み取れる。一方、本講義はハイブリッド型で大半の学生が遠隔受講を選択していた。よって、ケースのイントロダクションを、理論解説含め厚めに実施することで、学生負担を削減しつつケース理解を促すよう心掛けるなど諸施策を講じたが、学生間の横のつながりの深化を期待する声も見受けられ、一層の工夫が必要と感じている。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

以下の改善・発展策の必要性が読み取れた。

- ①学習興味を喚起する今日的トピックを盛り込んだケースの継続投入を進めていきたい。
- ②課題企業のゲスト招聘を可能な限り実現していきたい。
- ③提示する参考文献のブラッシュアップ、絞り込みを行いたい。
- ④チーム討議方法、講師の関わり方について検討していきたい。

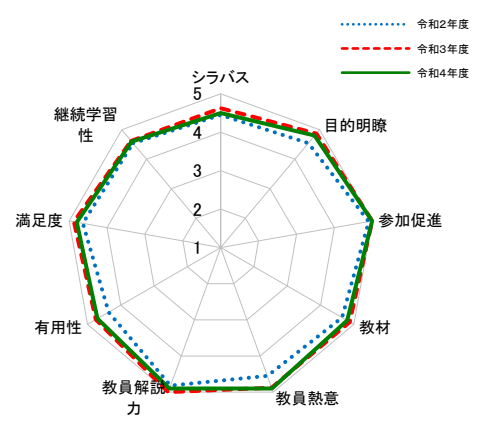
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：情報ビジネス特別講義3

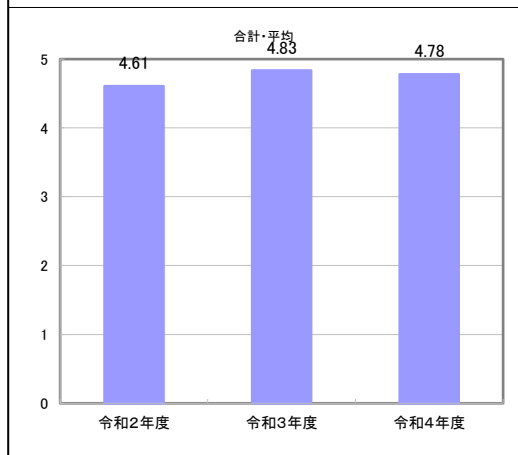
氏名：川名 周

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

今期は、ハイフレックス(=教室参加者もZOOMに入る)形式で実施した。ブレイクアウトルーム及びチャットによるオンタイムでの講義感想や質問を丁寧に拾う等、双方向な講義に努めた結果が評価に繋がり、教育効果をあげることができたのは良かったと思う。また、ZOOM上でケースメソッドを行い「クラス討議」ができたこともグッドポイントであった。一人、もしくは少人数でも教室に受講生がいたことで、私自身、生の感覚で講義の是非がわかったことも、この結果につながったと思っている。最後に行った3チームによる企画競合プレゼンも実施できて良かったと思慮している。＜この2年間は遠隔のみであった為、この要素を他講義コンテンツで代替していたので＞



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

シラバスにおいて、講義形式に関して、録画講義があるといった誤った情報を載せてしまい、学生に対して混乱させてしまったことを改善したい。Manabaにおいて、正しい講義形式を伝達することでことなきを得たが、録画、遠隔そしてハイフレックスの差を完全に理解できていなかったことが原因であった。来期のシラバスでは間違えずに表記ができています。

また、教務より一台タブレットpcを講義時に貸与いただいたことで、自己のpcで画面共有し、貸与タブレットで、受講生側の顔を見ることができた講義運営ができ感謝している。このようなバックアップを来期もお願いしたい。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

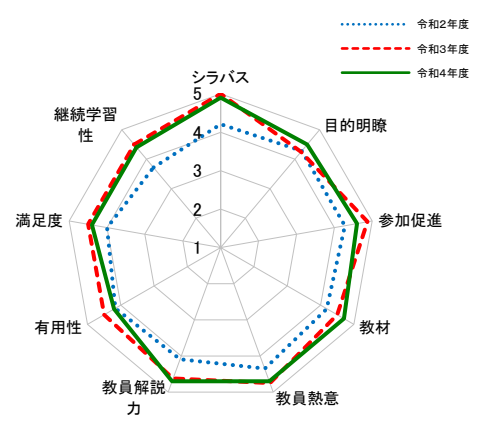
講義名：情報セキュリティ特別講義2

氏名：奥原 雅之

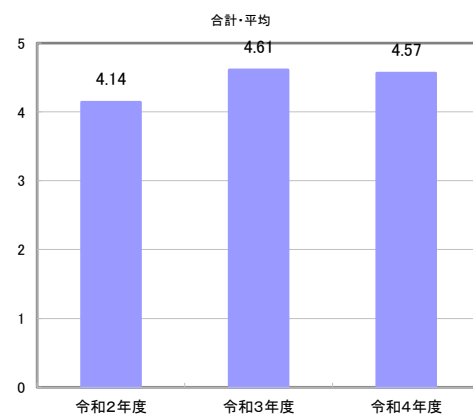
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

・Q9「学習した知識やスキルは、あなたの実務や将来の仕事に役立つと思えましたか」について、10%が「どちらともいえない」、残り90%が「そう思う」という回答だった。本講義のテーマはISO/IEC 15408に基づいたセキュリティ仕様書(Security Target)の作成であり、一般的なSEが実際に作成する機会が多いものではないが、演習を通して得られた知識や概念が、ソフトウェアエンジニアリング全体に有用であると評価されたのではないかと推測している。

・Q13「この授業は遠隔授業に適していると考えますか？」について、「適してない」という回答は0だった。本来、本講義はグループ演習を中心としており、演習の設計としては対面討議を想定したものだったが、リモート会議や各種情報共有サービスが発達した今日では、学生がリモートによるグループ演習を障害なく実施できる状況であったことが明らかになった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

・各講義回の冒頭に、その時々セキュリティ関連トピック(セキュリティ事故に関するものが多かった)に触れた取り組みは、自由回答から好評だったことが伺える。都合のよいことに(そして不幸なことに)セキュリティ事故に関するトピックが枯渇することは当分なさそうなので、この取り組みは継続して続けたい。

・現在の演習形式については、現段階ではポジティブな評価が多いが、最終日のプレゼンコンペティション形式の発表を含め、まだ改善の余地があると考えます。実ビジネスに近い環境を体験できるような工夫を今後とも考えていきたい。

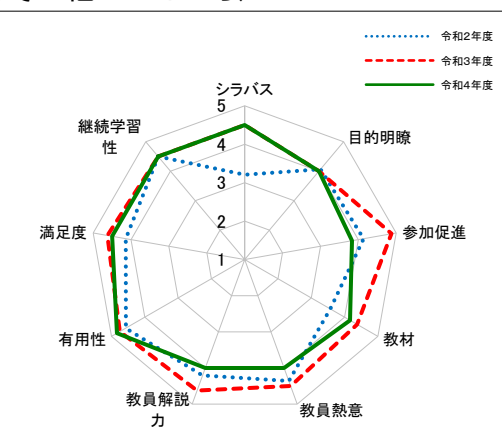
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：コラボレイティブ開発特論

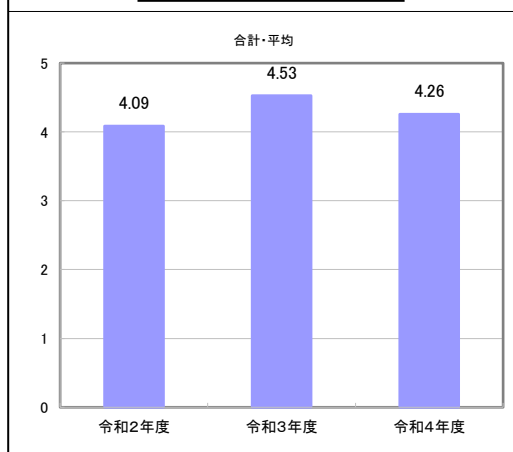
氏名：中鉢 欣秀

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

感染症対策下での制限された状況において、遠隔での授業に積極的に参加し、優れた成果を出した学生の皆さんに感謝申し上げたい。受講者の協力もあり、大変円滑に授業が進められた。受講生の事前知識やモチベーションが多様であるため数値的尺度に基づく定量比較は難しい。ある種の目安として評価結果を受け止め、評価の低いものについては継続的に改善を行い、高いものについてはこれを維持して行きたい。教材については様々な手段で得られた改善提案を受け止め、必要に応じて内容の改訂を行っていく。また、シラバスについては、事前の学習者の期待と実際の授業内容との乖離が生じないように注意しながら必要に応じて修正する。来年度の授業実施に向けて継続的により高い評価が得られるよう務める。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

この授業は遠隔による授業には特段の問題はなかった。遠隔であったためか、課題に対するフィードバックがほしかったといった意見がみられたが、フィードバックの時間は授業内で行っている。質問等があれば積極的に教員に尋ねる能動的な姿勢を望みたい。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

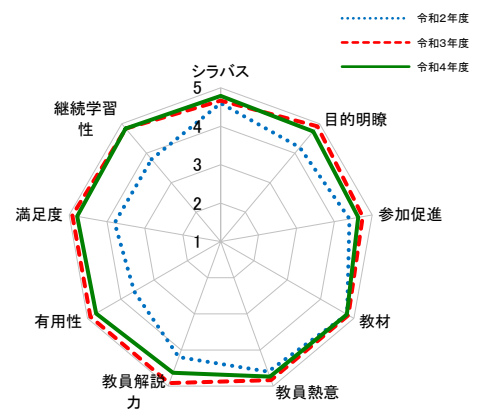
講義名：プロジェクト管理特論3

氏名：三好 きよみ

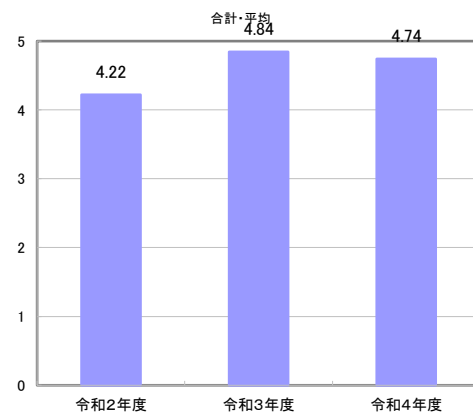
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

良かった点として、以下のようなコメントがあった。

- ・動画での事前予習⇒講義+ディスカッション⇒振り返りのサイクルが良かったと思います。
 - ・他者のプロジェクトマネジメントの経験を聞いたことはよかった。
 - ・最後の発表では、生徒による相互評価でしたので、なかなか面白かったです。
 - ・個別にコメントがあり、指摘が細かかった。
- 改善点として、以下のようなコメントがあった。
- ・動画回の音声の質が多少気になりました。(大きくなったり、小さくなったりなど)



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

講義内容については、履修者の要望をとりいれながら最適化していきたい。

動画視聴+個人課題⇒講義+グループディスカッションの反転学習方式、相互評価については、好評のため継続したい。

悪かった点改善すべき点として、画回の音声が不安定というのがあった、調整して録画・録音するようになりたい。

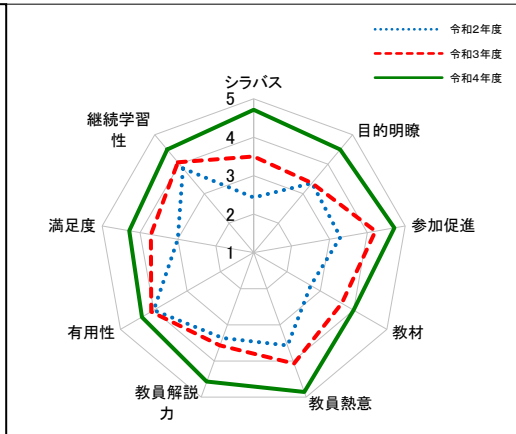
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：情報システム特論I

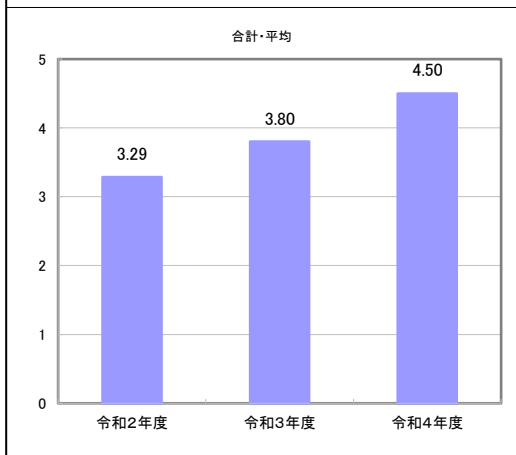
氏名：嶋津 恵子

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

昨年度の“特定の観点に関する評価に関し良悪が極端に分かれている”傾向は減少していたが、それでも授業方法に関し、履修生の良し悪しが分かれるものがあった。具体的には、
毎回の講義の冒頭で予習確認クイズを実施し予習の徹底を図ろうとしたが、「授業前にテキストの内容をあらかじめわかったうえで参加できるので、非常に効率が良い」というものと、「もっと効率的な時間の使いみちがあると感じた。」というものが混在していた。
また、AIITのすべての講義間での一貫性の無さを指摘する意見があったが、このような特定の授業によらない意見の提示先を大学側として用意してはどうかと考えた。具体的な意見は、
「・授業や先生によって使用する遠隔会議ツールが異なるのは不便です。すべての科目で同じものを使用するように標準化していただきたいです。
・遠隔会議ツールにおける自身の名前の表記に関する先生の指示が、「学修番号+フルネーム」とする先生や、「学修番号+姓(ふりがな)」とする先生がいるなど先生によってバラバラなので標準化して欲しいです。」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

昨年度実施した策を継続する。具体的には、
初回の授業のオリエンテーションで、今年度の評価意見をすべて公開し、履修予定者の懸念を事前に発掘するとともに、それを解消する。また、科目履修の希望者に対しては、シラバスから変更する可能性のある箇所を事前に知らせ、受講開始後に期待外れにならないよう工夫する。
各回の授業の実施方法に関しては、教科書や参考資料を読むことを事前に義務付け、その解説を行い、またグループ分けによる議論の場を検討する。
さらに、配布用資料に関し、履修生が総復習に利用できるよう改善する。

■ 第4クォータ アクションプラン ■

4 創造技術コース科目

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：品質工学特論

氏名：越水 重臣

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

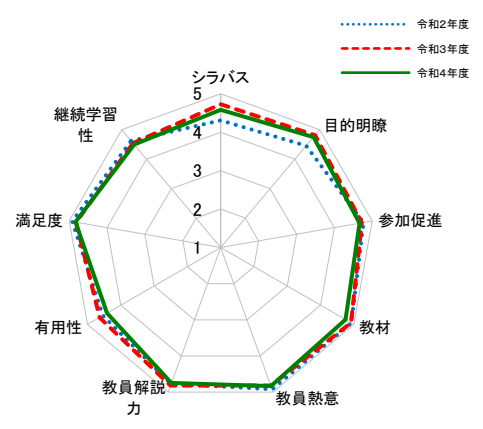
アンケートの評点については、昨年度より少し下がったものの、今年度もまずまずの評価が得られたものと考えている。

自由記述のところでは、以下の貴重な意見を聞くことができた。

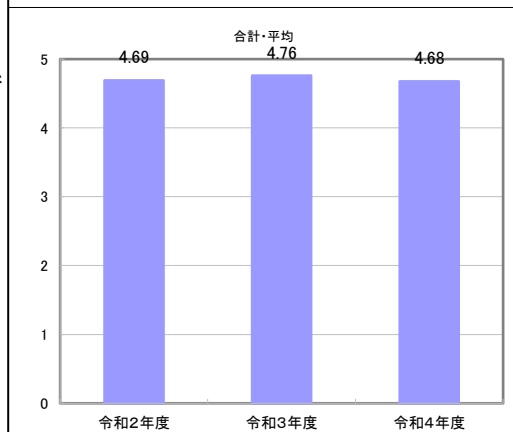
まず、授業の形態について、「リアルタイム(Zoom)授業と録画授業の比率がちょうどよい」との意見があり、今年度のようなハイブリッドの授業スタイルは今後も踏襲していきたいと思う。

次に、教授方法について、「毎回レポートがあり、ディスカッションや発表も取り入れられているため、非常に実践的であった」という意見があった。色々な方法を用いて受講生を刺激しながら、実践的な内容を教えることは重要であり、今後も続けていきたいと思う。

また、受講生から「品質工学の用語が独特で(中略)単語集をつけてもらえると理解の助けになる」という提案があった。用語集については、来年度の初回講義で配布できるよう準備することにした。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

今後の改善点として、まずシラバスが挙げられる。自由記述に「シラバスなどで品質工学・タグチメソッドのすごさをアピールできたらと思いました」という意見があった。シラバスの見直しを進めていきたいと思う。

また、品質工学の用語は独特なので初めて学ぶ方は少なからず混乱がある。先の設問でも書いたが、来年度は初回授業で用語集を配布して改善をしたいと思う。

次に、遠隔授業については、歓迎する意見も多いが、教室での集合形式の授業を希望する学生が毎年いる。例えば、「遠隔でも問題なく講義が受けられるのは大変ありがたいです」という意見がある一方で、「やはり教室に集まって盛んにディスカッションをしながら授業を受けられることがこの大学の醍醐味だと思う」という意見もある。こちらは判断が難しく悩ましい。現状のハイフレックス型授業の形態を進めながら考えていきたい(教室に来て授業参加する受講生の意見を聞いていきたい)。

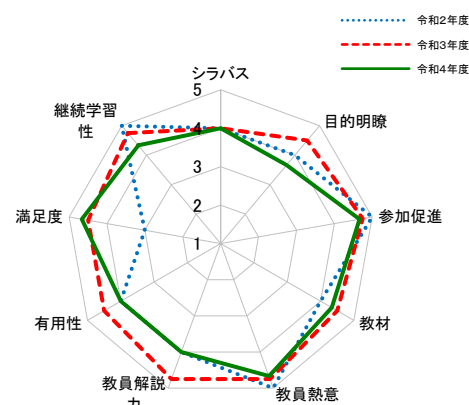
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：チーム設計・試作特別演習

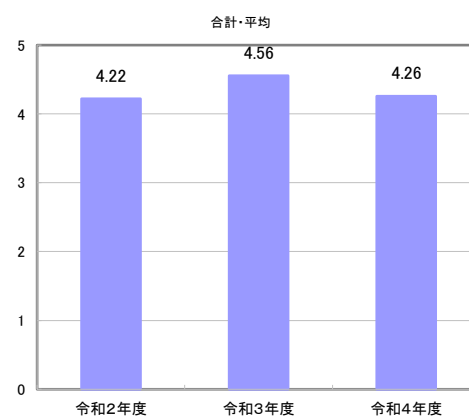
氏名：伊藤 潤

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

「本授業で、自分自身の創造性が増したと思う。」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

今年は4名しか履修者がいなかったのも1チームのみであった。

「プロダクトを製作する上で3Dプリンターは有効な機材であるが、4Q時点ではPBLの製作物の出力対応により使用することができない場合があるのでその対応は必要になるのではないかと考える。」という意見があり、アフターコロナの今後はより3Dプリンタが混むことが想定されるのでとにかく台数を増やしたい。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：価値デザイン特論

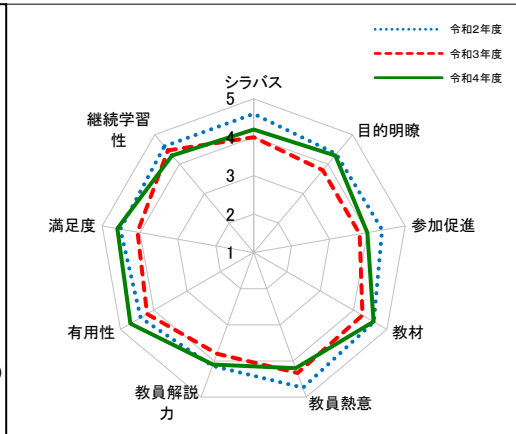
氏名：蓮池 公威

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

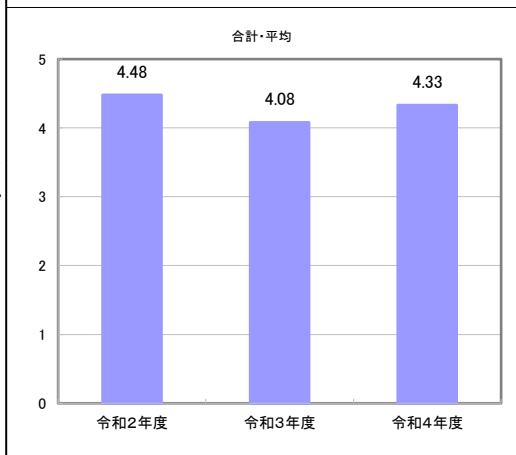
・カリキュラムについては、「非常に有益であり、他の大学院では学べない先進的なもの」、「グループワークでリサーチからUXまでの一連の流れが掴めた」、「フォトダイアリーは自分を客観視できて気づきが多かった。自分を外から見る課題はデザインの講義では必須ではないかと思った」、「体系的に整理され、非常にわかりやすかった」などの評価があり、内容面では、学生にとって価値のある授業を提供できたと考えています。

・グループワークについては、「先生がブレイクアウトルームにたびたび入ってきていたので、不明点などが解消された」、「グループワークが良かった。最終レポートの相互評価も良かった。」、などの高評価がある一方で、「(特に授業時間外でのグループワークで)積極的でないメンバーがいた」、「もう1週ぐらい早く始めても良かった」などの意見があり、所属するグループによって、授業経験に差が出てしまったと考えられます。

・また、「基礎や概念的なことと実践的なことを両方学べるのはいいが、もう少し深いディスカッションができればいいかと思った」、「全体発表がもう一回ぐらいあっても良いかなと思った」など、全体での議論やディスカッションに対して、不足感を感じた学生もいらっしゃいました。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

学生のコメントや提案を受けて、今後は、下記のように進めていきたいと考えます。

- ・カリキュラムについては、本講義の独自性や今回学生に評価いただいた特色を維持更新し、最新の事例の更新も含めて、価値のある内容を引き続き考えていきたいと思います。
- ・グループワークについては、グループによる差を無くすために、グループワークに対する態度の確認や、進め方のガイドを提示して、参加度に差が出ないようにガイドしていきたいと考えます。まとめ方のテンプレートの提供なども工夫していきたいと思います。
- ・グループワークの改善と共に、全体での発表や共有、議論の機会を増やし、全体での学びが進むように、時間配分などを検討していきたいと思います。

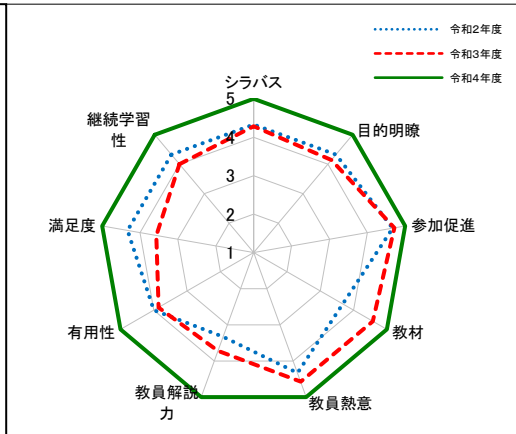
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：システムモデリング特論

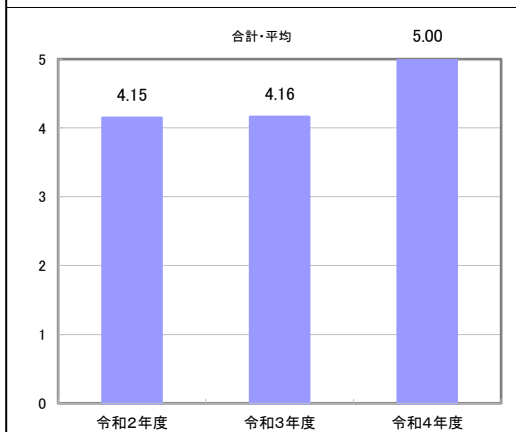
氏名：村越 英樹

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

評価の平均値は、5.00であり、全ての項目が5点満点である。
回収率が低いので、このような結果となったと考える。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

回収率が向上するよう努力します。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：機械学習特論

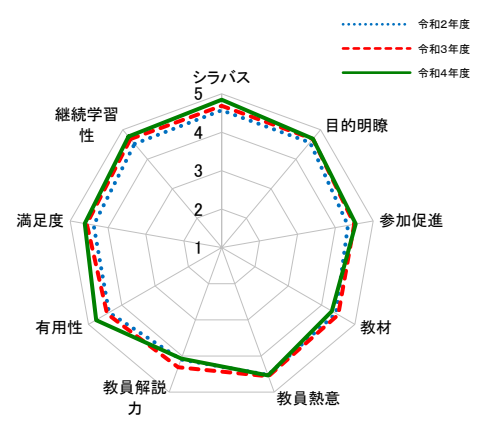
氏名：林 久志

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

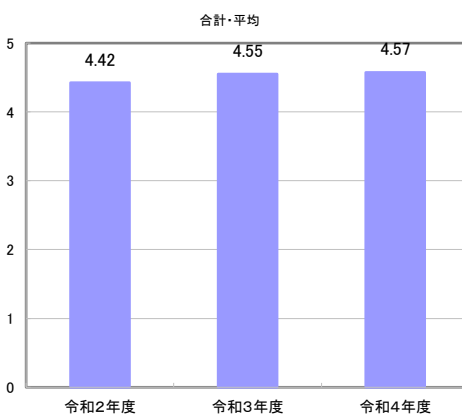
○わかりやすかった、面白かったというポジティブな感想が増えた。
 「題材がとても面白かったです。」
 「講義が非常にわかりやすかったです。」
 「これまでどうしてもうまく理解できずに苦しんでいた部分を一気にスッキリさせることができ、感動しました。」
 「ステップバイステップで確実に理解を固めることで、講義終盤の応用編の非常に難しい内容も理解が進みました。」

○グループワークは好評だった。
 「グループワークも面白かったです。」
 「グループワークで他のメンバーと共同作業ができた点(が良かった)」
 「グループ演習は、とても助かりました。」
 「グループワークなどによって生徒間の理解程度の共有や説明し合いができ、とても有意義に感じました。」

○遠隔講義は好評
 「通学しなくて大変助かります。」
 「遠隔でも受講できるのは仕事で遅くなりそうな時などとても助かりました。」
 「通学の負担が減り、良かったです。」
 「社会人にとって、非常に有難い。」
 「遠隔も録画もいずれも仕事と学修の両立にとって非常に大きな効果があり、大変助かりました。」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

本講義は本質的に難しい内容を段階的に解説するものであるが、本年度の学生の理解度は結果的には高かった。
 講義内容に関しては、ほぼ完成してきた。
 あとは、細かな微調整を重ねていく。

最終回で、最新の発展的トピックを紹介しており、これも好評である。
 この内容は、毎年、更新していく。

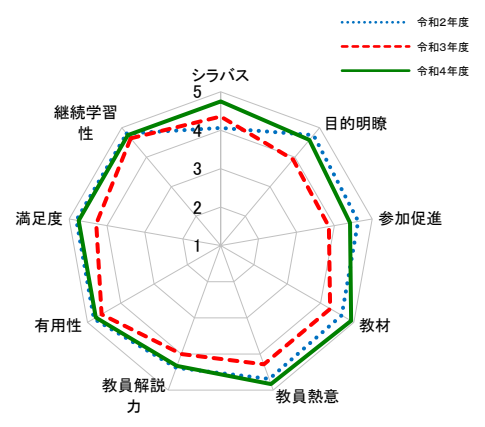
「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：データサイエンス特別演習

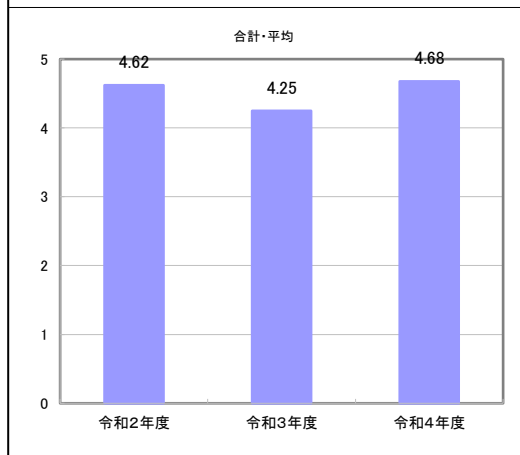
氏名：浅野/小畑/宮津

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

平日は働いている学生も多く、予習と復習に取りくむ時間を確保するのが難しいことから、自身のペースで学習する学生が多く、講義資料の見やすさ・わかりやすさ(予習・復習のし易さ)が重要だと思われる。また、ある程度前に提供することも求められている。演習形式の授業であるため、説明通りに上手くプログラム等が走ればよいが、そうでない場合に気軽に質問できる環境が求められている。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

上記2つの点から、まずは自習できる程度の内容とレベルで、事前に目を通すことが可能なタイミングで講義時資料が準備されていることが望ましい。また、講義のペースについても、詰め込み過ぎでは消化不良となりやすいので、短い時間ではあるが余裕持った授業を心がける必要がある。さらに、各回とも授業内容およびプログラム動作等についての質問を受ける機会と時間を多く設けることで受講生の満足度は向上すると思われる。また場合によっては、躓きやすいポイントなどに対する補足資料を復習用教材として講義後に配信することも有効と思われる。

2022 年度 後期

コースごとのアクションプラン (PBL)

- 1 事業設計工学コース科目
- 2 情報アーキテクチャコース科目
- 3 創造技術コース科目

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名：事業設計工学特別演習2

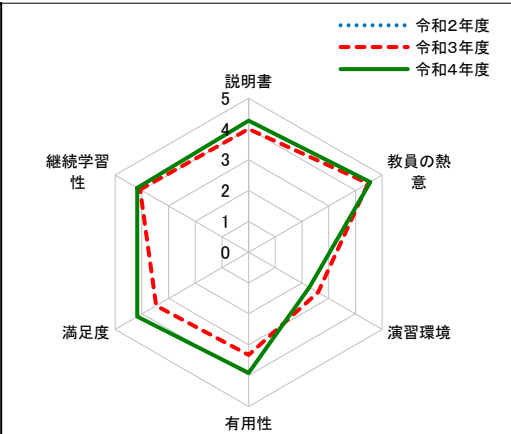
1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

∴ ポジティブな意見 ∴

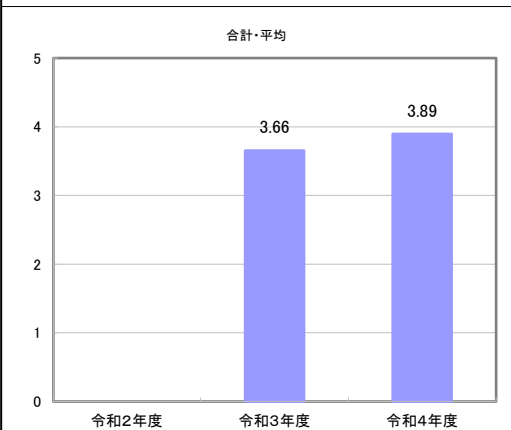
- バックグラウンドの異なるメンバーでの活動ができた。
- 多角的な視点から知見を得ることができた。
- 事業設計工学コースとしてのコンピテンシー能力獲得の一つイントラプレナーを目指す自身の資質向上に大いに役立った。

∴ ネガティブな意見 ∴

- 可能であれば研究倫理委員会の審査手続きに時間がかかる点を改善して頂きたい。
- 年間のスケジュール管理についてはもう少し基準を設けた方がよいと思う。
- 学生の活動のモニタリングやそれに基づいた指導を強化した方がよい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

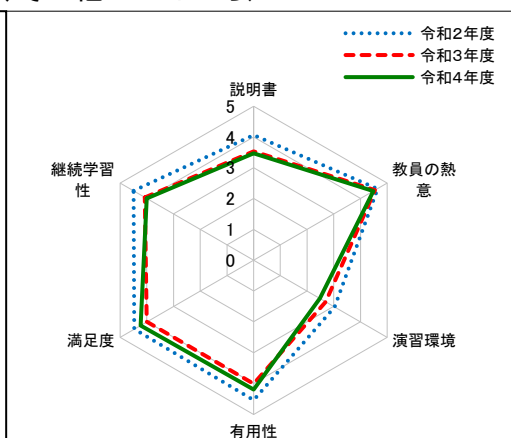
フィールドワークや実験において、研究倫理委員会の審査が必要な場合があるため、あらかじめガイダンスなどで手続き時間を要する点や手続き方法などを共有することにより、活動が円滑に進むような工夫を推進する。また、PTによって年間の活動内容やフェーズが異なるため、教員各々で学生にスケジュールなど活動内容の大まかな流れを示せるようにすることを推進する。学生への面談等の機会を増やすだけでなく、学生が相談しやすい体制ができるように改善を図る。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

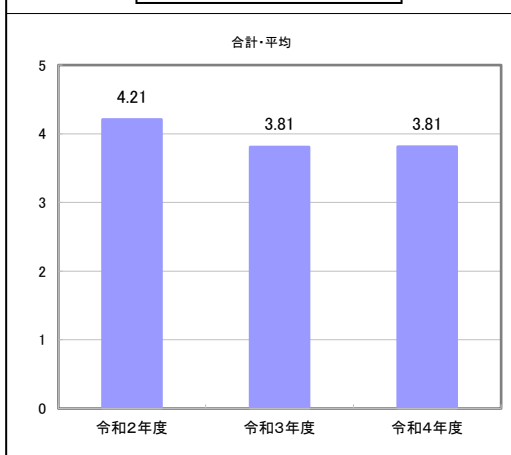
講義名：情報システム学特別演習2

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

平均点によると、高い順番に自己学習量、教員の熱意、意欲的参加となっている。PBLでの学修は学生の高いモチベーションと教員の熱意により支えられていると言える。一方、最も低いのがシラバスであり、次に演習環境と継続的学修で、これらについては改善が求められる。前年度よりも全体の平均は若干高くなった(4.09から4.11)。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

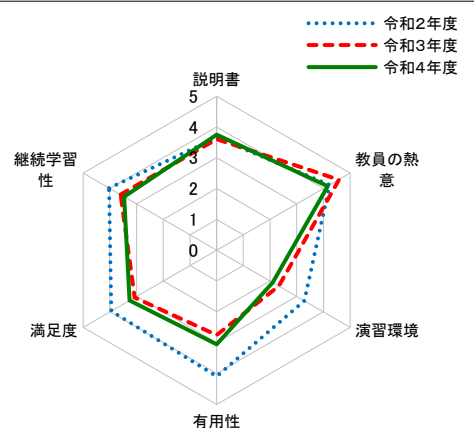
コメントによると、遠隔形式でのPBL実施は概ね肯定的に受け入れられている。それに対して、成果発表会での形式やビデオ配信に関しては疑問を持つ学生がいた。教員との関係性は、親身な指導、レビューや論文指導などの点が評価されて良好な学生がいる一方で、学生の学習目標とのギャップが生じる場合の対応に不満の声もあったので、教員と学生とのコミュニケーションをより円滑にし、学生の声を吸い上げて行くことが肝要だろう。

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

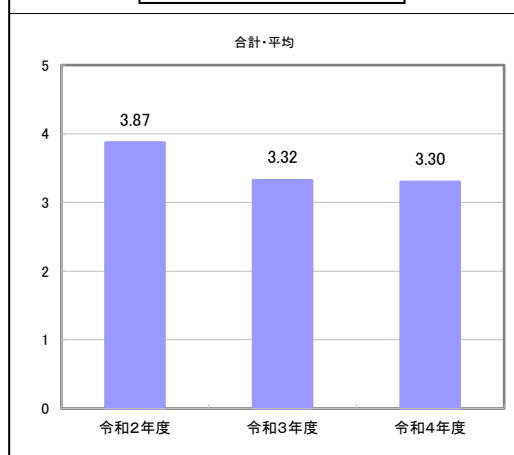
講義名：イノベーションデザイン特別演習2

1 学生の評価から重要と思われる点(右のグラフや、その他コメントから)

教員の熱意は4.22で評価が高いものの、全体の平均点が3.49であり、他コースPBLや他の講義よりも点が低めである。演習環境の評価が3.22で低いが、上期の2.28よりは改善されている。コロナ対策での夢工房利用制限が徐々に緩和された影響と思われる。しかしながら、学生間、教員・学生間の人間関係で不満を持つ学生のコメントが目立ち、コミュニケーション不足を感じる。一方、オンラインミーティングに対する肯定的な意見も多い。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

コロナ対策が緩和されるにつれ、学内施設利用制限に付随する不満は徐々に減っていくと思われる。その一方、PBLのオンライン化の恩恵を受けている学生も多い。しかしながら、オンライン化により、コミュニケーションに問題のありそうなPTも見受けられる。今後はポストコロナ社会において、効果的なオンラインによるPBLの実施方法を模索していく必要がある。

[執筆者]

東京都立産業技術大学院大学（令和5年3月現在）

橋本 洋志	東京都立産業技術大学院大学学長
吉田 敏	東京都立産業技術大学院大学産業技術研究科長
中鉢 欣秀	東京都立産業技術大学院大学産業技術専攻長
板倉 宏昭	東京都立産業技術大学院大学教授
内山 純	東京都立産業技術大学院大学教授
追川 修一	東京都立産業技術大学院大学教授
奥原 雅之	東京都立産業技術大学院大学教授
越水 重臣	東京都立産業技術大学院大学教授
小山 裕司	東京都立産業技術大学院大学教授
嶋津 恵子	東京都立産業技術大学院大学教授
高嶋 晋治	東京都立産業技術大学院大学教授
飛田 博章	東京都立産業技術大学院大学教授
林 久志	東京都立産業技術大学院大学教授
前田 充浩	東京都立産業技術大学院大学教授
松尾 徳朗	東京都立産業技術大学院大学教授
三好 きよみ	東京都立産業技術大学院大学教授
三好 祐輔	東京都立産業技術大学院大学教授
村越 英樹	東京都立産業技術大学院大学教授
伊藤 潤	東京都立産業技術大学院大学准教授
細田 貴明	東京都立産業技術大学院大学准教授
大久保 友幸	東京都立産業技術大学院大学助教
河西 大介	東京都立産業技術大学院大学助教
木下 修司	東京都立産業技術大学院大学助教
黄 緒平	東京都立産業技術大学院大学助教
柴田 淳司	東京都立産業技術大学院大学助教
田部井 賢一	東京都立産業技術大学院大学助教
張 晁逢	東京都立産業技術大学院大学助教
中島 修	東京都立産業技術大学院大学助教
松井 実	東京都立産業技術大学院大学助教
今給黎 隆	東京都立産業技術大学院大学非常勤講師
上條 英樹	東京都立産業技術大学院大学非常勤講師
川名 周	東京都立産業技術大学院大学非常勤講師
小酒井 正和	東京都立産業技術大学院大学非常勤講師
蓮池 公威	東京都立産業技術大学院大学非常勤講師
真鍋 敬士	東京都立産業技術大学院大学非常勤講師
山崎 泰宏	東京都立産業技術大学院大学非常勤講師

東京都公立大学法人

東京都立産業技術大学院大学

AIIT FD レポート第34号 2024年2月

発行：東京都立産業技術大学院大学 FD 委員会

〒140-0011 東京都品川区東大井 1-10-40

<https://aiit.ac.jp/>